名越ヶ谷遺跡（No.231）

大町四丁目 1888 番の一部

例　　言

1．本報は、「名越ヶ谷遺跡（№231）」内、大町四丁目1888番の一部における、埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成19年6月25日～同年7月25日にかけて行い、調査面積は24㎡である。

3．発掘調査体制は以下のとおりである。

調査担当者：山口　正紀（鎌倉市文化財課臨時的任用職員）

調　査　員：原　廣志・福田　誠（鎌倉市文化財課嘱託職員）

鈴木絵美・小野夏菜・栂岡ケイト（鎌倉市文化財課臨時的任用職員）

作　業　員：佐藤美隆、金丸義一、永井雄一郎、堀住　稔（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

4．現地での写真撮影は山口が行った。

5．本報作成にあたっての資料整理参加者及び分担は以下のとおりである。

整理参加者：山口・赤堀祐子・岡田慶子・須佐仁和・本城　裕・吉田桂子・渡辺美佐子（鎌倉市文化財課臨時的任用職員）、椎木達哉（鶴見大学大学院）

遺物洗浄：鎌倉市シルバー人材センター

遺物注記・接合・分類：山口・本城・吉田・椎木　　遺物実測：山口・本城・渡辺

遺物・遺構トレース：山口・岡田・吉田　　遺構・遺物図版作成：岡田・山口・赤堀

観察表・写真図版作成：山口　　遺物写真撮影：須佐

原稿執筆：山口

6．本報告に係わる出土品及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7．本調査にかかる出土遺物の注記は遺跡名を「NG0705」と略して記した。

8．本報の凡例は以下のとおりである。

各図における基本縮尺は、以下のとおりである。同時に、各図に縮尺を表記している。

挿図縮尺　全測図：1/80　遺構図：1/40　遺物図：1/3

遺構図版　水糸高は海抜標高値を示す。

遺物図版　釉薬の範囲は•‐•‐•、加工・使用痕は←・→で範囲を示す。また、遺物にみられる煤痕は黒く塗りつぶし表現している。

遺物観察表　（　）は復元数値、［　］は遺存数値を示す。手捏ね成形の底径範囲は口縁部下位の外底指頭痕との稜部の直径と平置きした時の接地面の直径を示す。

9．本報記載の「土丹」は凝灰質泥岩、「鎌倉石」は粗粒凝灰岩を示す。

10．現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

汐見一夫、原　廣志、馬淵和雄、社団法人鎌倉市シルバー人材センター

目　次

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と環境 …… 265

1．遺跡の位置
2．地理的・歴史的環境
3．周辺遺跡の調査成果

第二章　調査の概要 …… 271

1．調査の経緯と経過
2．測量軸の設定
3．堆積土層

第三章　検出遺構と出土遺物 …… 276

1．1面の遺構と遺物
2．2面の遺構と遺物
3．3面の遺構と遺物
4．4面の遺構と遺物

第四章　まとめ …… 301

挿　図　目　次

図1　調査地点と周辺遺跡 …… 265
図2　調査区と建築範囲 …… 271
図3　国土座標位置図 …… 272
図4　国土座標とグリッド配置図 …… 273
図5　調査区壁土層堆積図 …… 274
図6　1面全測図 …… 276
図7　1面土坑・ピット …… 277
図8　1面各遺構出土遺物 …… 278
図9　1面遺構外出土遺物 …… 279
図10　1面構築土中出土遺物 …… 280
図11　2面全測図 …… 281
図12　2面柱穴列1・2 …… 282
図13　2面土坑・ピット …… 283
図14　2面土坑出土遺物 …… 284
図15　2面ピット出土遺物 …… 286
図16　2面遺構外出土遺物 …… 288
図17　3面全測図 …… 289
図18　3面土坑・ピット（1）…… 290
図19　3面土坑・ピット（2）…… 291
図20　3面各遺構出土遺物 …… 293
図21　3面遺構外出土遺物（1）…… 294
図22　3面遺構外出土遺物（2）…… 295
図23　4面全測図 …… 296
図24　4面土坑・ピット …… 297
図25　4面各遺構出土遺物 …… 298
図26　4面遺構外出土遺物 …… 300

表　目　次

表１　遺物観察表（１）……302
表２　遺物観察表（２）……303
表３　遺物観察表（３）……304
表４　遺物観察表（４）……305
表５　遺物観察表（５）……306
表６　遺物観察表（６）……307
表７　遺物観察表（７）……308
表８　遺物観察表（８）……309
表９　遺物観察表（９）……310
表10 遺物観察表（１０）……311
表11 層位別出土遺物一覧表 ……312

図　版　目　次

図版１ ……313
　１．１面全景（南から）
　２．１面全景（北から）
　３．１面土坑１（南から）
　４．１面上東播系捏鉢出土状況（南から）
図版２ ……314
　１．２面土坑１（南から）
　２．２面全景（北から）
　３．２面柱穴列（南から）
　４．２面P5・10・４（南から）
　５．２面P8・７・９（南から）
　６．２面P2・12（南から）
図版３ ……315
　１．３面全景（南から）
　２．３面全景（北から）
　３．３面土坑４内出土かわらけ（東から）
　４．３面土坑６内出土常滑甕（南から）
図版４ ……316
　１．４面全景（南から）
　２．４面P1・８（南から）
　３．調査区東壁土層堆積状況（北西から）
　４．調査区北壁土層堆積状況（南から）
図版５ ……317
　出土遺物（1）
図版６ ……318
　出土遺物（2）
図版７ ……319
　出土遺物（3）
図版８ ……320
　出土遺物（4）
図版９ ……321
　出土遺物（5）
図版10 ……322
　出土遺物（6）
図版11 ……323
　出土遺物（7）

第一章　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

本遺跡名称である名越ヶ谷遺跡は鎌倉市域の南東に位置する名越切通しに向かう県道鎌倉・葉山線の北側一帯に位置し、東側には鎌倉で最高峰の衣張山（標高126ｍ）が複雑に入り組んだ大小の支谷と平地の広範囲で構成される。名越ヶ谷は奥行1000ｍ以上、谷幅500ｍ以上を測る範囲を指し、現住所表記は大町三丁目、四丁目、六丁目、七丁目に所在する。

名越ヶ谷内には周囲の複数の小谷戸からの流水や衣張山を水源とする逆川が谷戸のほぼ中央を南下し、大町大路の南辺りで西へと流れを変え、材木座一丁目上河原で滑川に合流する。本調査地点（図１）は西に近接して逆川があり、その名越ヶ谷内の開口部奥、ＪＲ横須賀線鎌倉駅から南東に約1000ｍ、鎌倉市大町四丁目1888番の一部に所在する。

神奈川県遺跡台帳における谷戸内の遺跡名は、山稜部を除いて、本調査地点の遺跡名である名越ヶ谷遺跡（№231）、中央東側のやや広い南東に延びる谷戸を慈恩寺跡（№230）、北西部に名越山王堂遺跡（№234）、北端部に北条時政邸跡（№235）、調査地点南東に位置する安国論寺遺跡（№323）が登録されている。また、遺跡地南辺を東西に走る県道鎌倉・葉山線を境に、南側には大町二丁目を範囲とする米町遺跡（№245）が拡がる。

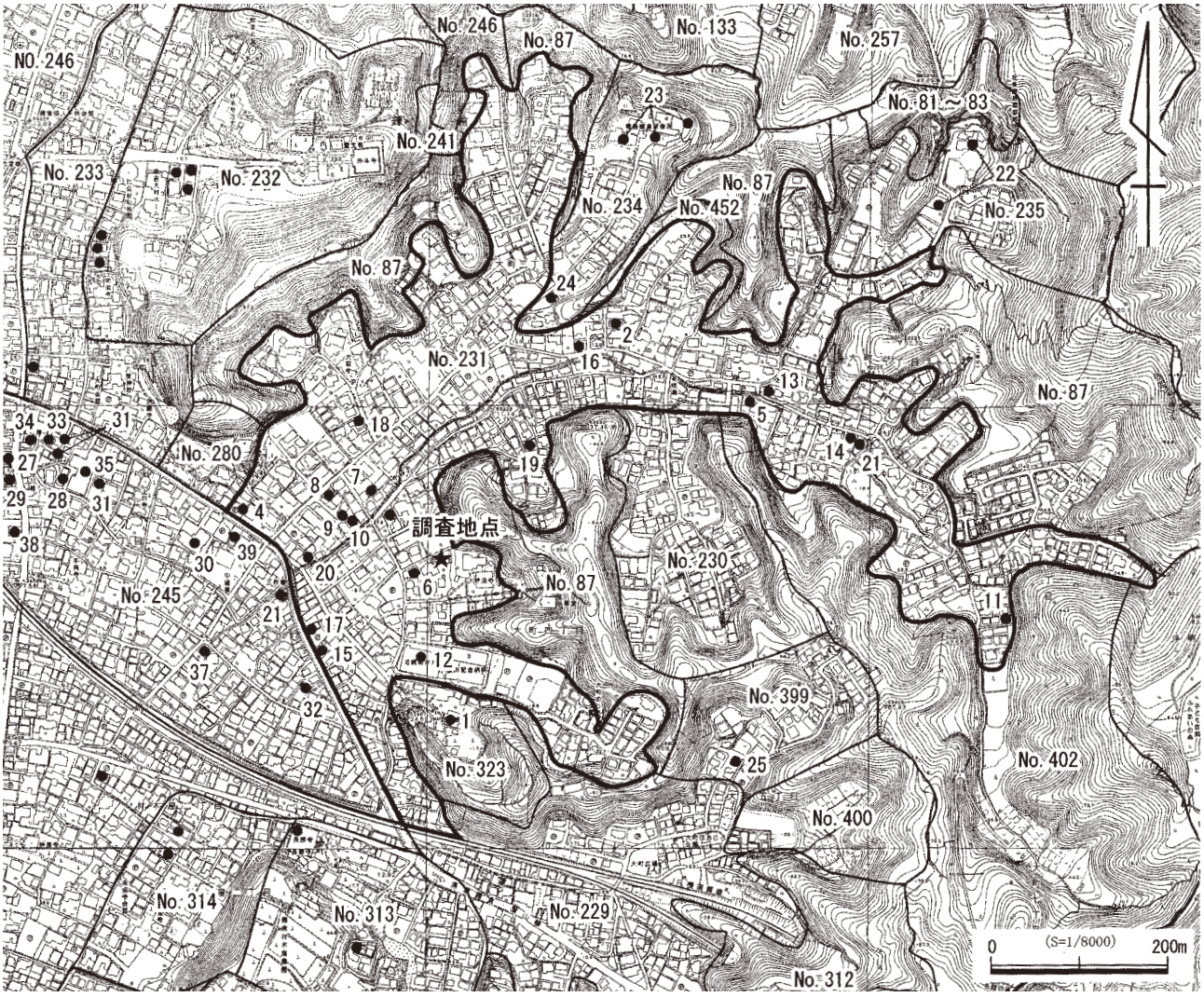


図１　調査地点と周辺遺跡

２．地理的・歴史的環境

鎌倉市内を東西に走る県道鎌倉・葉山線は、長谷観音前から鎌倉市の主要幹線道路である若宮大路の中間部に位置する下馬四つ角交差点を通り、鎌倉七口に数えられる名越切通しの下を通る名越隧道、逗子を通り三浦まで至る道路が横断する。鎌倉時代には下ノ下馬から名越坂、もしくは長勝寺付近にかかる範囲を大町大路と想定され、名越坂を越えて逗子の沼浜、三浦郡へと通じていた。若宮大路や小町大路と大町大路が交叉する周辺が中世鎌倉の商工業の中心地、「大町」であったことに由来し、「町大路」とも称された。また、源頼朝入府以前には稲村ヶ崎から三浦半島に入る古東海道筋の一つで、鎌倉の東西を結ぶ主要な交通路であったと想定される。

大町大路が三浦に抜ける一帯の地域を名越といい、このあたりの坂及び切通しが難所で「難越（＝越え難し）」と呼ばれたことが由来とされる。「名越」という名称が文献資料に見られるのは、『吾妻鏡』建久三（1192）年七月十八日条で、北条政子が北条時政の「名越御立館浜御所」を産所にしたとあるのが初見であり、建永元（1206）年二月四日条に、二代将軍源実朝が「名越山」（谷戸周辺に連なる山の総称か）で雪見をし、相州（＝北条義時）の山荘において和歌の会に臨む記事など、同資料にもしばしば散見される。このような記述から、鎌倉時代初期の頃より地名として成立していることがわかる。奈良・平安期には鎌倉郡内にある七郷の一つ、現二階堂荏柄天神から大町付近までを含む一帯に荏草（えがや）郷という郷名が在る。名越はその内の小字であったと考えられ、南方の光明寺辺りまでをも含めた広範囲を総称していたようだが、頼朝入府後に鎌倉の内となったとされる。この地は鎌倉東部の出入口になる空間で、幕府を開く前後の時期には地勢的な部分からみれば交通・防御の要所となり、幕府要職など御家人などが居を構えている記録も多く残っている。

「名越殿」と呼ばれた北条時政が遺跡名称にも見られるとおり、釈迦堂切通し周辺に「名越亭」あるいは「浜御所」と云われた館をもち、前述したように政子の御産所に使用された旨や実朝元服の儀を行った背景などがみられる。さらに、義時の名越山庄もあったとされており、その子朝時が譲り受け「名越氏」と名乗るようになってから、名越亭を本拠地としているが、当時、二ノ鳥居付近から海岸部飯島までの広大な範囲が「名越」の内に入っており、「浜御所」という海岸部付近を想像させる呼称などを考慮すると、現在の名越ヶ谷内に位置していたことは考えにくい。また、そのうちには多数の支谷が含まれていることから、特定できる位置は不明とせざるをえない。そのほか、名を残すものに新羅三郎義光が後三年の役後、館を構え、後に佐竹秀義なども居住したと伝えられる佐竹屋敷や名越文庫が在ったと伝える三善善信邸はこの域内であるとされている。

現在、谷戸の開口部には寺院が集中してあり、東方支谷に四つの小谷戸から成る松葉ヶ谷がある。谷内には妙法寺、安国論寺、長勝寺があり、調査地点の東の小谷戸に妙法寺、南に安国論寺、長勝寺が現存している。いずれも日蓮宗である。

妙法寺は山号を楞厳山。開山は日蓮、中興開山を日叡とされる。寺地は日蓮の松葉ヶ谷御小庵の跡といわれ、『新編相模国風土記稿』によれば初めに日蓮を開山とする本圀寺が京都に転じたため、護良親王の遺子日叡が正平12［延文２］（1357）年、同地に伽藍を再興したと伝える。

安国論寺は山号を妙本山。開山は日蓮。寺伝では建長五（1253）年に日蓮が安房国から鎌倉に来たのち草庵した地とされる。境内には『立正安国論』を執筆したという巌窟がある。文応元（1260）年七月、北条時頼に『立正安国論』をすすめ、災難の禍根は近時盛行している浄土念仏・阿弥陀信仰にあるとして鎌倉の僧徒たちの怒りを買い、焼打ちにあった。その法難の跡地とも伝えられている。安国論寺の南、県道鎌倉・葉山線と横須賀線線路を隔てた場所に長勝寺が在る。

長勝寺は山号を石井山と号し、開山は日蓮、開基は石井長勝という。京都本圀寺の前身で、日蓮に帰依した石井長勝の創建という説、あるいは貞和元（1345）年、京都に移った本圀寺旧地を日静が再興したと

いう説がある。

調査地点西方の小谷戸には、開山を日出とする多福山一乗院大宝寺がある。『相模国風土記』では、佐竹義盛が応永六（1399）年、鎌倉に多福寺を建立したが、早くに廃寺になってしまい、そこに日出がまた寺を立て、前の寺号を山号にしたのであろうとしている。また、寺域は佐竹屋敷という伝承があり、寛政八（1796）年の鐘銘に「名越佐竹屋舗多福寺大宝寺　日顕代」とあるのが根拠としている

上記の寺院のほかに、名越ヶ谷内には廃寺の記録が残る慈恩寺、木束寺、山王堂、田代観音堂などがある。足利直冬の菩提寺で臨済宗、禅宗寺院の慈恩寺は花ヶ谷にあり、山号を白華という。元亨三（1333）年の『北条貞時十三年忌供養記』にはこの寺の名が記されており、すでに鎌倉時代には成立していたことは明らかである。そのほかの史料から文明末（1485年）には廃絶していた模様である。また、同じ谷戸内に木束寺という寺院があったとされるが詳細な記録は残っていない。

北西部に位置する山王ヶ谷には宗旨未詳であるが山王堂があったとされる。『吾妻鏡』建長四（1252）・建長六（1254）・弘長（1263）年条には、それぞれ火災によって延焼の記事があり、『山王霊験記』には名越山王堂の絵がわずかに見られる。鎌倉時代中期には存在していたが、その後の動向などがわからず、廃絶した時期も不明である。

３．周辺遺跡の調査成果

名越ヶ谷遺跡内での発掘調査はこれまで約20地点行われており、調査地周辺の谷戸開口部に集中して実施されている。以下、過去の調査地点における結果を踏まえ、周辺の様相を概観していく。はじめに、開口部周辺での７～10地点は逆川の西側に位置し、中世前期の様相が明らかになっている。７地点では13世紀前半期、逆川旧流路の西側に付随する護岸施設が検出されている。中世基盤層を削り設置されているのを初めに、木組み単体や木組みと石積みで構成される施設の組み直しが３回以上あることが明らかになっている。また、基盤層から落ち込む場所から古代以前の遺物が出土している。その後実施された10地点の調査では、７地点の流路の延長が確認されていて、９地点では掘立柱建物２棟と井戸、多数の柱穴が検出されていることから、逆川西側に位置する武家屋敷あるいは寺院の一角と推測されている。また、未報告だが20地点でも逆川の西側落ち込みが確認されている。開口部西端に位置する２地点では５時期以上の生活面と大町大路と同軸方向の掘立柱建物とそれに沿って泥岩で版築したＬ字形の通路などが発見されている。さらに、本調査地点南西に位置する６地点でも５時期以上の生活面とそれに伴う掘立柱建物が２時期、中世以前の落ち込みが一部確認され、両地点とも出土遺物から13世紀初頭～15世紀代と幅広く土地利用されている。

谷戸の奥に入っていくと中間部に２・16地点がある。２地点では４時期の遺構面が確認され、中世基盤層である４面では掘立柱建物に近接して目障塀と思われる板壁が残存しており、13世紀中葉～後葉にかけての武家屋敷地内にある建物と考えられている。16地点では14世紀中頃～後半期に、現在の道路と並行する道路状遺構が検出され、現在に至るまで道筋に変化がない様相が窺えた。14世紀前半期には炉址、鋳造遺構などの可能性を想定させる遺構も確認されているが、確証には至っていない。両地点から東に200ｍほどの位置に５地点がある。５時期以上の生活面が確認され、13世紀後半には庶民的居住域と想定される遺構群や遺物が検出され、14世紀代以降には寺院または武家屋敷地利用の際における谷戸造成の変遷を確認している。

谷戸の北端部に位置する22地点は北条時政邸跡の伝承地とされる範囲内において重要遺跡確認調査とする発掘調査が行われたが、調査結果からそれを示唆する遺構の様相は窺えず、掘立柱建物や礎石列、玉石敷き、火葬跡などが検出された。平場では13世紀後半から15世紀以降の谷戸造成の様相が明らかになり、周囲の山腹に日月やぐらや唐糸やぐらなど多数のやぐらが残っていることから、未知の宗教的な空間

という可能性が大きいと推測されている。後に、遺跡名称を「北条時政邸跡」から「大町釈迦堂口遺跡」に名称変更されている。

上記のように名越ヶ谷内は、武士の邸宅あるいは寺院・やぐらに示されるような宗教的空間であった地域であることが少なからずわかり、開口部においては古代以前の土器片が出土していることから、古東海道であったとされる大町大路周辺には中世以前の土地利用の様相も窺える。

次に、県道南側に拡がる米町遺跡での主な調査結果もわずかながらみていく。28地点では北半部に掘立柱建物、南半部では逆川に向かい傾斜がつき、鉄滓や鞴の羽口など金属生産に関係する遺物が多数出土していることから、それに関連した場所であると推測される。北側に近接した31地点では、隣接して２ヶ所の調査区が設定され、北側調査区では鎌倉時代後～末期の道路遺構とする泥岩版築面が検出された。これと同一とする続きの遺構が35地点の北部で２時期検出されている。13世紀中～後葉と思われる時期に佐助ヶ谷遺跡（税務署用地）と同類の間取りのある簡素な構造もつ板壁建物群が確認されており、都市内における庶民居住区もしくは工人の作業場という様相を示している。以上の調査地点は、小町大路と言われる若宮大路東側を南北に縦貫する道路の東辺、現在逆川が蛇行した場所に立地しており、その結果から工人関係の遺構や遺物が確認されていることは、大町大路との関係やこの一帯の生活空間を考える上で興味深いことである。

逆川の西側に位置した27地点では井戸や方形竪穴建物群や土坑が数多く検出ざれ、13世紀代の遺物が出土している。東側に位置する30地点でも同様に井戸、方形竪穴建物が検出され、13世紀前半から14世紀中頃までの年代観が考えられている。このように、米町遺跡内では13世紀前半期には遺跡が成立しており、古代以前にも土地利用がみられる。

引用・参考文献

石井進ほか編　1989『よみがえる中世３　武士の都鎌倉』平凡社
鎌倉市史編集委員会　1959『鎌倉市史　社寺編』吉川弘文館
河野眞知郎　1995『中世都市鎌倉―遺跡が語る武士の都―』講談社メチエ49
白石永二編　1976『鎌倉事典』　東京堂出版
高橋慎一朗　2005『武家の古都、鎌倉』日本史リブレット21　山川出版社
永原慶二・貴志正造　1977『全譯　吾妻鏡』第二巻　新人物往来社
永原慶二・貴志正造　1977『全譯　吾妻鏡』第三巻　新人物往来社
永原慶二・貴志正造　1977『全譯　吾妻鏡』第四巻　新人物往来社
貫達人・川副武胤　1989『鎌倉廃寺事典』　有隣堂
三浦勝男編　2005『鎌倉の地名由来辞典』東京堂出版社

調査地点一覧

図１には神奈川県遺跡台帳に登録されている遺跡名称を番号のみ表記した。対応する名称は末尾に記す。また、報告・未報告のやぐら調査に関しては図には示さなかった。

安国論寺（№323）

１：1973年３月調査。松尾宣方　1983「45．安国論寺境内　大町四丁目1947番」『鎌倉市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』鎌倉市教育委員会

名越ヶ谷遺跡（№231）

２：1985年８月調査。玉林美男　1986「３．名越ヶ谷調査　大町三丁目1367番４地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書２　昭和60年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

３：1993年５月調査。田代郁夫・大坪聖子　1995「１．名越ヶ谷遺跡　大町四丁目1880番６外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成６年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育委員会

4：1993年７月調査。菊川英政　1995「４．名越ヶ谷遺跡（№231）　大町三丁目1217番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成６年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育委員会
5：1996年２月調査。遠藤雅一・宗臺秀明・宗臺富貴子　1998「名越ヶ谷遺跡（№231）大町四丁目1736番２外」『鎌倉市埋蔵文化財調査報告書14　平成９年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育委員会
6：1998年12月調査。汐見一夫ほか　2000「名越ヶ谷遺跡（No.231）　大町四丁目1888番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16　平成11年度発掘調査報告（第２分冊）』鎌倉市教育委員会
7：2000年８月調査。手塚直樹・野本賢二　2002「名越ヶ谷遺跡（№231）大町三丁目1826番９地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第２分冊）』
8：2000年８月調査。宮田眞 諸星真澄 滝澤晶子　2001『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』名越ヶ谷遺跡発掘調査団・宮田事務所　―　大町三丁目2356番３地点
9：2001年１月調査。宮田　眞　2003「５．名越ヶ谷遺跡　大町三丁目2356－11地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』鎌倉市教育委員会
10：2001年４月調査。福田　誠　2003「９．名越ヶ谷遺跡　大町三丁目2356番10地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』鎌倉市教育委員会
11：2001年９月調査。森　孝子　2004「名越ヶ谷遺跡（No.231）　大町七丁目1615番８地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20　平成15年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育委員会
12：2001年11月調査。宮田　眞　2003「（医療法人財団額田記念会 老健ぬかだ 建設に伴う発掘調査）」『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』名越ヶ谷遺跡発掘調査団・有限会社博通
13：2001年11月調査。宮田　眞　2000「名越ヶ谷遺跡　大町三丁目2356番３地点」『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』名越ヶ谷遺跡発掘調査団・宮田事務所
14：2002年７月調査。汐見一夫・小泉衣理　2004「名越ヶ谷遺跡（No.231）　大町六丁目1708番４地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20　平成15年度発掘調査報告（第２分冊）』鎌倉市教育委員会
15：2003年２月調査。滝沢昌子　2006「04．名越ヶ谷遺跡　大町四丁目2395番２の一部外１筆」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22　平成年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育委員会
16：2003年４月調査。森　孝子　2004「鎌倉市大町三丁目1364－１の１部、他」『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』有限会社 博通
17：2005年７月調査。未報告　―　大町四丁目2406番１地点
18：2006年１月調査。未報告　―　大町三丁目1230番４外地点
19：2006年５月調査。未報告　―　大町四丁目1858番４地点
20：2007年12月調査。未報告　―　大町三丁目2353番２外地点
21：2010年５月調査。未報告　―　大町六丁目1708番23外地点

名越山王堂跡（№234）

23：1986年12月調査。斉木秀雄　1990「電通鎌倉研修所改築に伴う中世寺院跡の発掘調査報告」『名越・山王堂跡発掘調査報告書』山王堂跡発掘調査団
24：2005年８月調査。未報告　―　大町三丁目1362番１地点

大町釈迦堂口遺跡（№235）

22：2008年調査。永田史子・福田　誠　2009『大町釈迦堂口遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会

大町五丁目北廃寺跡（№399）

25：2000年２月調査。森　孝子・堀川浩通　2001「― 鎌倉市大町５丁目1991番３外 ―」『大町五丁目北廃寺跡発掘調査報告書』大町五丁目北廃寺跡発掘調査団・宮田事務所

米町遺跡（№245）

26：1988年７月調査。福田　誠　1989「１．米町遺跡　大町二丁目2411番２地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５　昭和63年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
27：1988年７月調査。原　廣志・田代郁夫　1990「４．米町遺跡　大町二丁目933番他」『鎌倉市埋蔵文化財緊急：調査報告書６　平成元年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
28：1993年７月調査。馬淵和雄　1995「３．米町遺跡　大町二丁目2315番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育委員会
29：1996年３月調査。田代郁夫・宗臺富貴子　1998「米町遺跡（No.245）　大町二丁目391番１」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14　平成９年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育委員会
30：1997年11月調査。宮田眞・滝沢晶子・諸星真澄　1999「米町遺跡発掘調査報告書　鎌倉市大町二丁目2338番１」米町遺跡発掘調査団・宮田事務所
31：1998年12月調査。齋木秀雄・降矢順子　2000「― 第６地点、第７地点発掘調査報告書 ―」『鎌倉遺跡調査会調査報告第20集　米町遺跡』鎌倉市米町遺跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会　―　大町二丁目2312番４・10他地点
32：1999年４月調査。福田　誠　2000「米町遺跡（No.245）　大町二丁目2404番の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調

査報告書16　平成11年度発掘調査報告（第２分冊）』鎌倉市教育員会
33：1999年９月調査。瀬田哲夫　2001「米町遺跡（No.245）　大町二丁目2313番15地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育員会
34：1999年12月調査。瀬田哲夫　2001「米町遺跡（No.245）　大町二丁目2308番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第２分冊）』鎌倉市教育委員会
35：2001年１月調査。齋木秀雄・降矢順子　2005「－ 第10地点 －」『米町遺跡発掘調査報告書』有限会社　鎌倉遺跡調査会　―　大町二丁目2320番１地点
36：2001年８月調査。馬渕和雄・鍛治屋勝二　2004「米町遺跡（No.245）　大町二丁目2324番１外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20　平成15年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育委員会
37：2003年８月調査。馬淵和雄・鍛治屋勝二 ほか　2008「米町遺跡（№245）大町二丁目2235番３地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
38：1988年３月調査。未報告　―　大町二丁目929番地点
39：2011年４月調査。未報告　―　大町二丁目９番10地点

№.	遺跡名称	№.	遺跡名称	№.	遺跡名称	№.	遺跡名称
81	衣張山やぐら群	229	長善寺遺跡	240	宝積寺跡	314	能蔵寺跡
82	釈迦堂口やぐら群	230	慈恩寺跡	257	釈迦堂遺跡	400	報満寺跡
83	釈迦堂口トンネル上尾根やぐら群	232	妙本寺遺跡	280	善導寺跡	402	名越砦遺跡
87	鎌倉城	233	小町大路東遺跡	312	名越坂古墓遺跡	452	山王堂東谷やぐら群
133	勝長寿院遺跡	241	鑪ヶ谷中やぐら群	313	長勝寺跡		

第二章　調査の概要

図２　調査区と建築範囲

１．調査の経緯と経過

平成19（2007）年３月、個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事に際して現地表から最大掘削深度１ｍまでの地盤改良工事をおこなうものであった。平成10年12月に本地点より西側40ｍほどの近隣の発掘調査が実施され、地表下60 cm以下に中世遺物包含層および遺構面の存在が確認されていることからその調査結果をもとに埋蔵文化財への影響が避けられないと判断し、確認調査を行わなかった。建築主との協議において工事計画の変更は困難との意向が示されたため、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整に続き、発掘調査の準備が整った平成19年６月25日から現地での発掘調査を実施した。敷地面積116.71㎡に対して建築面積＝調査対象面積は36.99㎡になるが、廃土置き場と調査予定期間の都合上、鎌倉市教育委員会文化財課の判断で建築範囲の中央部分約24㎡を対象とした（図２）。

地点５の調査結果をもとに、６月25日に建築主と施工業者の立会いの下、重機により一部表土掘削を行い、中世遺構を確認したのち、現代層30 cmほどを除去し、以下人力による作業で調査を進行した。

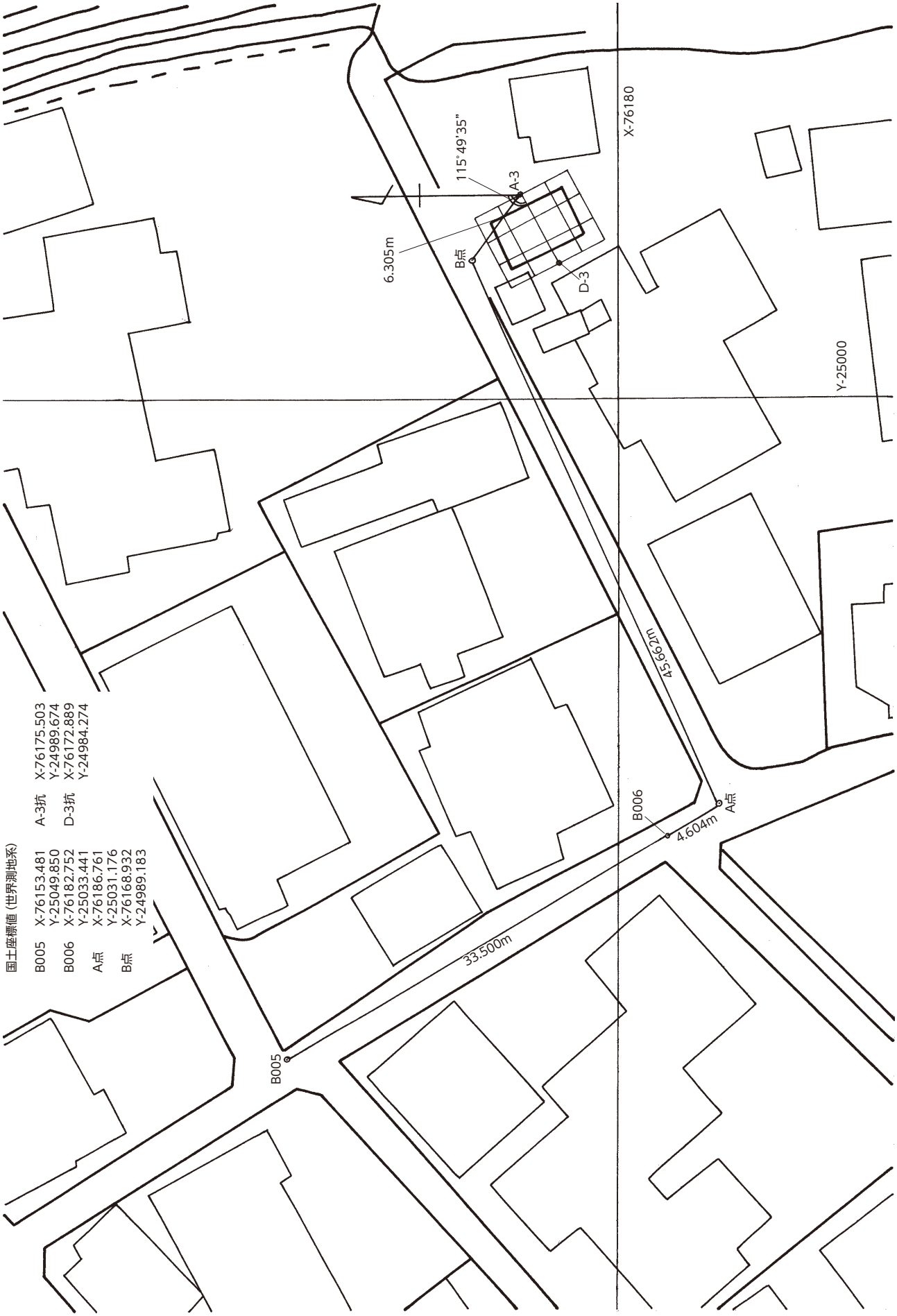


図３　国土座標位置図（1/400）

その結果、地表から深さ１ｍまでの間に４枚の遺構面を確認し、各面において柱穴・土坑を検出後、測量・写真撮影などの記録保存を行った。現地終了時には遺物天箱10箱分の遺物が出土した。

以下、作業経過を抜粋して記載する。

６月25日（月）　現地調査開始。重機による表土掘削。

６月29日（金）　機材搬入。

７月３日（月）　現地に測量用のグリッドを設定。鎌倉市３級基準点及び４級基準点より海抜標高値と国土座標値を測量点に移動。同時に１面遺構検出。

７月５日（木）　１面全景・個別写真撮影。全測図実測。

７月12日（木）　２面全景・個別写真撮影。全測図実測。

７月19日（木）　３面全景・個別写真撮影。全測図実測。

７月23日（月）　４面全景・個別写真撮影。

７月24日（火）　４面全測図実測。調査区北・東壁写真撮影および土層堆積図実測。

７月25日（水）　現地調査終了。機材撤収。

２．測量軸の設定

調査結果を記録保存していく上で、調査時の測量は便宜上、調査区にほぼ平行した任意の方眼軸を設けた。したがって、国土座標上の方眼軸とは一致していない。測量軸の設定には先行して調査地点敷地内にＡ－３杭とＤ－３杭を設定し、図３に示したように、調査地西側を南北に走る道路面上に設定された鎌倉市４級基準点Ｂ005とＢ006を用いて、調査測量基準点にあたるＡ－３杭とＤ－３杭に国土座標上の数値を移動した。測量軸は２ｍ方眼による軸線を用い、南北軸線には北から算用数字の１～５、東西軸線には東からアルファベットＡ～Ｄを付してグリッド設定を行った。Ａ－３杭とＤ－３杭の東西軸線は真北からＮ－115°49′35″－Ｗを測る。

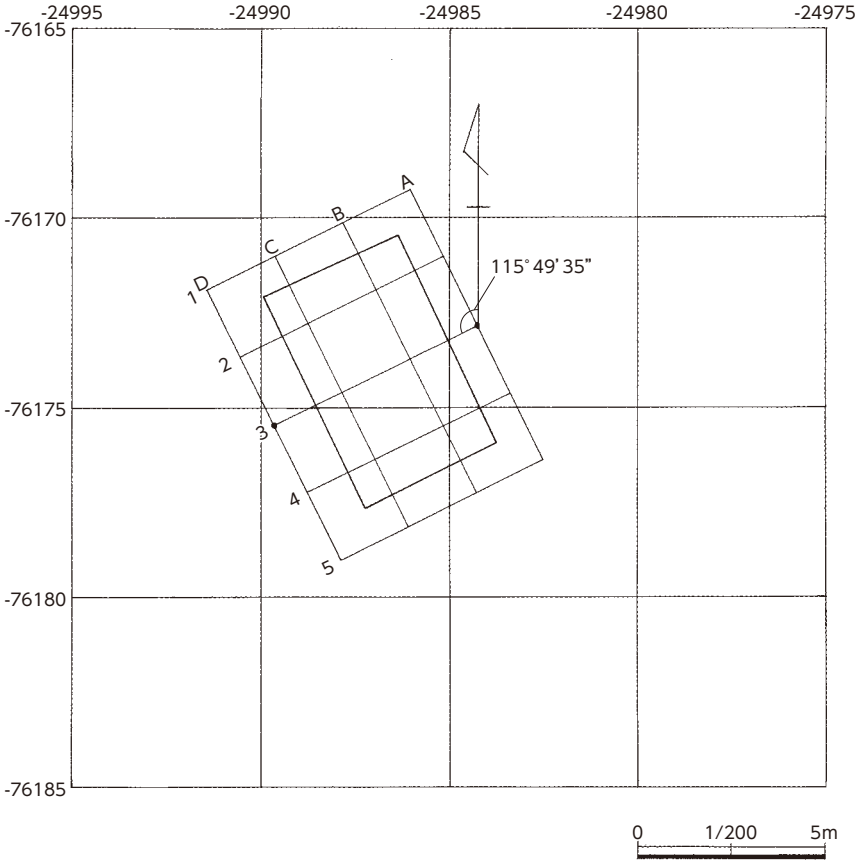


図４　国土座標とグリッド配置図

国土座標値に関しては、現地調査時において日本測地系（座標系AREA9）を用いて測量をした。後に整理作業段階において国土地理院ホームページに設置されている座標変換ソフト『web版TKY2JGD』により世界測地系第Ⅸ系の座標数値へ変換したものを図３に記し、調査地点と国土座標系の詳しい位置関係は図

4に示した。また、海抜標高値は、鎌倉市三級基準点№53229（標高11.168ｍ）を基に移設した。

3．堆積土層

本調査では地表から１ｍまでを地盤改良工事する施工計画になっており、調査を進める上で遺構や水抜き側溝など計画深度よりも深くなる部分は各関係者より掘り下げの了承を得ており、そこまでの範囲の堆積のみ確認した（図５）。以下、調査区内にて観察した土層堆積の状況を概観していく。

現地表は標高11.40 ～ 50ｍを測る、少量の近代遺物やコンクリート片を含む１層が最大20cmの厚さ

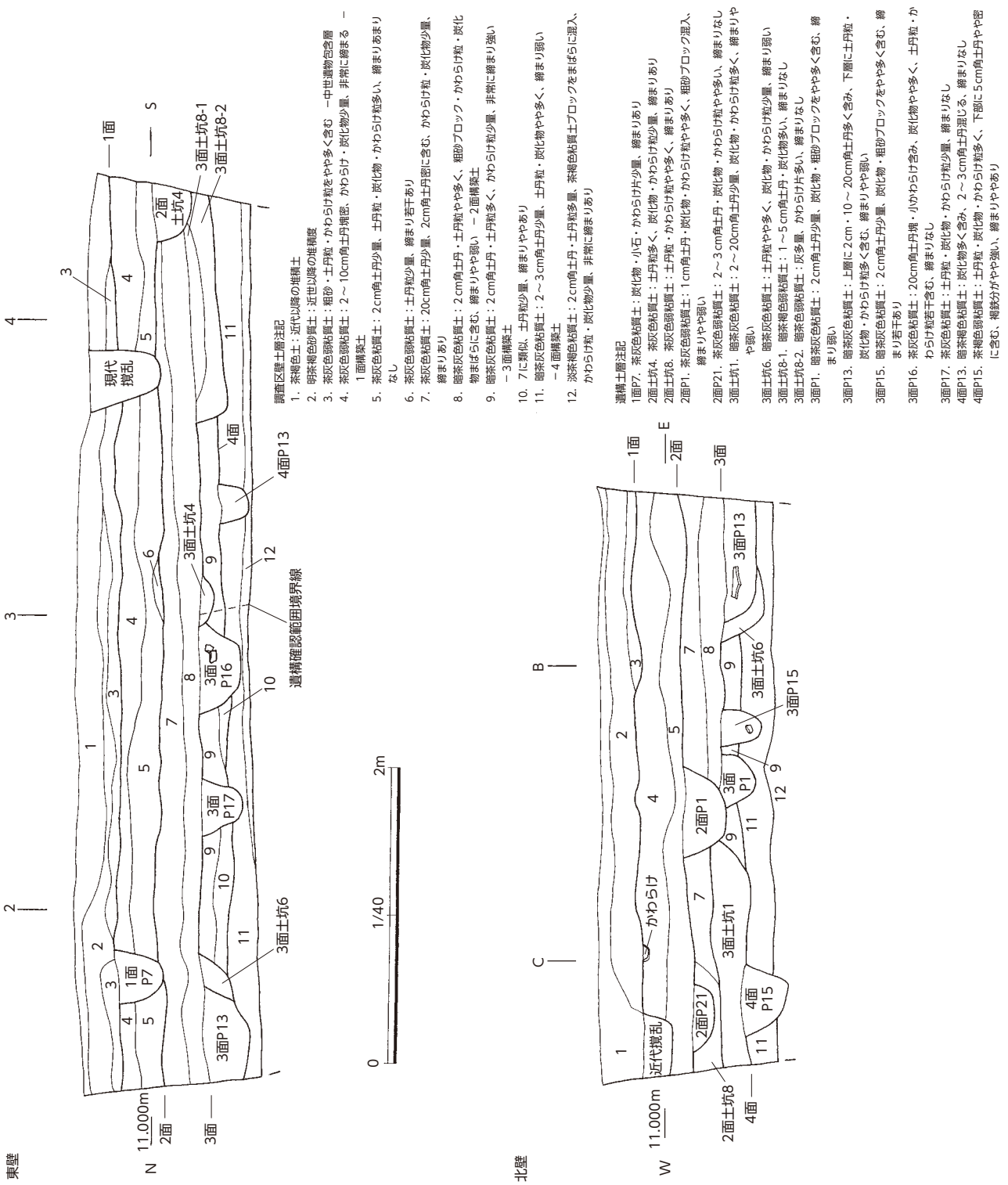


図５　調査区壁土層堆積図

で堆積しており、近世遺物を含む２層が北では厚く、南側では薄く堆積しているのがみられた。10cm大までの大小土丹塊で強く版築された茶灰色弱粘質土の４層上面を１面とし、その直上に小片の中世遺物を含む明茶褐色砂質土が薄く堆積を確認し除去し、１面検出に至った。４層は南側から北側に向かい、10cmほど傾斜しており、地表下30cm、標高11.20 ～ 11.10ｍ前後を測る。

調査時には遺構面を上層から順に４層の上面を１面、７層上面のやや弱い土丹地業面を２面、９層の細かい土丹地業面を３面、遺構検出は南側のみだが、11層上面を４面とした。

２面を検出するまでの間に茶灰色粘質土内に多量の遺物を含む５層や東壁中央付近に一部みられた土丹粒を含む６層の堆積があり、それらを除去すると、細かい土丹や炭化物が混じった、やや締りの弱い２面とした暗茶灰色粘質土で構築された７層がほぼ平坦に堆積している状況であった。必要な記録を終え、７層を除去すると、多量の遺物片を廃棄された８層が調査区内全体に拡がっている。その直下、標高11.60ｍほどに細かい土丹で非常に締まりの強い暗茶灰色粘質土の３面を構成する９層を確認し、３面とする遺構面の検出を行った。東（山）側に10cmほどの薄い10層の堆積が一部みられ、３面構築土直下に４面を構築する11層が標高10.50ｍ前後で平坦に拡がっていた。以下は１ｍ以上の掘削深度を超えるが、水抜き側溝の部分のみ堆積を観察し、12層であるかわらけ小片など中世遺物を含む淡茶褐色粘質土の堆積があることを確認した。

第三章　検出遺構と出土遺物

今回の調査では中世期における４期の遺構群が検出された。各面合わせて検出した遺構には、土坑30基、柱穴58口である。本報では調査によって検出した遺構とそれに伴い出土した遺物を上層から検出した遺構面ごとに報告していく。遺構に付した名称は調査時において便宜的に付したもので、遺構の新旧関係などに関係するものではない。また、図示できなかった実測不可遺物は別表にして認知できる範囲の個体数で、それ以外は破片数を含める形で表示した。なお、各遺構の説明にあたっては遺物が出土している遺構を優先したが、図示できる遺物がない場合の遺構に関して、重複関係や形状のわかる遺構については幾つか説明を加えた。また、各面において説明がない場合の遺構は概略表として、各面の末尾に表示した。

１．１面の遺構と遺物

近世耕作土と中世期の遺物を含む堆積土を除去し、地表下30 cmほどの位置に拡がるほぼ平坦な土丹地業面の１面を検出した（図６）。上面の標高は11.20ｍ前後を測る。検出した遺構は土坑５基、柱穴５口である。調査時の各遺構の検出標高は11.15ｍ前後である。調査区南側には東西に延びる現代の下水管による撹乱、北西部にも近世以降の撹乱によって遺構面を削平されていた。

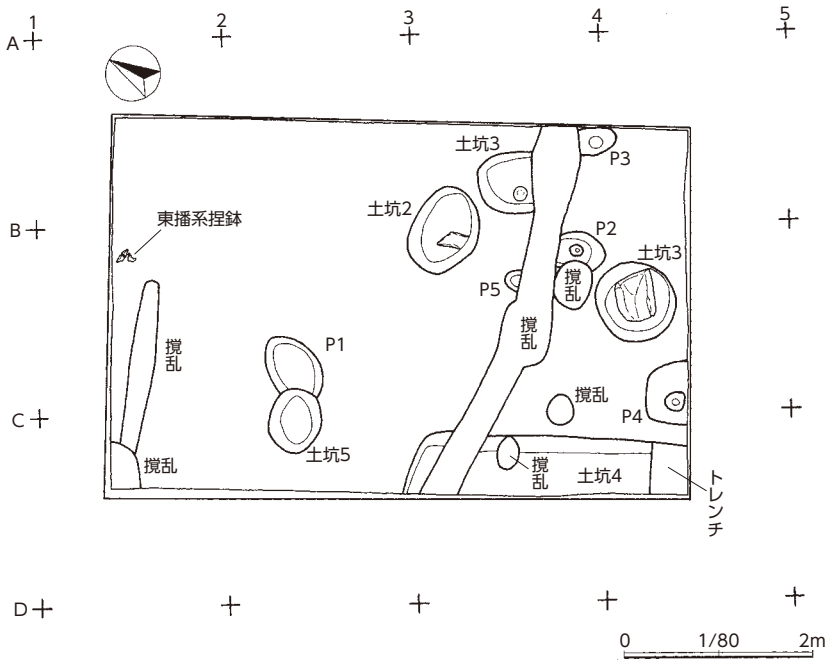


図６　１面全測図

土坑(図７・８、表１、写真図版１・５）

土坑１（図７・８、表１）

調査区南東部東壁、Ｂ－４グリッドの北東に位置する。南部を撹乱によって削平されており、東西径64 cm×南北径60 cm以上、深さ14～22 cm、底部標高10.94～11.00ｍを測る。図示可能な遺物は、かわらけ（１）が出土している。

土坑３（図７・８、表１）

調査区南部中央、Ｂ-４グリッドから南西の位置で検出した。確認規模は東西径85 cm×南北径90 cm、深さ20 cm、底部標高10.98ｍを測る。掘り方の平面形は円形を呈す。１～３cm角土丹多く、炭化物を少量含む茶褐色弱粘質土の覆土内に50 cm角、厚さ16 cmの土丹が廃棄されていた。大小かわらけが出土しているが図示できるものではなかった。

土坑４（図７・８、表１）

調査区西壁中央から南、Ｃ-３グリッドから南壁の範囲で検出した。確認できる範囲の規模は東西径66 cm×南北径約３ｍ、深さ24 cm、底部標高10.89ｍを測る。調査区西・南壁の外側に拡がっており、一部撹乱と土層確認トレンチにより削平される。出土遺物はかわらけ（２）、瀬戸窯皿（３）、火打石（４）、鉄釘（５・６）を図示し、そのほか常滑窯製品の甕の小片が出土している。

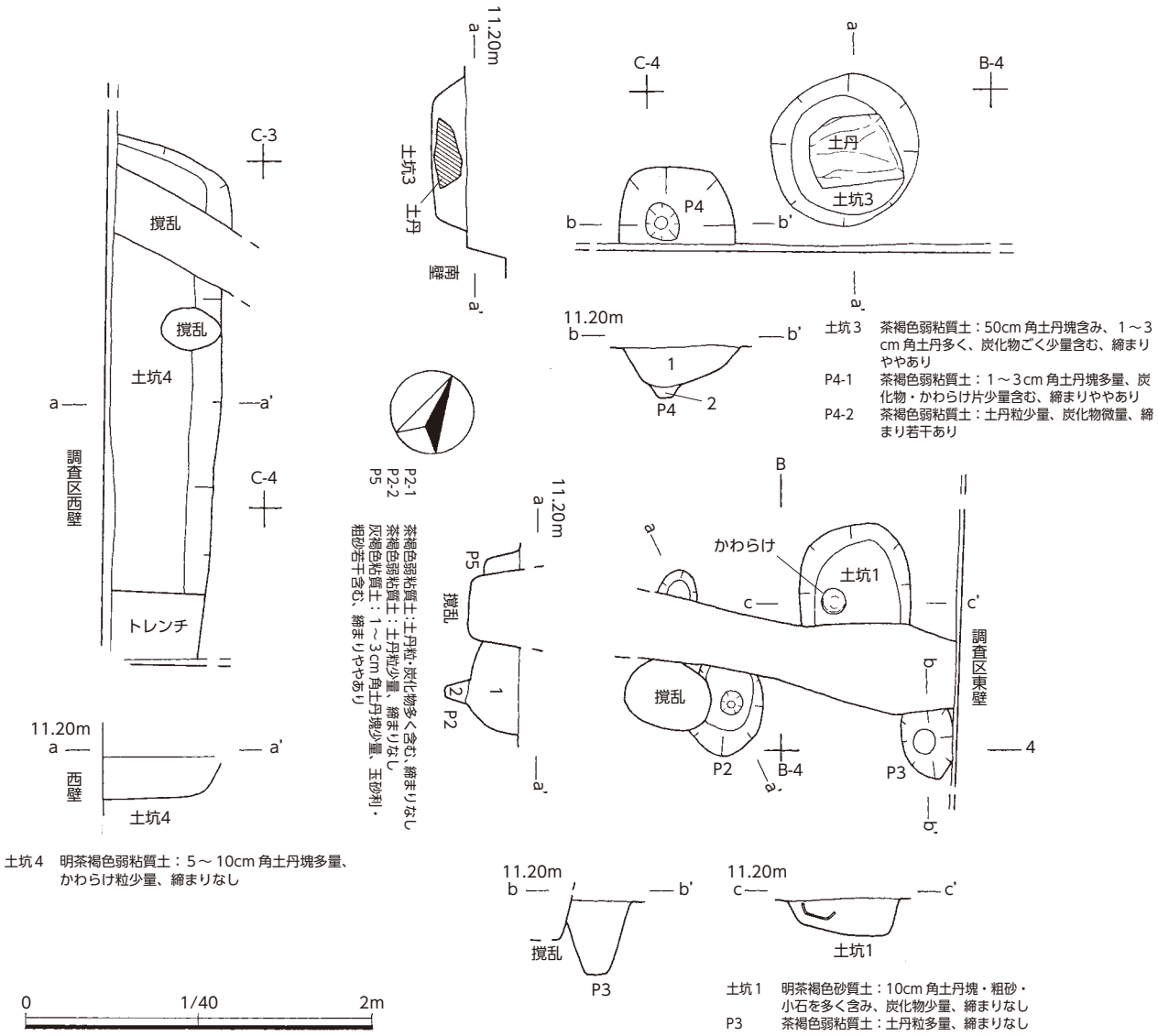


図７　１面土坑・ピット

ピット（図７・８、表１、写真図版１・５）

Ｐ２（図７・８、表１）

Ｂ－４グリッド付近に位置する。北側・西側は撹乱で削平されている。全体の規模は不明だが、推定東西径40cm×南北径50cm以上、深さ42cm、底部標高10.77ｍを測る。底部に柱の抜き痕と思われる12cm幅の円形を呈す痕があった。おそらく柱を取り除いた後に埋め戻されたのであろう。上層は土丹粒・炭化物を含み、下層は土丹粒を少量含む、両方とも茶褐色弱粘質土の覆土が堆積していた。かわらけ大皿と鉄釘（７）が出土している。

Ｐ３（図７・８、表１）

Ｂ-４グリッドの東に位置する。北側は撹乱で削平され、確認規模は東西径30 cm×南北径40cm以上、深さ42 cm、底部標高10.71ｍを測る。掘り方は不整円形を呈す。出土遺物はかわらけ小皿２片、常滑窯製品甕、図示可能な遺物は鉄釘（８・９）２点である。

Ｐ４（図７・８、表１）

調査区南壁際、Ｃ－４グリッド南側に位置する。南壁外側に拡がる。確認できた規模は東西径67cm×

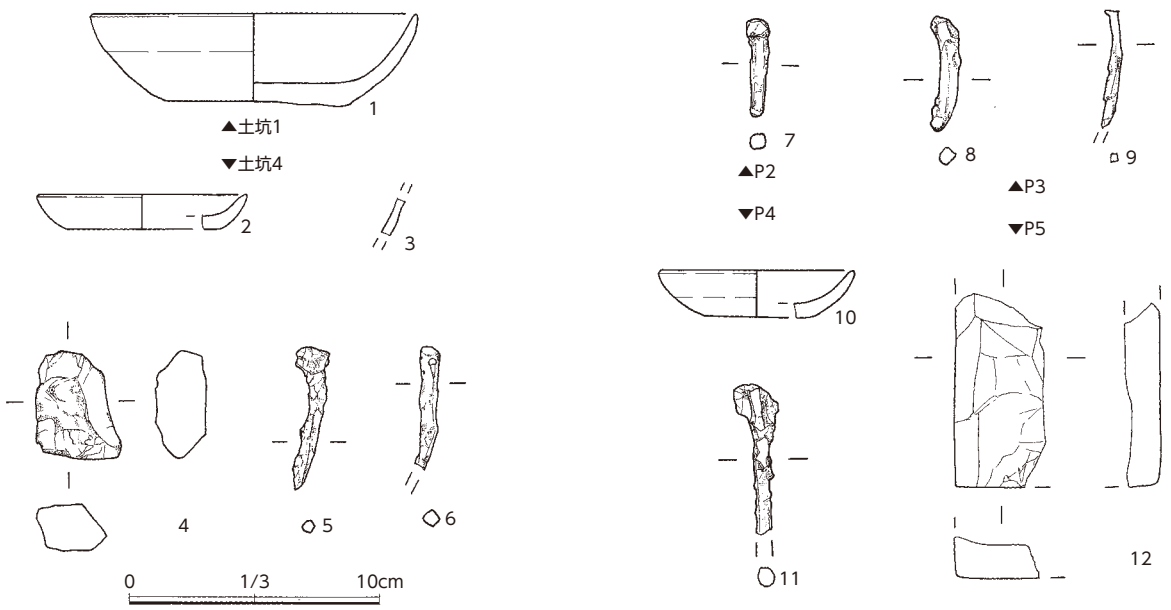


図８　１面各遺構出土遺物

南北径44cm以上、深さ30cm、底部標高10.84ｍを測る。Ｐ２と同様の掘り方で、２層の覆土が確認できた。上層は３cmまでの土丹が多く、炭化物・かわらけ片を少量含み、下層は土丹粒・炭化物を含む茶褐色弱粘質土である。Ｐ２と同様の掘り方をしているため建物などの柱穴と思われたが、調査区範囲内では確認ができなかった。Ｐ２との距離は190cmを測る。出土遺物はかわらけ大・小皿と鉄釘で、かわらけ小皿（10）と鉄釘（11）だけ図示した。

Ｐ５（図７・８、表１）

調査区南半部中央付近、Ｂ-４グリッドの北西付近に位置する。ほぼ撹乱に削平されている。確認規模は東西径23 cm以上×南北径16cm以上、深さ21 cm、底部標高10.99ｍを測る。掘り方の平面形は不明、浅い掘り方の遺構である。出土遺物はかわらけ大・小皿、図示可能な遺物は硯（12）１点だけである。

遺構名	平面形	検出標高（m）	東西径（cm）	南北径（cm）	底部標高（m）	重複関係
土坑２	楕円形	11.20	70	89	11.09	—
土坑５	楕円形	11.20	56	62	11.02	Ｐ１より新しい
Ｐ１	不整形	11.20	86	52	10.99	土坑５より古い

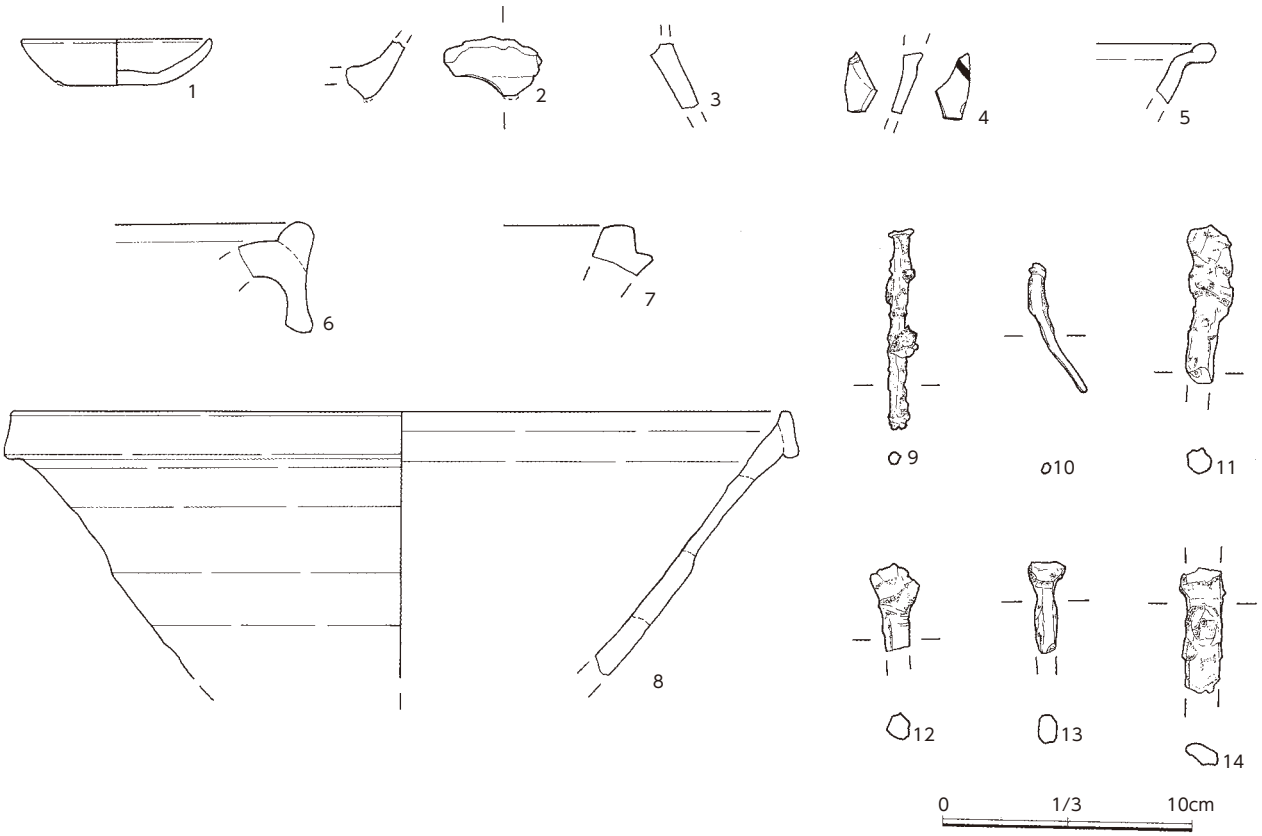


図９　１面遺構外出土遺物

１面遺構外出土遺物（図９、、表１、写真図版５）

出土遺物は図５に示した中世遺物包含層である３層からの遺物を図化した。その遺物総数は各面に比べると少量である。かわらけ（１）、高台が付くと思われるかわらけ質の土器（２）、かわらけ質で上下部に延長する燈明台と思われる土器（３）、青白磁の香炉と思われる小破片（４）、瀬戸窯折縁皿（５）、常滑窯甕（６）、滑石製鍋（７）、東播系捏鉢（８）、鉄釘（９・10）が出土している。

１面構築土中出土遺物（図10、表１・２、写真図版５・６）

１面を構築する４層から出土した総数226点のうち28点を図化した。かわらけ小皿（１～７）・中皿（８～10）・大皿（11～14）、龍泉窯系青磁劃花文碗（15）、瀬戸瓶子（16）、常滑窯壺の胴部片（17）・甕の口縁部（18・19）・同じく底部片（20）、片口鉢Ⅰ類（21）、常滑窯甕を転用した磨耗陶片（22）、伊予産の中砥（23）、上野産の中砥（24）、泥岩（土丹）を丸く加工した円板（25）、鉄釘（26～28）が出土している。

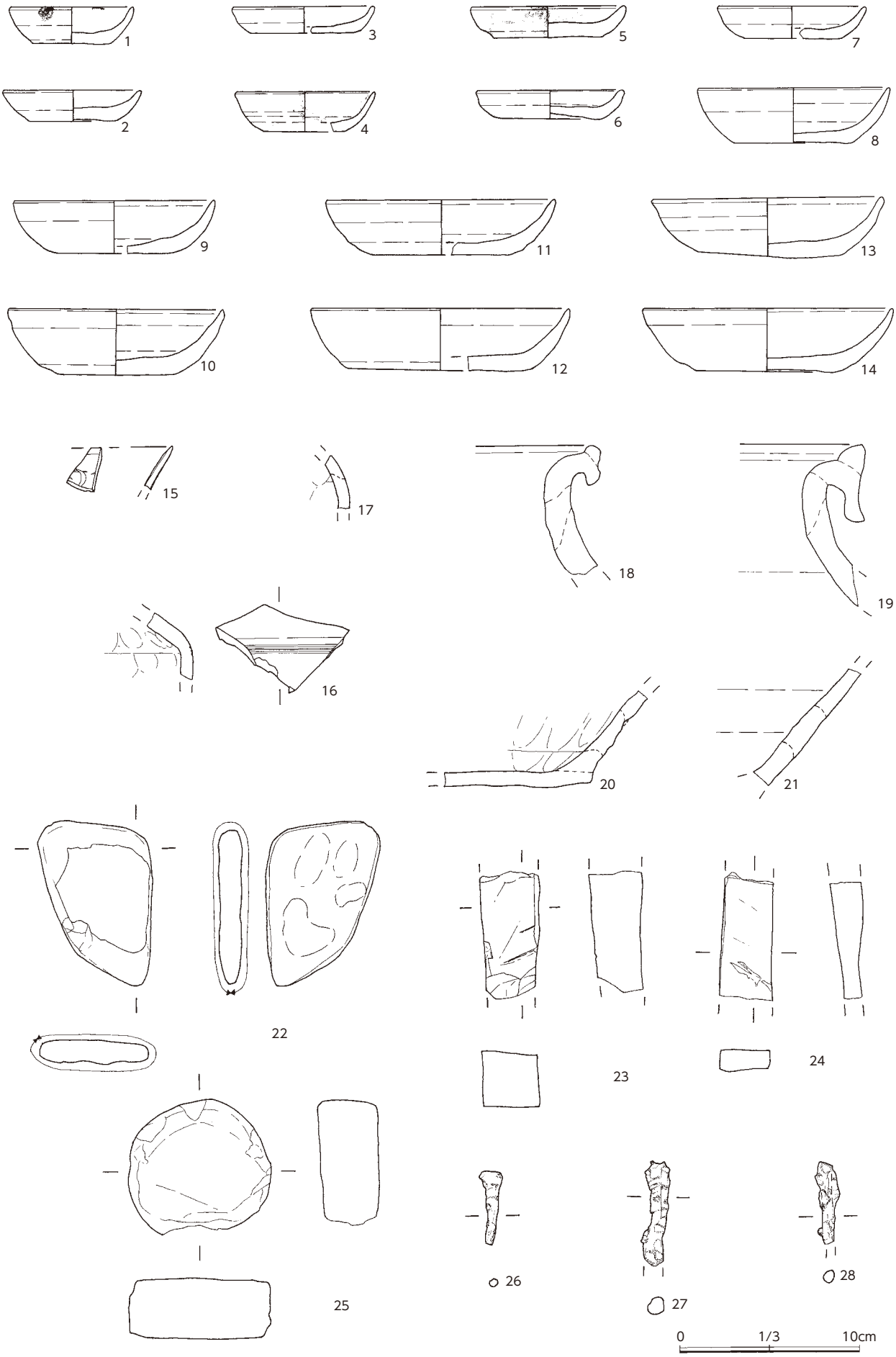


図10　1面構築土中出土遺物

２．２面の遺構と遺物

１面構築土（４層）と２面上に堆積する中世遺物包含層（５・６層）を除去すると、地表下40～60cm、標高11.00～10.80ｍを測る位置にあり、南側が高く、北に向かいやや下がっている２面を検出した（図11）。当面では、土坑８基、柱穴21口、その中に柱穴列を１列検出した。調査時の各遺構の検出標高値は10.80ｍ前後である。

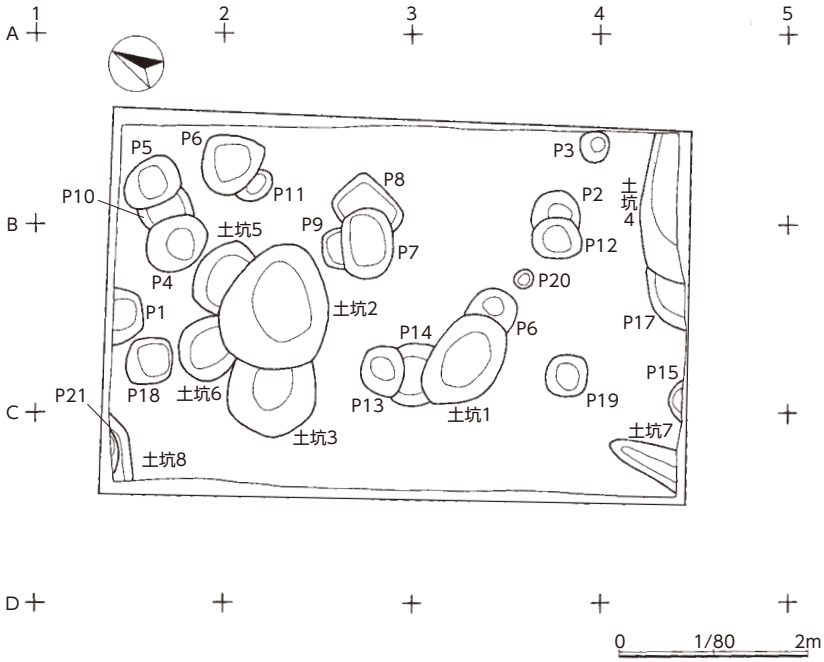


図１１　２面全測図

柱穴列（図12、表３・４、写真図版２・６）

柱穴列１（図12、表３・４）

調査区東半部の中央付近に並んで検出された。主軸方位はＮ－28°－Ｗを指す。同様の位置にして、北からＰ４・７・12とＰ10・８・２が切り合いながら並び、新旧関係は前者が新しく、それを柱穴列１とした。南北２間を検出し、柱間寸法は芯々で約200cmを測る。

Ｐ４の検出標高は10.80ｍ、掘り方平面は円形を呈し、東西径68cm×南北径60cm、深さ28㎝、底部標高10.51ｍを測る。覆土は土丹粒・炭化物少量含み、やや締まる茶褐色粘質土。出土遺物はかわらけ小皿（５）、瀬戸窯卸皿（６）が出土している。

Ｐ７の検出標高は10.86ｍ、掘り方平面は楕円形を呈し、東西径66cm×南北径60cm、深さ36㎝、底部標高10.50ｍを測る。覆土は５～７cm角土丹多く、炭化物がごく少量混じる、やや締まりのある茶褐色弱粘質土内に安山岩の伊豆石片が廃棄されていた。出土遺物は白磁口はげ皿（11）、青磁蓮弁文碗（12）、褐釉壺（13）、鉄釘（14）を図示した。

Ｐ12の検出標高は10.80ｍ、掘り方平面は楕円形を呈し、東西径46cm×南北径55cm、深さ20㎝、底部標高10.60ｍを測る。Ｐ４・７と比べるとやや浅く小型の遺構である。覆土は１～３cm角土丹多く、炭化物・かわらけ粒少量含み、やや締まる灰褐色弱粘質土。出土遺物はかわらけ中皿（19）、白かわらけ（20）、鉄釘（21）が出土している。

柱穴列２（図12、表３・４）

柱穴列１の東隣、削平されて検出された。主軸方位も同じくＮ－28°－Ｗを指す。北からＰ10・８・２が該当し、南北２間を確認した。両柱間寸法は芯々で約210cmを測る。各ピットの検出標高は柱穴列１と隣接してある切り合い関係にあるピットと同じ標高であり、その形状等は削平されているため不明瞭であるが形状・規模ともに同様の様相が窺える。

Ｐ２は南北径52cm、深さ24㎝、底部標高10.61ｍを測る。覆土は土丹粒・炭化物少量含む、暗褐色粘質土。図示できる遺物はない。

Ｐ８の南北径76cm、深さ26㎝を、底部標高10.59ｍを測る。覆土は３～５cm角土丹と炭化物、褐鉄を多く含む、締まりのない茶褐色弱粘質土。出土遺物はかわらけ大皿（15）、褐釉壺（16・17）、鉄釘（18）が出土している。

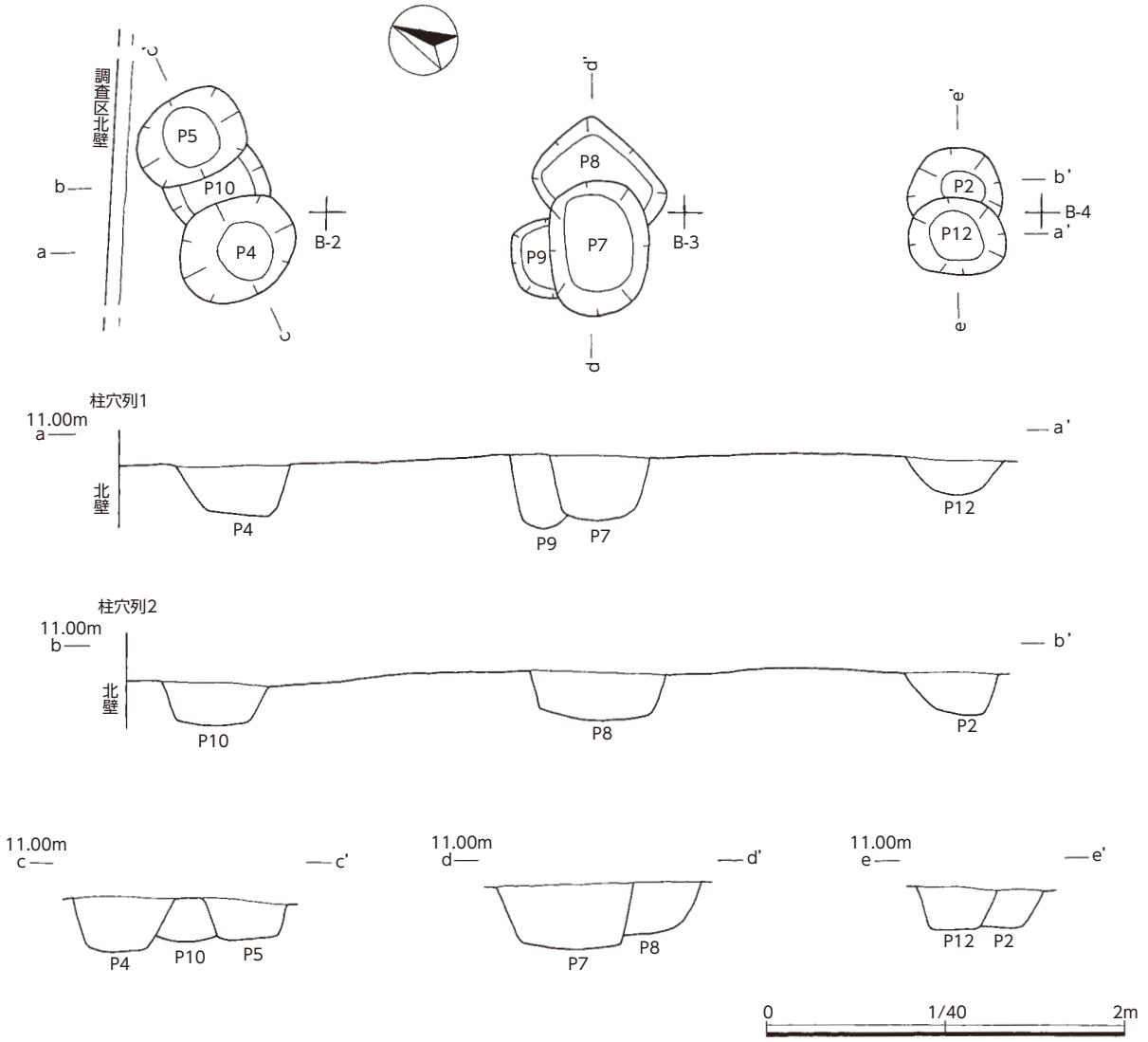


図１２　２面柱穴列１・２

Ｐ10は北側をＰ５により削平されており、南北径60cm、深さ24㎝を、底部標高10.56ｍを測る。覆土は茶褐色弱粘質土でＰ８と同一の堆積を観察できた。図示できる出土遺物はない。

土坑（図13・14、表２・３、写真図版２・６）

土坑１（図13・14、表２）

調査区中央付近、Ｃ－３グリッドの東に位置する。平面形は楕円形、規模は東西径72cm×南北径108cm、深さ24cm、底部標高10.64ｍを測る。図示可能な遺物は青磁碗（１・２）、褐釉壺小片（３～６）が４点、鉄釘（７）が出土しており、その他かわらけ大小皿、瀬戸窯碗、常滑窯壺の小片が出土しているが図示できなかった。

土坑２（図13・14、表２・３）

調査区北半部中央付近、Ｂ～Ｃ－２グリッド間に位置する。土坑３・５・６と重複関係にあり、その遺構群の中でも本址の方が新しい。掘り方平面は不整円形、断面すり鉢状、東西径138cm×南北径118cm、深さ32cm、底部標高10.53ｍを測る。茶褐色粘質土の覆土内から,多量のかわらけ片が出土し、かわらけ小皿（８～11)･中皿（12･13)･大皿（14～16)、白磁皿（17)、瀬戸窯皿･瓶子（18)、常滑窯壺･

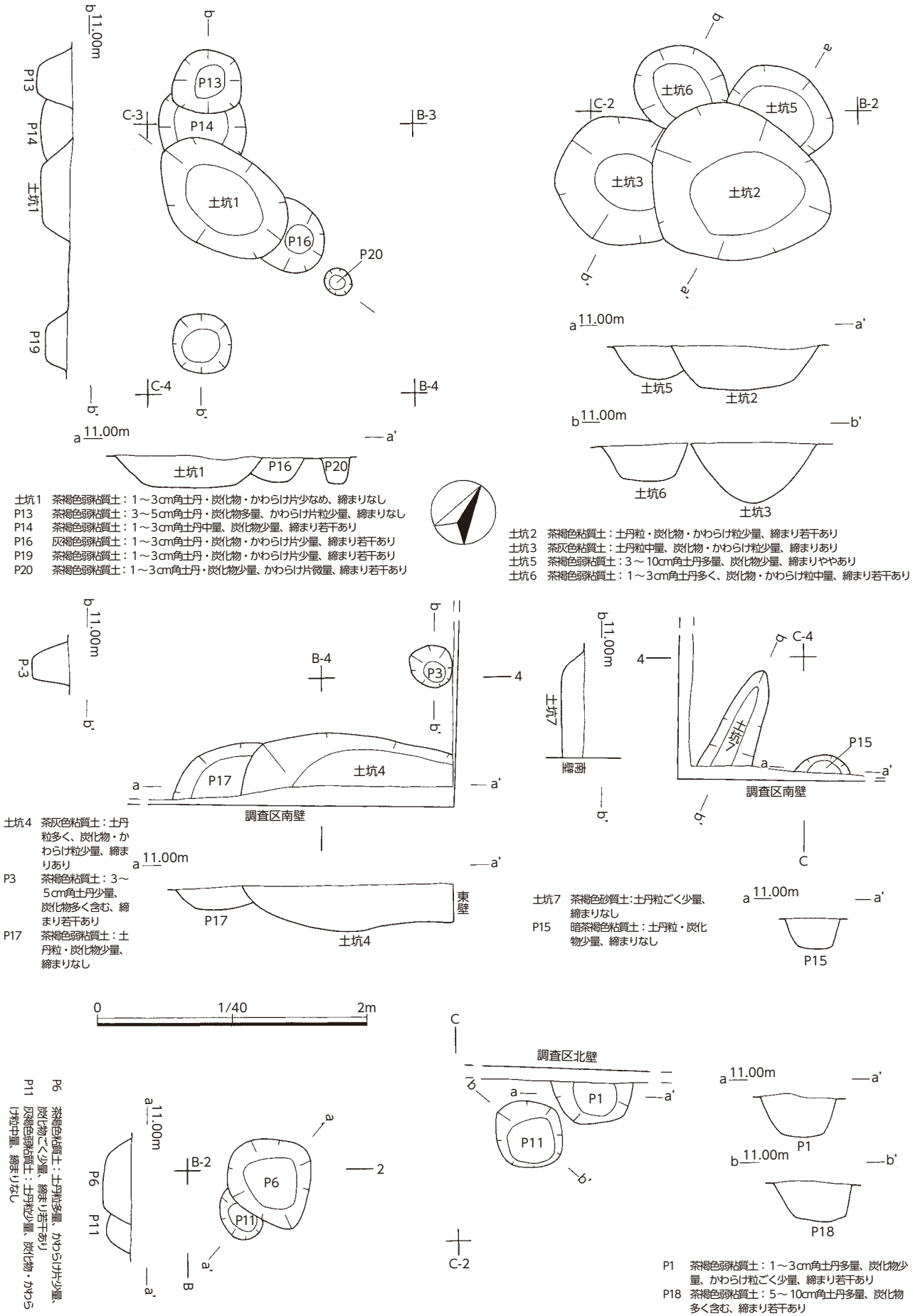

土坑1　茶褐色弱粘質土：1～3cm角土丹・炭化物・かわらけ片少なめ、締まりなし
P13　茶褐色弱粘質土：3～5cm角土丹・炭化物多量、かわらけ片粒少量、締まりなし
P14　茶褐色弱粘質土：1～3cm角土丹中量、炭化物少量、締まり若干あり
P16　灰褐色弱粘質土：1～3cm角土丹・炭化物・かわらけ片少量、締まり若干あり
P19　茶褐色弱粘質土：1～3cm角土丹・炭化物・かわらけ片少量、締まり若干あり
P20　茶褐色弱粘質土：1～3cm角土丹・炭化物少量、かわらけ片微量、締まり若干あり
土坑2　茶褐色粘質土：土丹粒・炭化物・かわらけ粒少量、締まり若干あり
土坑3　茶灰色粘質土：土丹粒中量、炭化物・かわらけ粒少量、締まりあり
土坑5　茶褐色弱粘質土：3～10cm角土丹多量、炭化物少量、締まりややあり
土坑6　茶褐色弱粘質土：1～3cm角土丹多く、炭化物・かわらけ粒中量、締まり若干あり
土坑4　茶灰色粘質土：土丹粒多く、炭化物・かわらけ粒少量、締まりあり
P3　茶褐色粘質土：3～5cm角土丹少量、炭化物多く含む、締まり若干あり
P17　茶褐色弱粘質土：土丹粒・炭化物少量、締まりなし
土坑7　茶褐色砂質土：土丹粒ごく少量、締まりなし
P15　暗茶褐色粘質土：土丹粒・炭化物少量、締まりなし
P6　茶褐色粘質土：土丹粒多量、かわらけ片少量、炭化物ごく少量、締まり若干あり
P11　灰褐色弱粘質土：土丹粒少量、炭化物・かわらけ粒中量、締まりなし
P1　茶褐色弱粘質土：1～3cm角土丹多量、炭化物少量、かわらけ粒ごく少量、締まり若干あり
P18　茶褐色弱粘質土：5～10cm角土丹多量、炭化物多く含む、締まり若干あり
0　1/40　2m

図１３　２面土坑・ピット

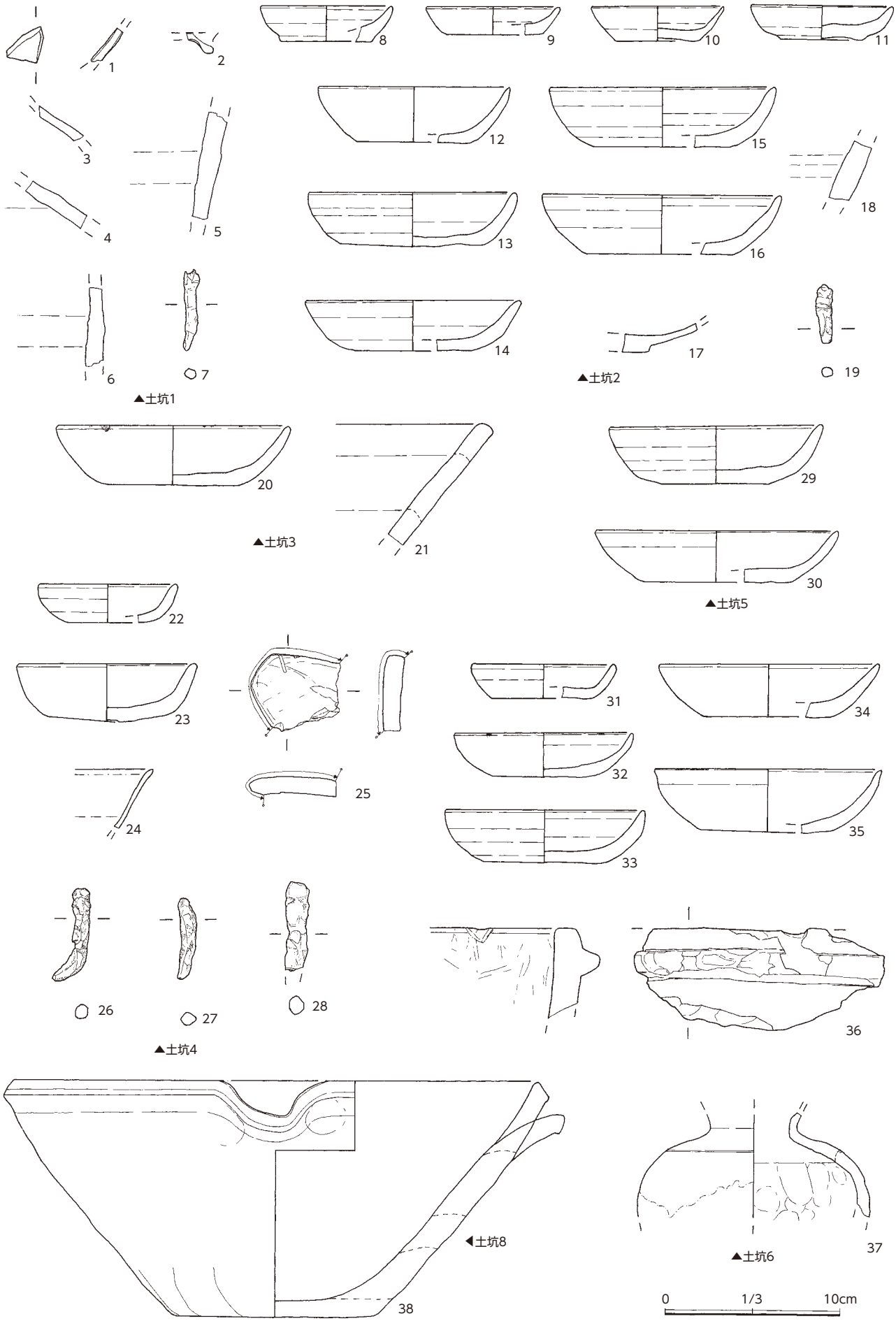


図１４　２面土坑出土遺物

甕・Ⅱ類片口鉢、火鉢、鉄釘（19）が出土している。

土坑３（図13・14、表３）

土坑２の西隣に位置し、東側を土坑２に、北側一部を土坑６により削平される重複関係にある。南北径96㎝、深さ45㎝、底部標高10.40ｍを測る。図示可能な遺物は、かわらけ大皿（20）、常滑片口鉢Ⅱ類（21）のみであった。

土坑４（図13・14、表３）

調査区南東部、Ｂ－４グリッドの南東に位置する。南壁外側に拡がり、確認できた規模は東西径158cm×南北径40cm、深さ34cm、底部標高10.55ｍを測る。図示可能な遺物はかわらけ小皿（22）・中皿（23）、白磁口はげ碗（24）、常滑片口鉢Ⅰ類片を転用した磨耗陶片（25）、鉄釘（26～28）３点である。

土坑５（図13・14、表３）

土坑２と重複関係にあり、南側を削平され検出した。確認規模は東西径80㎝、深さ24㎝を、底部標高10.64ｍを測る。図示可能な遺物はかわらけ大皿（29・30）２点であった。

土坑６（図13・14、表３）

土坑５の西隣、同様に土坑２に南側を削平され、西側一部を土坑５に削平され検出した。規模は東西径70㎝×南北径64㎝、深さ26㎝、底部標高10.61ｍを測る。図示可能な遺物はかわらけ小皿（31）・中皿（32・33）・大皿（34・35）、滑石製鍋（36）、常滑窯鳶口壺（37）、復元口径30㎝になる片口鉢Ⅱ類（38）である。

土坑７（図13・14）

調査区南西隅、Ｃ－４グリッドの南に位置する。確認できた規模は東西径36㎝×南北径80㎝、深さ16cmと浅く、南側外壁に拡がる。底部標高10.70ｍを測る。図示できる遺物はない。

ピット（図13・15、表３・４、写真図版２・７）

Ｐ１（図13・15、表３）

調査区北壁沿い、Ｃ－２グリッドの東側に位置する。北壁外側に拡がり、確認できた規模は東西径60cm×南北径40cm以上、深さ31cm、底部標高10.53ｍを測る。図示可能な遺物は瀬戸窯壺の高台部（１）、鉄釘（２・３）２点である。

Ｐ３（図13・15、表３）

調査区南東隅、Ｂ－４グリッド東側に位置する。平面形は円形、規模は東西径34cm×南北径32cm、深さ28cm、底部標高10.59ｍを測る。図示可能な遺物は常滑窯片口鉢Ⅱ類（４）１点である。

Ｐ５（図12）

調査区北東隅、Ｂ－２グリッドの北に位置する。柱穴列２の一部であるＰ10と重複関係にあり、その北側を削平している。平面形は楕円形、規模は東西径63cm×南北径46cm、深さ23cm、底部標高10.57ｍを測る。図示可能な遺物はない。

Ｐ６（図13・15、表４）

調査区北東部、Ｂ－２グリッドの東側に位置する。Ｐ11と重複関係にあり、本址の方が新しい。平面形は隅丸円形、規模は東西径66cm×南北径60cm、深さ20cm、底部標高10.70ｍを測る。図示可能な遺物は中野編年６ａ型式の常滑窯甕（10）１点である。

Ｐ11（図13・15）

Ｐ６の南に位置する。前述したようにＰ６と重複関係にあり、本址はそれより古い。確認規模は東西径38cm×南北径21cm以上、深さ18cm、底部標高10.69ｍを測る。図示可能な遺物はない。

Ｐ13（図13・15、表４）

調査区中央西側付近、Ｃ－３グリッドに隣接する位置で検出した。Ｐ14と重複関係にあり、本址の方

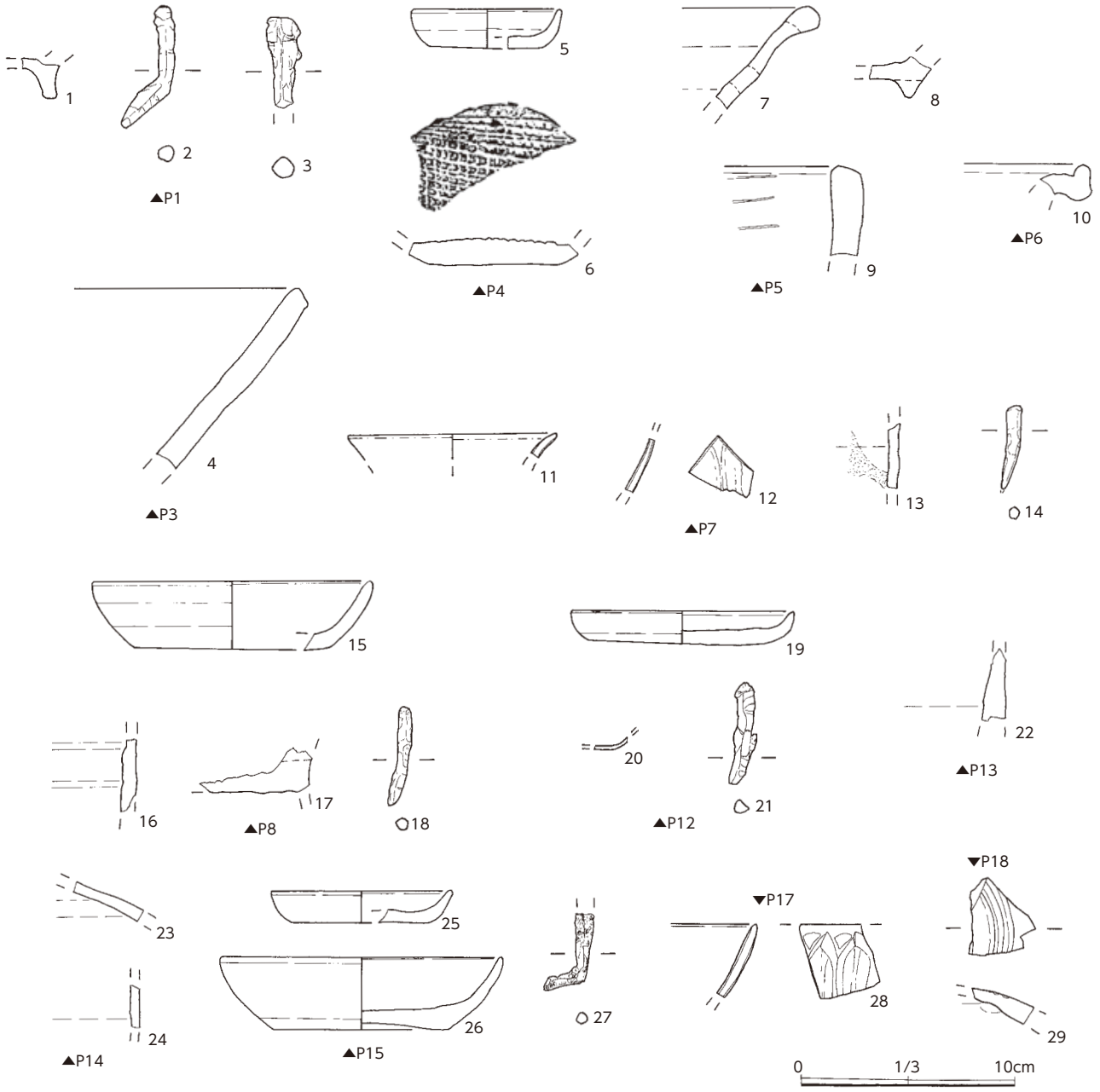


図１５　２面ピット出土遺物

が新しい。平面形は隅丸円形、規模は東西径52cm×南北径52cm、深さ26㎝を、底部標高10.62ｍを測る。遺物は褐釉壺の胴部片（22）が出土している。

Ｐ14（図13・15、表４）

Ｐ13と土坑１との重複関係にあり、両遺構によって削平されて検出された。平面形は不明、規模は東西径69cm、深さ24㎝、底部標高10.62ｍを測る。遺物は同一個体と思われる褐釉壺の肩部（23）・胴部片（24）が出土している。

Ｐ15（図13・15、表４）

調査区南西隅、Ｃ－４グリッドの南東に位置する。南側外壁に拡がり、確認できた規模は東西径42㎝以上×南北径14㎝以上、深さ22cm、底部標高10.64ｍを測る。出土遺物はかわらけ小皿（25）・大皿（26）、鉄釘（27）である。

Ｐ16（図13・15）

調査区中央付近、Ｂ－３～４、Ｃ－３～４グリッド中央に位置する。土坑１と重複関係にあり、西側を削平されており、本址の方が古い。確認できた規模は東西径32cm以上×南北径50cm、深さ18cmの浅いピットである。底部標高10.67ｍを測る。図示可能な遺物はなかった。

Ｐ17（図13・15、表４）

調査区南東部、Ｂ－４グリッドの南に位置する。南壁外側に拡がり、土坑４により削平されている。確認できた規模は東西径44cm以上×南北径58cm以上、深さ17cm、底部標高10.68ｍを測る。図示可能な遺物は龍泉窯系青磁蓮弁文碗の口縁部片（28）１点である。

Ｐ18（図13・15、表４）

調査区北半部北側中央、Ｃ－２グリッドの北側に位置する。平面形は隅丸円形、規模は東西径56cm×南北径52cm以上、深さ29cm、底部標高10.54ｍを測る。図示可能な遺物は瀬戸窯壺の肩部小片（29）１点である。

Ｐ19（図13・15）

調査区南側、Ｃ－４グリッドの北側に位置する。平面形は隅丸円形、規模は東西径49cm×南北径46cm、深さ16cm、底部標高10.67ｍを測る。図示可能な遺物はなかった。

Ｐ20（図13・15）

調査区中央付近、Ｂ－４グリッド西側に位置する。平面形は円形、規模は東西径21cm×南北径20cm、深さ20cm、底部標高10.65ｍを測る。２面の遺構としては比較的小型のピットである。図示可能な遺物はなかった。

遺構名	平面形	検出標高（m）	東西径（cm）	南北径（cm）	底部標高（m）	重複関係
土坑８	不明	10.80	70以上	22以上	11.09	Ｐ21より古い
Ｐ９	不明	10.80	42	21以上	10.46	Ｐ７より古い
Ｐ21	不明	10.80	８以上	45以上	10.67	土坑８より新しい

２面遺構外出土遺物（図16、表４・５、写真図版７・８）

２面上包含層である５・６層に含まれる遺物を「２面遺構外」とし、総数295点のうち、37点を図化した。かわらけ小皿（１～10）・中皿（11～13）・大皿（14・15）、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗（16～18）、青磁の香炉（19）、外面に蓮弁文を施す青白磁蓋（20）、褐釉壺の肩部片（21）、瀬戸窯卸皿（22）・壺（23）、常滑窯甕（24～26）、片口鉢Ⅰ類（27～29）、片口鉢Ⅱ類（30）、片口鉢Ⅰ類の破片を転用した磨耗陶片（31）、瓦質火鉢（32～34）、外面口縁下に菊花文スタンプを捺した土器質火鉢（35）、口縁部を滑らかに削り調整したかわらけ（36）、鉄釘（37）などが出土している。

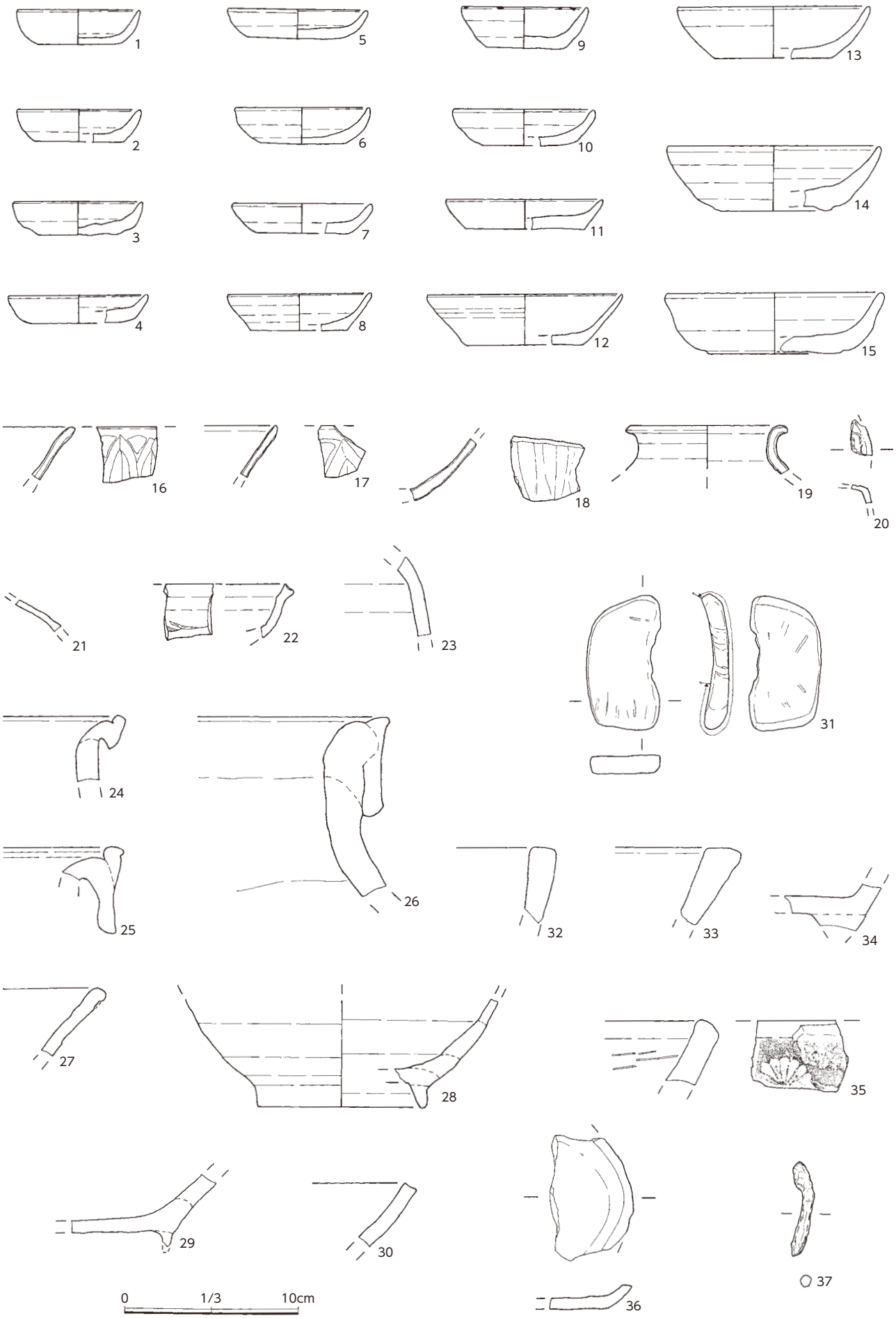


図１６　２面遺構外出土遺物

３．３面の遺構と遺物

２面構築土である７層を除去し、その下に厚さ10～20cmほど堆積していた８層を掘り下げた時点で、非常に締まりのある３面を検出した（図17）。当面では、土坑９基、柱穴16口を検出した。調査区壁で確認した標高は10.70m～10.60mで南から北に向かいやや傾斜している。調査時の各遺構の検出標高値は10.60m前後である。

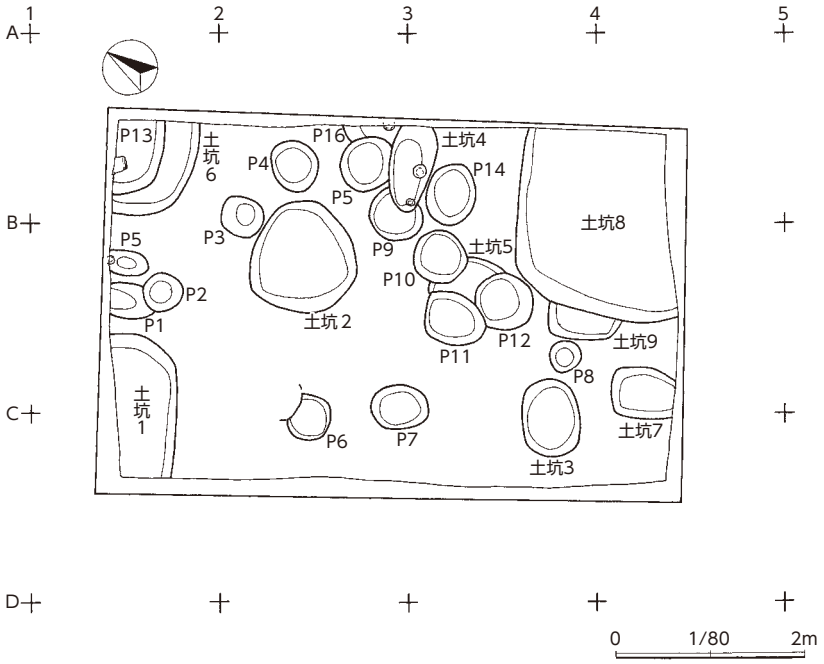


図１７　３面全測図

土坑（図18～20、表５・６、写真図版３・８）

土坑１（図18・20、表５・６）

調査区北西隅、Ｃ－２グリッド北側に位置する。北・西壁外側に拡がり、全体規模は不明である、確認できた規模は長辺150cm×短辺68cm、深さ25cm、底部標高10.37mを測る。出土遺物はかわらけ小皿（１～４）・大皿（５）、白磁印花文碗（６）、瀬戸窯壺（７）、鉄釘（８・９）である。

土坑２（図18・20、表６）

調査区北半部東側、Ｂ－２グリッドの南に位置する。平面形は不整円形、規模は東西径116cm×南北径約111cm、深さ22cm、底部標高10.42mを測る。出土遺物はかわらけ小皿（10）、瓦質火鉢（11）である。

土坑３（図18・20、表６）

調査区南西隅、Ｃ－４グリッドの北に位置する。平面形は楕円形、東西径74cm×南北径78cm、深さ19cm、底部標高10.43mを測る。図示可能な遺物は鉄釘（12）１点のみである。

土坑４（図19・20、表６）

調査区中央東側、Ｂ－３グリッドの東に位置する。一部東壁に拡がる状況で平面形は楕円形を呈すと思われる。規模は東西径92cm以上×南北径50cm、深さ27cm、底部標高10.45mを測る。遺構内西側からかわらけ小皿（13）、東側からかわらけ中皿（14）、そのほかかわらけ大皿が出土している。

土坑５（図19・20）

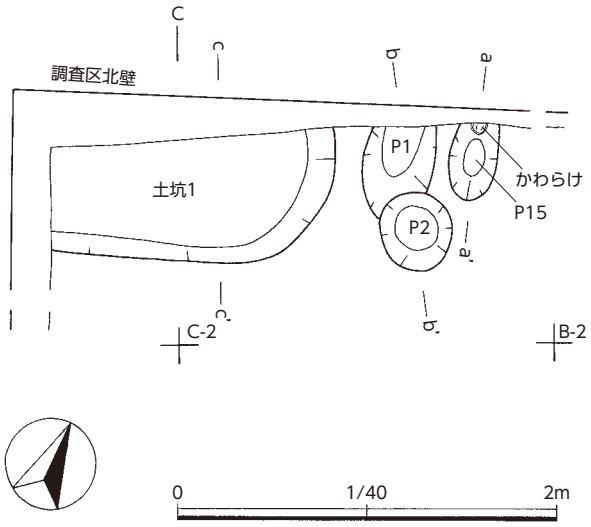
調査区中央南側、Ｂ－３グリッドの南に位置する。Ｐ10～12によって周囲を削平されており、形状・全体規模は不明であるが、最大径84cm、深さ20cm、底部標高10.49mを測る。図示可能な遺物はない。

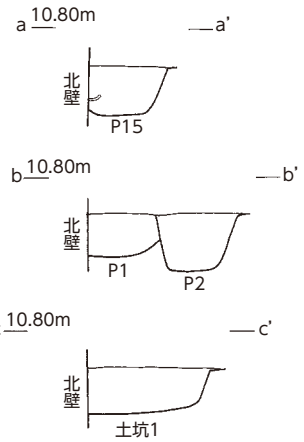
土坑６（図18・20、表６）

調査区北東隅、Ｂ－２グリッドの北に位置する。調査区隅で確認したため、北・東部は壁の外側に拡がり、さらにＰ13によって中心部を削平されている。確認できた規模は最大径126cm、深さ22cm、底部標高10.41mを測る。図示可能な遺物は東濃型山茶碗（16）、常滑窯片口鉢Ⅱ類の胴～底部片（17）である。

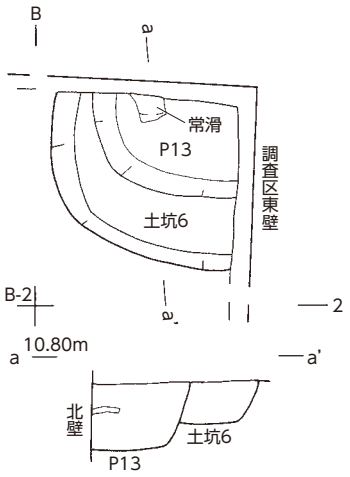
土坑７（図18・20）

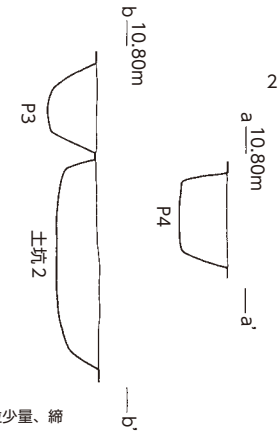
調査区南西隅、Ｃ－４グリッドの南に位置する。南側一部が南壁外側に拡がっている。平面形は不整形で南側の幅が狭くなっている。確認できた規模は東西径56cm×南北径70cm以上、深さ18cm、底部標高10.49mを測る。図示可能な遺物はない。

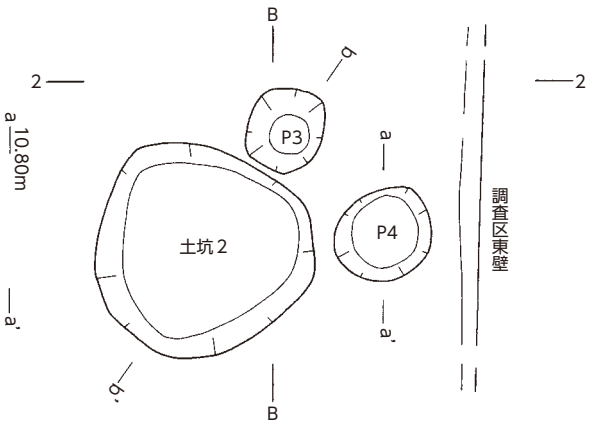




P1　暗茶灰色粘質土：2cm 角土丹少量、炭化物・粗砂ブロックをやや多く含む、締まり弱い
P2　茶褐色粘質土：土丹粒・炭化物少量、締まりなし
P15　茶褐色弱粘質土：1～3cm 角土丹・炭化物少量、締まり若干あり
土坑1　暗茶灰色粘質土：2～ 20cm 角土丹少量、炭化物・かわらけ粒多く、締まりやや弱い

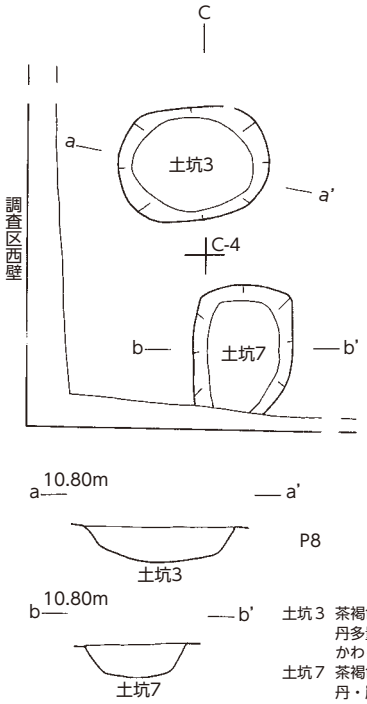


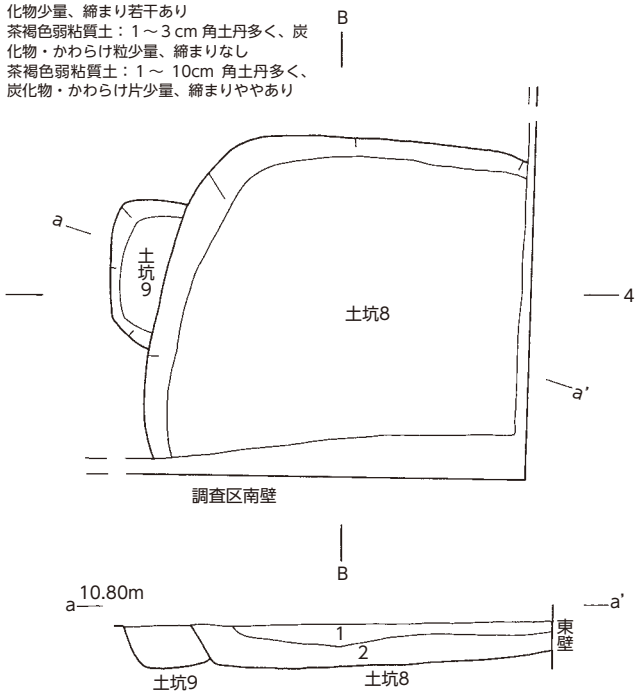




土坑6　暗茶灰色粘質土：土丹粒やや多く、炭化物・かわらけ粒少量、締まり弱い
P13　暗茶灰色粘質土：上層に2 cm・10～ 20cm 角土丹多く含み、下層に土丹粒・炭化物・かわらけ粒多く含む、締まりやや弱い

土坑2　茶褐色弱粘質土：3～5cm 角土丹多量、炭化物少量、締まり若干あり
P3　茶褐色弱粘質土：1～3cm 角土丹多く、炭化物・かわらけ粒少量、締まりなし
P4　茶褐色弱粘質土：1～ 10cm 角土丹多く、炭化物・かわらけ片少量、締まりややあり





土坑3　茶褐色弱粘質土：3～5 cm 角土丹多量、炭化物中量、20cm 角土丹・かわらけ粒少量、締まり若干あり
土坑7　茶褐色弱粘質土：1～3 cm 角土丹・炭化物中量、かわらけ粒ごく少量、締まりなし

土坑8-1.　暗茶褐色弱粘質土：1～5cm 角土丹・炭化物多い、締まりなし
土坑8-2.　暗茶色弱粘質土：灰多量、かわらけ片多い、締まりなし
土坑9　茶褐色弱粘質土：5～7cm 角土丹多量、炭化物少量、締まり若干あり

図18　3面土坑・ピット（1）

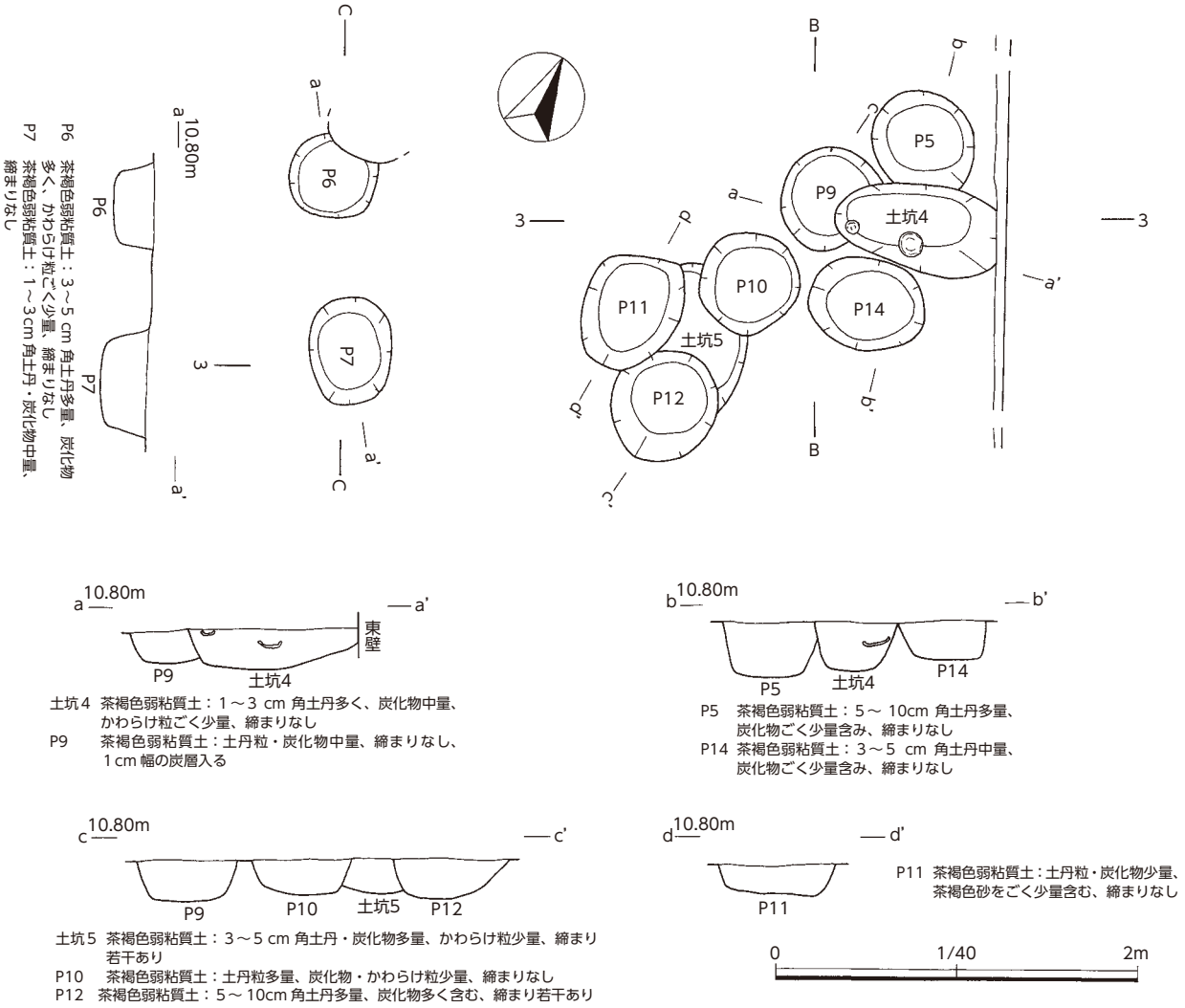


図１９　３面土坑・ピット（２）

土坑８（図18・20、表６）

調査区南東隅、Ｂ－４グリッド中央に位置する。土坑９と重複関係にあり、本址の方が新しい。南・東壁の外側に拡がっており、調査区内での全体規模は不明である。確認できた規模は、東西径214cm以上×南北径250cm以上、深さ23cm、底部標高10.49ｍを測る。覆土は２層の堆積が観察でき、多くの遺物が出土している。その中から図示可能な遺物は、かわらけ小皿（18 ～ 21）・中皿（22）・大皿（23・24）、白磁口はげ皿（26）、景徳鎮窯白磁印花文皿（27）であった。

土坑９（図18・20、表６）

調査区南東部、Ｂ－４グリッドの西に位置する。土坑８と重複関係にあり、本址の方が古い。東半部以上が土坑９により削平されているため、形状・規模は不明である。確認できた規模は東西径34cm以上×南北径78cm以上、深さ22cm、底部標高10.46ｍを測る。出土遺物はかわらけ小皿（28）１点のみである。

ピット（図18 ～ 20、表６・７、写真図版３・８）

Ｐ１・２（図18）

調査区北壁中央で検出した。両遺構は重複関係にあり、Ｐ２の方が新しい。Ｐ１は東西径38cm×南北径50cm以上、深さ23cm、底部標高10.38ｍを測る。Ｐ２は平面形が円形、東西・南北径は40cm、深さ30㎝、底部標高10.30ｍを測る。両遺構とも図示できる遺物はない。

Ｐ３・４（図18・20、表６）

Ｐ３は調査区北半部東側、Ｂ－２グリッドの下に位置する。平面形は隅丸円形、規模は東西径40cm×南北径46cm、深さ26cm、底部標高10.38ｍを測る。図示できる遺物はなかった。Ｐ４はＰ３の東側に位置する。平面形は隅丸円形、規模は東西径48cm×南北径54㎝、深さ25cm、底部標高10.45ｍを測る。かわらけ（29・30）２点を図示した。

Ｐ５（図19・20、表６）

調査区中央東側、Ｂ－３グリッドの東に位置する。南側を一部土坑４に削平されているが、平面形は不整円形、規模は東西径60㎝×南北径54㎝、深さ30㎝、底部標高10.40ｍを測る。かわらけ（31・32）と鉄釘（33）を図示した。

Ｐ６・７（図19・20、表６）

両遺構とも調査区西側中央、Ｃ－３グリッド付近で検出した。Ｐ６は２面時の遺構によって北側端部を削平されており、径50㎝を測るほぼ円形のピットである。深さは22cm、底部標高10.47ｍを測る。図示可能な遺物はない。Ｐ７は平面形が楕円形、規模が長径60cm×短径54cm、深さ約25cm、底部標高10.40ｍを測る。図示可能な遺物は常滑窯甕（34）１点である。

Ｐ９（図19・20、表６）

調査区中央東側、Ｂ－３グリッドに位置する。土坑４により東側を削平されていて、確認できた規模は、東西径33cm以上×南北径57cm、深さ約23cm、底部標高10.47ｍを測る。図示可能な遺物は鉄釘（35）１点のみである。

Ｐ10～12（図19・20、表６）

調査区中央東側、Ｂ－３グリッドの南に位置し、土坑５と重複関係にある。Ｐ10は土坑５より新しく、平面形は不整円形、規模が東西径54cm×南北径56cm、深さ20cm、底部標高10.49ｍを測る。かわらけ（36）のみ図示できた。Ｐ11は土坑５とＰ12を削平していて、平面形は不整形、規模は東西径35cm×南北径70cm、深さ18cm、底部標高10.48ｍを測る。図示可能な遺物はかわらけ（37～39）、鉄釘（40）である。Ｐ12は土坑５より新しく、Ｐ11により西側端部を削平されている。規模は東西径59cm×南北径64cm、深さ22cm、底部標高10.45ｍを測る。図示可能な遺物はない。

Ｐ13（図18）

調査区北東隅、Ｂ－２グリッドの北に位置する。北・東部は壁の外側に拡がり、土坑６の中心部を削平した状態で検出した。確認できた規模は長径77cm×短径50cm、深さ35cm、底部標高10.32ｍを測る。北壁に検出標高から12cmの位置に常滑片が出土しているが、これを含め図示できる遺物はなかった。

Ｐ14（図19）

調査区中央東側、Ｂ－３グリッドの東に位置する。平面形は楕円形、規模は東西径65cm×南北径52cm、深さ22cm、底部標高10.50ｍを測る。図示できる遺物はなかった。

Ｐ15（図18・20、表６・７）

調査区北壁中央付近、Ｂ－２グリッド北側で検出した。北壁外側に拡がっていて、確認できた規模は東西径約26cm×南北径42cm以上、深さ約27cm、底部標高10.34ｍを測る。北壁に検出標高から16cmほどの位置にかわらけが出土している。図示した遺物はこのかわらけ（41）と外面に幾何学文様の押印がある常滑窯甕（42）である。

Ｐ16（図20、表７）

調査区東壁中央付近、Ｂ－３グリッド北側で検出した。東壁外側に拡がり、水抜き側溝によって削平してしまった。東壁でのみ確認して、図では復元した。規模は東西径50cm×南北径40cm以上、深さ25cm、底部標高10.34ｍを測る。図示可能な遺物はかわらけ（43）である。

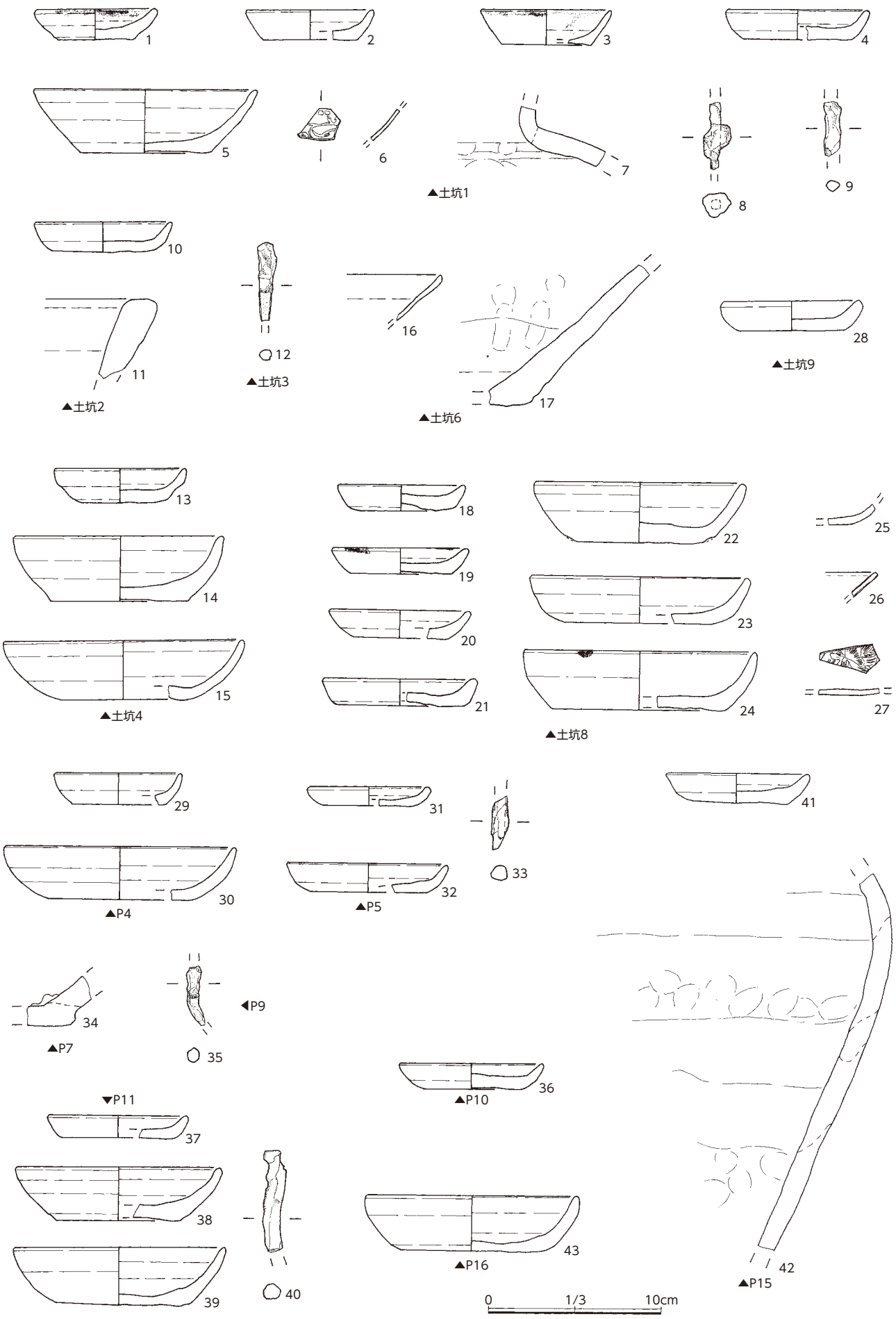


図２０　３面各遺構出土遺物

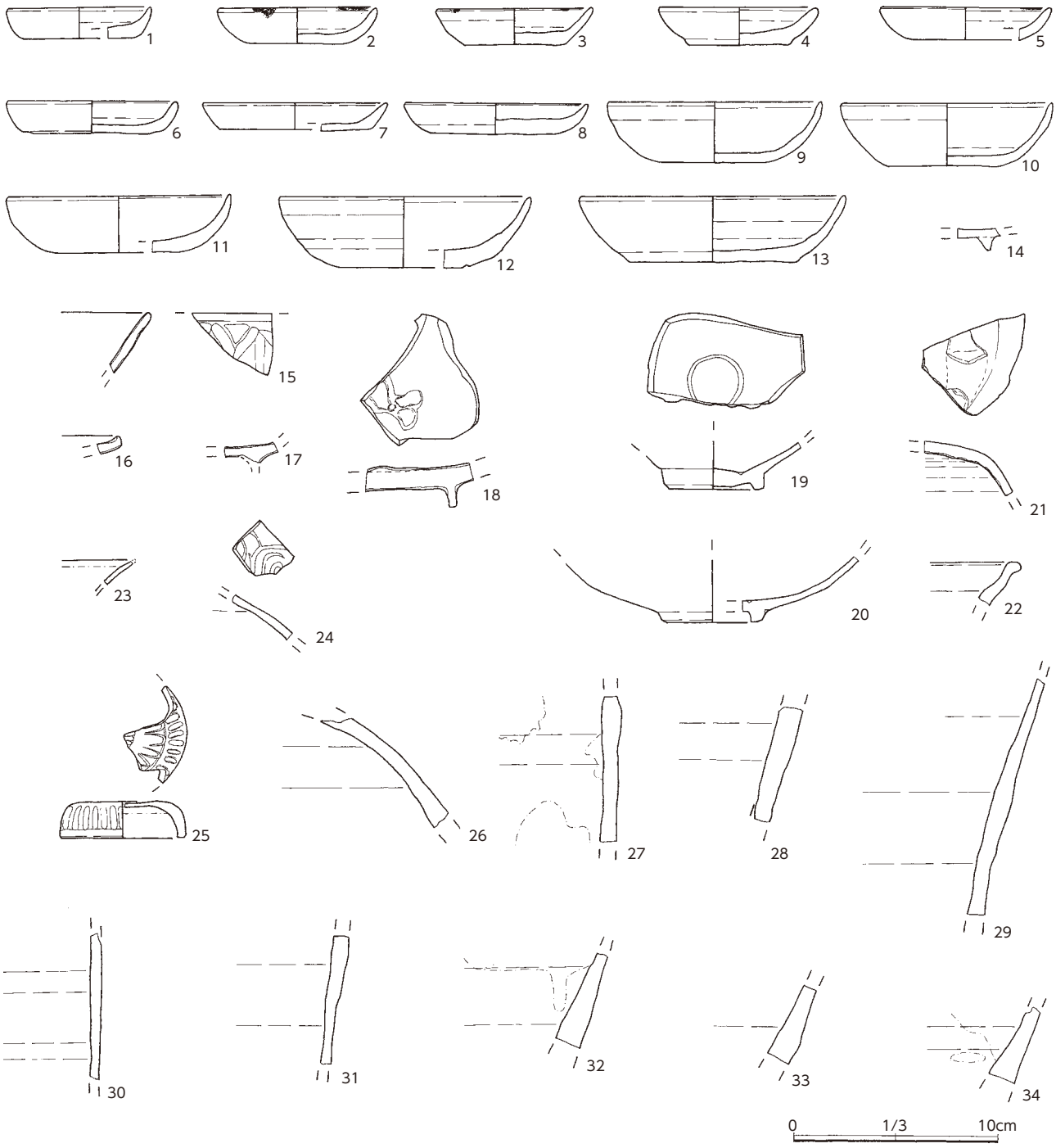


図２１　３面遺構外出土遺物（１）

遺構名	平面形	検出標高（m）	東西径（cm）	南北径（cm）	底部標高（m）	重複関係
Ｐ８	円形	10.60	32	34	10.31	Ｐ21より古い

３面遺構外出土遺物（図21・22、表７～９、写真図版８～10）

出土遺物は、２面構築土の７層と３面上に堆積する８層から出土した遺物を一括して「３面遺構外」として図示した。総数417点中、68点を図化した。図21にはかわらけ小皿（１～８）・中皿（９～11）・大皿（12・13）、白かわらけ（14）、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗（15）、青磁折縁鉢（16）・碗（17）・底部に魚文を貼り付けした鉢（18）、白磁碗（19・20）・四耳壺（21）・壺（22）、青白磁口はげ皿（23）・梅瓶（24）・天頂部に菊花状の文様を施す合子蓋（25）、９点とも同一個体である可能性が高い褐釉壺（26～34）を図

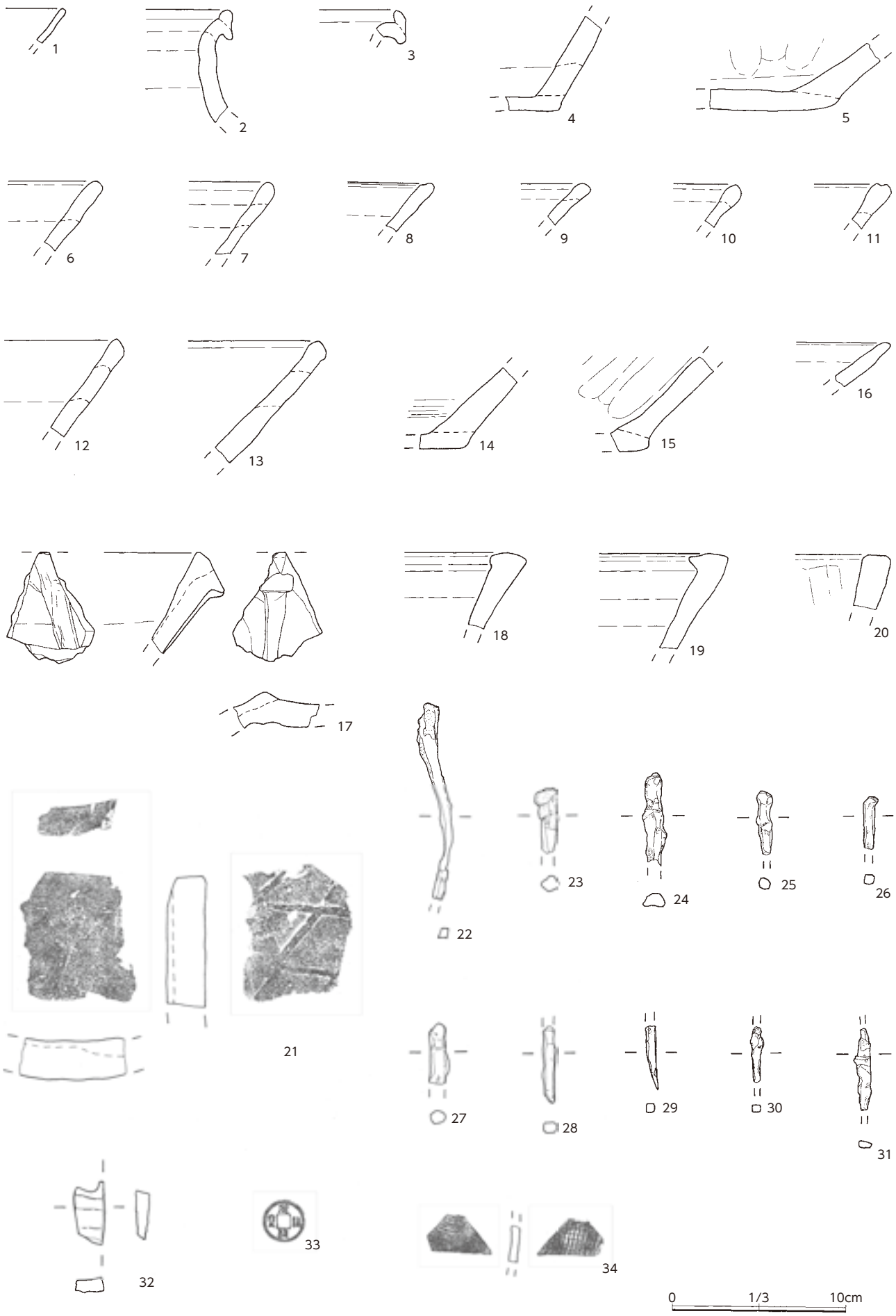


図２２　３面遺構外出土遺物（２）

示した。図22には東遠型山皿（１）、中野編年５・６型式の常滑窯の甕口縁部片（２・３）、同じく常滑窯の甕底部片（４・５）、片口鉢Ⅰ類（６～11）、片口鉢Ⅱ類（12～15）、渥美窯甕（16）である。17は外面口縁部につまみ状の装飾と思われる部位が貼り付けてあり、全体の形状は推測し難く、胎土などから伊勢の火鉢と思われる。鎌倉遺跡群において類似する例はなく、出土例は管見の限り初めてと思われる。そのほかに瓦質火鉢（18・19）、土器質火鉢（20）、永福寺期の平瓦（21）、鉄釘（22～31）、緑泥片岩を加工してある用途不明品（32）、篆書で元祐通寶と鋳造された銅銭（33）、内面に青海波文、外面に格子状の叩き文様を捺された須恵器甕の小破片（34）を図示した。

４．４面の遺構と遺物

３面終了時の調査深度が地表から80cmであったため、水抜き側溝からみえる土層堆積などから、地表下１ｍの位置に遺構面と思われる土層が観察できたので、排土処理などを考慮し、南半部のみ調査を行った。３面構築土である９層とその下に厚さ10cmほど堆積していた10層を掘り下げた時点でやや締りの弱い暗茶灰色粘質土の拡がりと遺構プランを確認したのち、４面として検出した（図23）。当面では調査面積約半分の12㎡になり、その範囲内から土坑８基、柱穴16口を検出した。調査区壁で確認した標高は10.50ｍ～10.40ｍ。調査時の各遺構の検出標高値は10.50ｍ前後である。

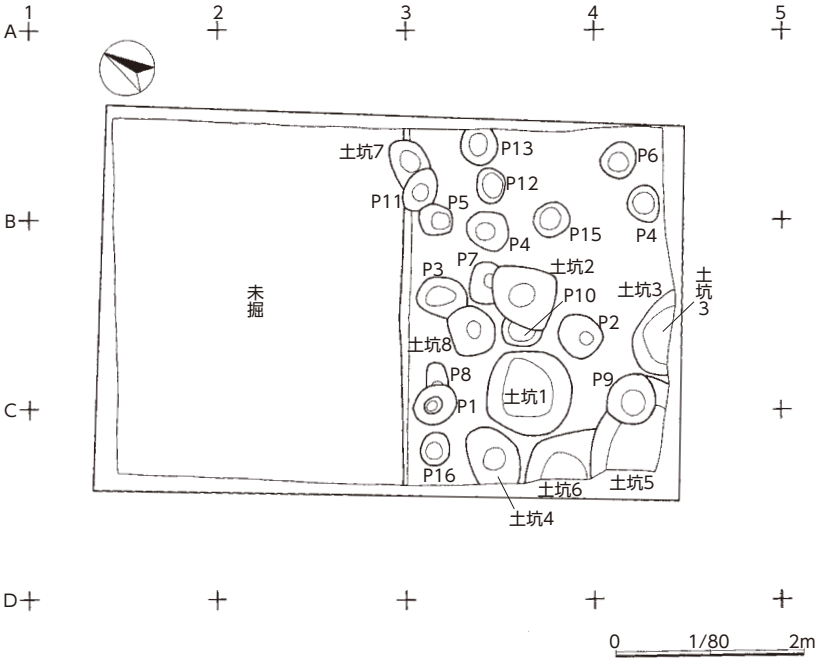


図２３　４面全測図

土坑（図24・25、表９、写真図版４・９・10）

土坑１（図24・25、表９）

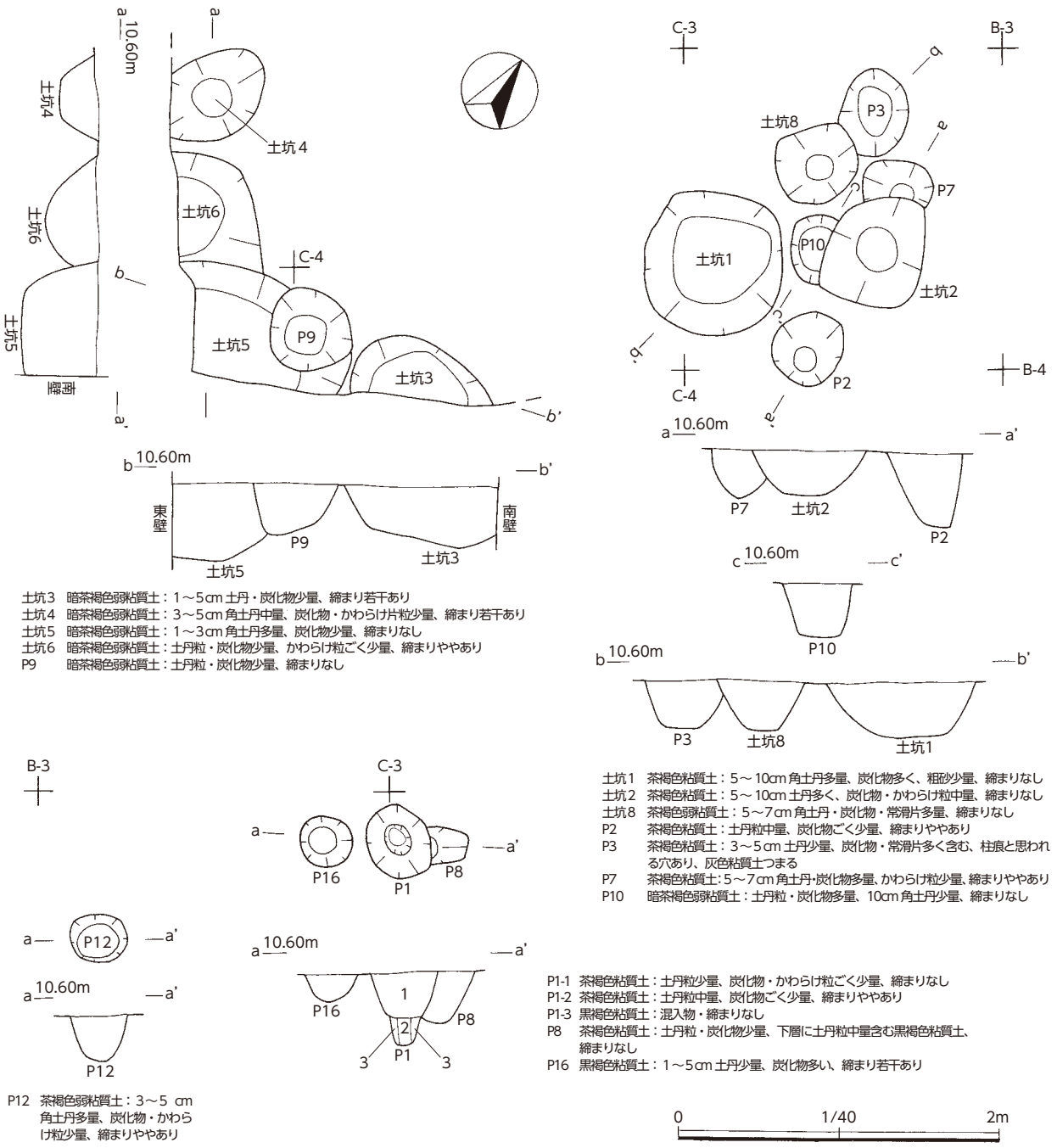
調査区南西部中央、Ｃ－４グリッドの北に位置する。平面形は不整円形、規模は東西径50cm×南北径52cm、深さ34cm、底部標高10.15ｍを測る。図示可能な遺物は、かわらけ（１・２）、鉄釘（３・４）である。

土坑２（図24）

調査区南半部中央付近、Ｂ－４グリッドの西に位置する。Ｐ７、Ｐ10と重複関係にあり、両遺構を削平している。平面形は不整形、規模は東西径64cm×南北径76cm、深さ28㎝、底部標高10.23ｍを測る。図示可能な遺物はない。

土坑３（図24・25、表９）

調査区南壁中央、Ｃ－４グリッドの東に位置する。南側大半は調査区壁外側に拡がっているため、形状・規模は不明である。確認できた規模は長径88cm×短径38cm、深さ38cm、底部標高10.18ｍを測る。図示可能な遺物は、龍泉窯系青磁折縁碗（５）１点であった。



土坑３　暗茶褐色弱粘質土：１～５cm 土丹・炭化物少量、締まり若干あり
土坑４　暗茶褐色弱粘質土：３～５cm 角土丹中量、炭化物・かわらけ片粒少量、締まり若干あり
土坑５　暗茶褐色弱粘質土：１～３cm 角土丹多量、炭化物少量、締まりなし
土坑６　暗茶褐色弱粘質土：土丹粒・炭化物少量、かわらけ粒ごく少量、締まりややあり
P9　暗茶褐色弱粘質土：土丹粒・炭化物少量、締まりなし

土坑１　茶褐色粘質土：５～10cm 角土丹多量、炭化物多く、粗砂少量、締まりなし
土坑２　茶褐色粘質土：５～10cm 土丹多く、炭化物・かわらけ粒中量、締まりなし
土坑８　茶褐色弱粘質土：５～７cm 角土丹・炭化物・常滑片多量、締まりなし
P2　茶褐色粘質土：土丹粒中量、炭化物ごく少量、締まりややあり
P3　茶褐色粘質土：３～５cm 土丹少量、炭化物・常滑片多く含む、柱痕と思われる穴あり、灰色粘質土つまる
P7　茶褐色粘質土：５～７cm 角土丹・炭化物多量、かわらけ粒少量、締まりややあり
P10　暗茶褐色弱粘質土：土丹粒・炭化物多量、10cm 角土丹少量、締まりなし

P12　茶褐色弱粘質土：３～５ cm 角土丹多量、炭化物・かわらけ粒少量、締まりややあり

P1-1　茶褐色粘質土：土丹粒少量、炭化物・かわらけ粒ごく少量、締まりなし
P1-2　茶褐色粘質土：土丹粒中量、炭化物ごく少量、締まりややあり
P1-3　黒褐色粘質土：混入物・締まりなし
P8　茶褐色粘質土：土丹粒・炭化物少量、下層に土丹粒中量含む黒褐色粘質土、締まりなし
P16　黒褐色粘質土：１～５cm 土丹少量、炭化物多い、締まり若干あり

図２４　４面土坑・ピット

土坑４～６（図24・25、表９）

調査区西壁南部、Ｃ－４グリッド付近に位置する。土坑５と６が重複関係にあり、土坑５の方が新しい。また、土坑５もＰ９に削平されている。それぞれ調査区壁外側に拡がっていて、形状・規模は不明である。土坑４の確認規模は、東西径53cm×南北径73cm以上、深さ14cm、底部標高10.33ｍを測る。図示可能な遺物はない。土坑５の確認規模は、東西径127cm×南北径74cm以上、深さ47cm、底部標高10.02ｍを測る。図示可能な遺物は、白かわらけ（６）、片口鉢Ｉ類（７・８）２点である。土坑６の確認規模は、東西径94cm以上×南北径55cm以上、深さ33cm、底部標高10.15ｍを測る。図示可能な遺物はない。

土坑８（図24・25、表９）

調査区南中央南側、Ｃ－４グリッドの北に位置する。Ｐ３と重複関係にあり、平面形は不整円形、規

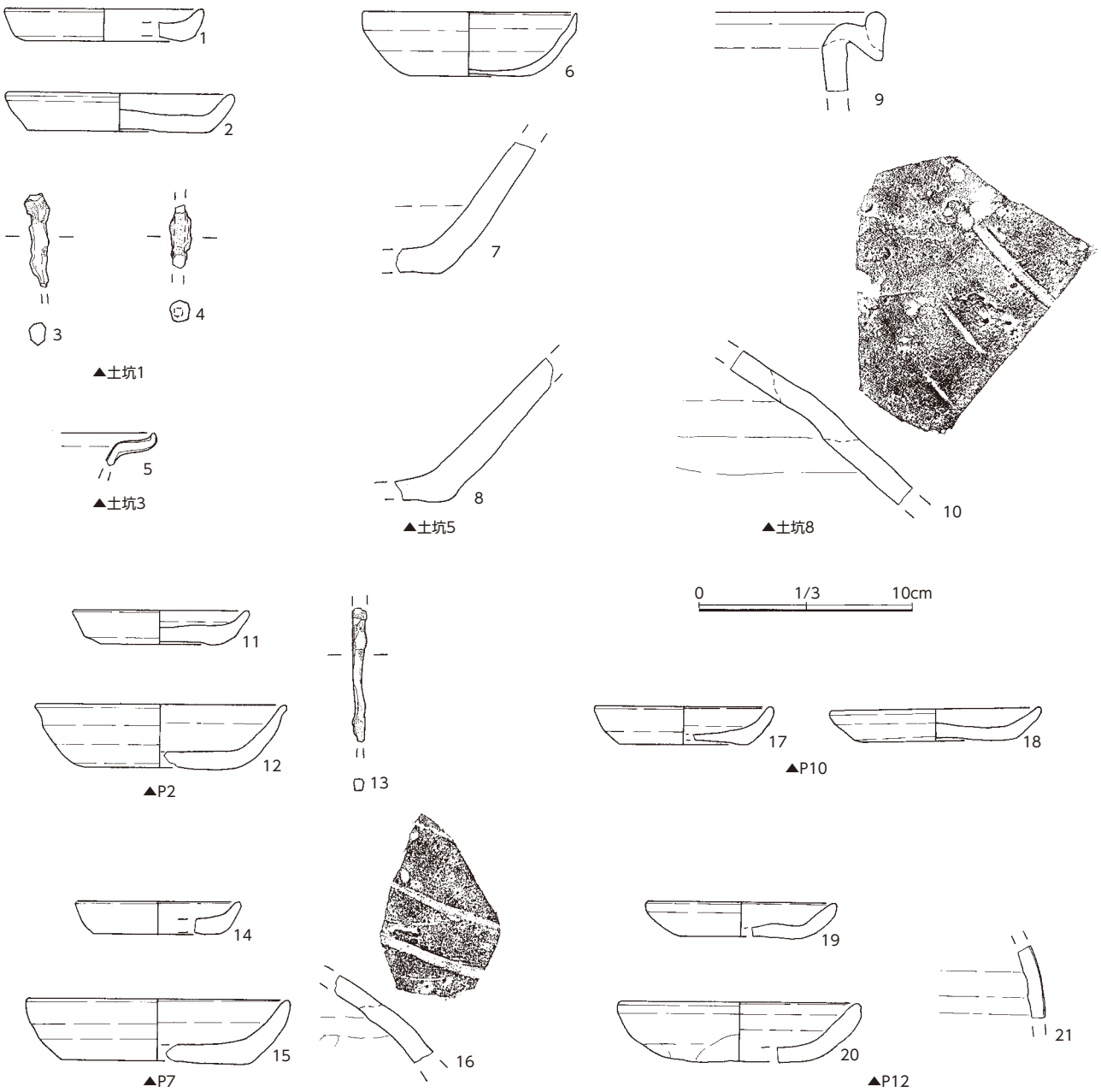


図２５　４面各遺構出土遺物

模は東西径50cm×南北径55cm、深さ31cm、底部標高10.18ｍを測る。図示可能な遺物は、中野編年５型式の常滑窯甕（９）と外面に３本の線刻がみられる常滑窯甕（10）である。

ピット（図24・25、表８、写真図版４・９・10・11）

Ｐ１・８・16（図24）

調査区西側中央、Ｃ－３グリッド付近に位置する。Ｐ１とＰ８は重複関係にあり、Ｐ１の方が新しい。Ｐ１は平面形がやや楕円形を呈し、東西径47cm×南北径40cm、深さ45㎝、底部標高値は10.02ｍを測る。検出表面から28㎝ほどまで土丹粒少量、炭化物やかわらけ粒をごく少量含む茶褐色粘質土の堆積があり、その下に柱の抜き痕が中心部にみられ、周囲に柱の裏込め土が堆積していた。土層断面から柱痕は径８cm、高さ17cmの状況がみられた。覆土内から手捏ね成形のかわらけ片が出土しているが、図化するに至らなかった。

Ｐ８はＰ１により大半を削平されていたため、径23cm、深さ33cmしか確認できなかった。底部標高10.15ｍを測る。さらに、Ｐ１に向かい細く斜めに掘られている状況がみられたため、Ｐ１にあった柱を抜くための抜き取り穴の可能性が示唆できる。Ｐ16については平面形が円形を呈し、東西径34cm×南北径32cm、深さ16cmを測る浅型のピットである。底部標高10.30ｍを測る。両遺構とも図化できる遺物はなかった。

Ｐ２（図24・25、表９）

調査区南半部中央付近、Ｃ－４グリッドの東に位置する。平面形は不整円形、規模は東西径43cm×南北径46cm、深さ46cm、底部標高10.03ｍを測る。図示可能な遺物は、かわらけ（11・12）、鉄釘（13）である。

Ｐ３（図24）

調査区南半部中央付近、Ｂ－３グリッドの南に位置する。土坑８との重複関係により、南端部を削平されている。規模は東西径43cm×54cm、深さ30㎝、底部標高10.19ｍを測る。図示可能な遺物はない。

Ｐ７（図24・25、表９）

調査区南半部中央付近、Ｂ－３グリッドの南に位置する。土坑２との重複関係により、南半分を削平されている。確認できた規模は、東西径44cm×南北径23cm以上、深さ30㎝、底部標高10.00ｍを測る。図示可能な遺物は、かわらけ（14・15）と土坑８から出土した外面に３本の線刻がある常滑窯甕と同一個体と思われる肩部片（16）である。

Ｐ９（図24）

調査区南西部、Ｃ－４グリッドの南に位置する。平面形は不整円形、規模は東西径54cm×南北径51cm、深さ約33cm、底部標高10.22ｍを測る。図示可能な遺物はない。

Ｐ10（図24・25、表９）

調査区南半部中央付近、Ｃ－４グリッドの北に位置する。土坑２との重複関係により、東部を削平されている。確認できた規模は、東西径22cm以上×南北径44cm、深さ33㎝、底部標高10.16ｍを測る。図示可能な遺物は、かわらけ（17・18）である。

Ｐ12（図24・25、表９）

調査区中央東側、Ｂ－３グリッドからやや南東に位置する。平面形は不整円形、規模は東西径36cm×南北径32cm、深さ28㎝、底部標高10.20ｍを測る。図示可能な遺物は、轆轤成形のかわらけ（19）と手捏ね成形のかわらけ（20）、青磁の袋物（21）である。

遺構名	平面形	検出標高（m）	東西径（cm）	南北径（cm）	底部標高（m）	重複関係
土坑７	楕円形	10.50	41	40以上	10.34	Ｐ11より古い
Ｐ４	不整円形	10.50	40	46	10.36	—
Ｐ５	不整円形	10.50	38	36	10.20	Ｐ11より新しい
Ｐ６	不整円形	10.50	38	35	10.28	—
Ｐ11	楕円形	10.50	49	35	10.30	Ｐ５より古い
Ｐ13	円形	10.50	40	42	10.38	—
Ｐ14	不整円形	10.50	38	36	10.25	—
Ｐ15	楕円形	10.50	39	35	10.32	—
Ｐ16	円形	10.50	34	32	10.30	—

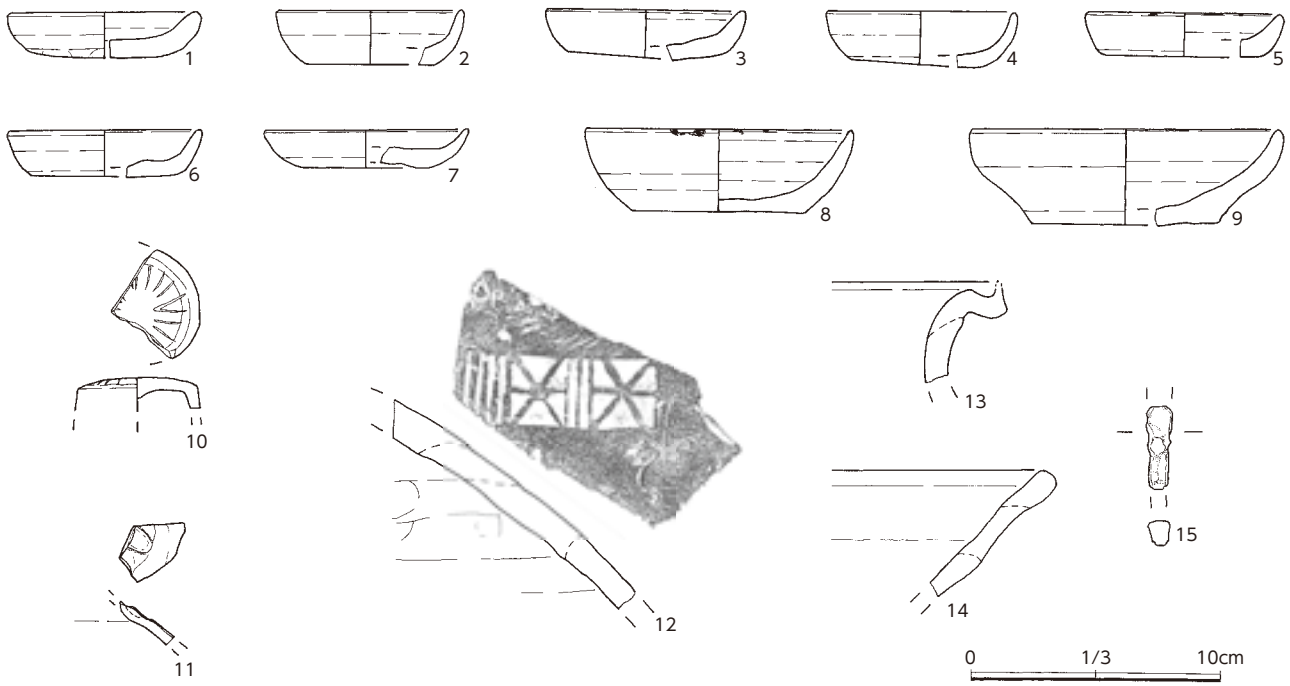


図２６　４面遺構外出土遺物

４面遺構外出土遺物（図26、表９・10、写真図版11）

３面構築土である９層と10層含まれる遺物を「４面遺構外」とした。総数203点中、15点を図化した。手捏ね成形のかわらけ小皿（１）、轆轤成形のかわらけ小皿（２～７）・中皿（８）・大皿（９）、天頂部に放射状の文様を施す青白磁合子蓋（10）、青白磁袋物（11）、外面に幾何学文様の押印がある常滑窯甕（12）、中野編年５型式である常滑窯甕の口縁部片（13）、片口鉢Ⅰ類（14）、鉄釘（15）を図示した。

第四章　まとめ

本調査地点は名越ヶ谷遺跡内の南部、妙法寺の北側近くに所在する。東隣には山裾が近接し、妙法寺と至近距離にあることから、谷戸の造成や寺域に関連する遺構や遺物の発見に期待されたが、狭小な調査範囲や深度規制により不明瞭と言わざるを得ない。したがって、近隣の調査成果と比較して若干の考察をしてみたい。

出土した遺物は表11から見てとれるように、大半はかわらけが占めている。次いで、国産陶器（特に常滑窯）の製品が多く出土している。瀬戸窯製品も少量ながら出土しているが、比較的目立つのが舶載陶磁器である。調査地を寺域の一画とする前提の場合、鎌倉遺跡群における寺域の出土遺物から相対すると、その根拠は薄く、遺構の年代による増減の傾向が鎌倉市内域と同様の出土傾向としてみるのが妥当であろう。また、各面の遺物の総数を単純に見比べると、時期が古いほど出土総数が増加している。４面の場合は設定した調査区の半分しか調査していないので対照にするには値しないが、上記の傾向と同じく、１面と２・３面の間に調査地近隣では盛衰の時期が想像できる。

50ｍ西側に近接している大町四丁目1888番地点（図１－６地点）の報告では、下層からⅠ～Ⅲ期と区分しており、その内に５枚の生活面を確認している。調査地は現地表が11.40 ～ 11.50ｍを測り、６地点では11．00ｍ前後、西に向かい緩やかに傾斜している。この調査地点で検出した遺構面と本地点の遺構面を比較・整合すると、遺構面の標高や出土遺物の年代観などから１面をⅢ期上層、２面をⅢ期中層、３面をⅢ期下層、４面をⅡ期上層として比定できると思われ、その傾斜による堆積に変化はみられず、調査地から６地点間あるいは周辺域にもほぼ平坦な地面が拡がっていることが想定できる。

出土した遺物は少なく遺存度も悪い状況で、明確な資料を提示できてはいないが、調査地内の変遷を下層から辿ってみる。４面は遺構全体の様相が掴めていないが、Ｐ１の柱抜き取り痕や底部標高が同様のピットがあることから、明確な根拠がないため図示しなかったが、建物あるいは柱穴列がある感覚は現地調査段階でもあった。軟弱な地盤にと思う点もあるが、至って不明瞭のままである。遺物は糸切りと手捏ね成形のかわらけが混同して出土するが、その割合は狭小な調査範囲内でも圧倒的に糸切り成形が多く、手捏ね成形から糸切り成形に移行する時期ではないかと推測できる。概ね13世紀後半の時期としたい。３面では非常に締まった地盤に浅形のピットや土坑のみ検出した。手捏ね成形がわずかながら出土しており、薄手かわらけの形状や口径12cm未満の中型品がしばしば目立ち、種類が豊富になり４面とあまり時期差はないと思われる。常滑窯甕の型式編年などから13世紀後葉頃と思われる。

２面は南北に並ぶ柱穴列を検出したが、調査区範囲内では延長が認められなかった。山裾に近いことから境界等を示す柵列と推測したい。遺物は糸切りかわらけの器肉がやや厚くなる。さらに、手捏ねかわらけが消失し、瀬戸窯製品が増える傾向から３・４面でみられた遺物組成とは異なる。概ね14世紀前半、おそらく鎌倉時代後期であろうと考えている。１面では非常に締まった土丹版築面が拡がっており、遺構数も極端に少なくなる。あまり活用されることはない空閑地であった可能性がある。各遺構内の遺物と１面構築土中の遺物から概ね14世紀前半～中頃と考えたい。

表１　遺物観察表（１）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
8-1	1面　土坑1	かわらけ	口縁部一部破損	12.9	7.6	3.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 c:黄橙色　e:良好
8-2	1面　土坑4	かわらけ	口縁～底部1/4	(8.4)	(6.2)	1.4	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
8-3	1面　土坑4	瀬戸　皿	胴部小片	—	—	—	b:灰白色 良胎　c:淡黄白色　e:良好　f:内面自然釉付着
8-4	1面　土坑4	火打石	完形	長4.3 幅3.4 厚2.1			f:ノミ状工具で加工 全体に打撃痕
8-5	1面　土坑4	鉄釘	完形	長5.7 幅0.5～1.3 厚0.5			a:胴部四角形に鍛造
8-6	1面　土坑4	鉄釘	頭～胴部	長[4.9] 幅0.4～0.8　厚0.6			a:胴部四角形に鍛造
8-7	1面　P2	鉄釘	完形	長[3.9] 幅0.5～0.9 厚0.6			a:胴部四角形に鍛造
8-8	1面　P3	鉄釘	頭～胴部	長4.6 幅0.7～1.0 厚0.7			a:胴部四角形に鍛造
8-9	1面　P3	鉄釘	頭～胴部	長[4.8] 幅0.3～0.6 厚0.4			a:胴部四角形に鍛造
8-10	1面　P4	かわらけ	口縁部1/3～底部1/5	(7.6)	(4.3)	1.9	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 粗胎　c:黄橙色　e:良好
8-11	1面　P4	鉄釘	頭～胴部	長[6.0] 幅0.5～1.8 厚0.8			a:胴部四角形に鍛造
8-12	1面　P5	石製品　硯	左陸部	長[7.7] 幅[3.7] 厚1.6			a:側面丁寧に削り調整 b:黒色粘板岩 c:灰黒色 f:全体に磨耗している
9-1	1面遺構外	かわらけ	口縁部1/2～底部4/5	7.45	4.6	1.9	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針 粗胎　c:黄橙色　e:良好
9-2	1面遺構外	特殊かわらけ	底部小片	高台部高さ0.6			b:砂粒多い・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
9-3	1面遺構外	不明土器（燈明台か）	胴部小片	—	—	[2.4]	b:砂粒・雲母・赤色粒 やや粗胎　c:橙色　e:良好
9-4	1面遺構外	青白磁　香炉か	肩部小片	—	—	—	b:灰白色 黒色粒 精良緻密　d:淡水青色半透明　e:良好
9-5	1面遺構外	瀬戸　折縁皿	口縁部小片	推定11.2	—	[2.5]	a:灰釉ハケ塗り　b:灰白色 砂粒・黒色粒 良胎　d:灰緑色透明　e:良好
9-6	1面遺構外	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅4.5			a:輪積み　b:淡褐色 砂粒・白色粒 粗胎　c:淡赤褐色　e:やや良好　f:中野編年８型式
9-7	1面遺構外	滑石製　鍋	口縁部小片	—	—	[1.9]	d:銀灰色
9-8	1面遺構外	東播系　捏鉢	口縁部1/3～胴部1/6	推定31.2	—	[10.7]	b:灰色 砂粒・白色粒 やや良胎 粘質　d:灰色　e:良好　f:外面口縁部自然釉付着 内面胴部若干磨滅している
9-9	1面遺構外	鉄釘	完形	長8.1 幅0.6～1.1 厚0.5			a:胴部四角形に鍛造
9-10	1面遺構外	鉄釘	完形	長5.2 幅0.3～0.8 厚0.4			a:胴部四角形に鍛造
9-11	1面遺構外	鉄釘	頭～胴部	長[6.3] 幅1.0～1.7 厚1.0			a:胴部四角形に鍛造
9-12	1面遺構外	鉄釘	頭部	長[3.5] 幅1.0～1.9 厚1.0			a:胴部四角形に鍛造
9-13	1面遺構外	鉄釘	頭～胴部	長[3.6] 幅0.8～1.5 厚1.1			a:胴部四角形に鍛造
9-14	1面遺構外	不明鉄製品	胴部？	長[5.0] 幅1.3～1.8 厚0.8			a:断面薄い長方形に鍛造
10-1	1面構築土中	かわらけ	口縁～底部1/2	(6.8)	4.4	2.0	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多・雲母・赤色粒 やや粗胎　c:橙色 e:良好　f:口縁部一部に煤付着、燈明皿
10-2	1面構築土中	かわらけ	口縁部2/5～底部1/2	(7.6)	4.7	1.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・泥岩粒 粗胎 やや砂質 c:黄橙色　e:良好
10-3	1面構築土中	かわらけ	口縁部1/4～底部1/3	(7.8)	(5.6)	1.45	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 砂質　c:黄橙色　e:やや良好
10-4	1面構築土中	かわらけ	口縁部1/4～底部1/5	(7.7)	(4.6)	2.2	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好 f:二次焼成の為、全体が焼けている
10-5	1面構築土中	かわらけ	口縁部1/6～底部1/3	(8.4)	(6.0)	1.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好 f:二次焼成の為、全体が焼けている

表２　遺物観察表（２）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
10-6	1面構築土中	かわらけ	口縁～底部 1/4	(8.1)	(5.5)	1.8	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒 やや粗胎　c:黄橙色 e:良好
10-7	1面構築土中	かわらけ	口縁～底部 1/3	(8.2)	(5.2)	1.8	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎　c:黄橙色　e:やや良好
10-8	1面構築土中	かわらけ	口縁部2/5～底部1/2	(10.6)	6.6	3.05	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒多い・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎 やや砂質　c:淡橙色　e:良好
10-9	1面構築土中	かわらけ	口縁～底部 1/4	(11.1)	(8.4)	3.0	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色 e:良好
10-10	1面構築土中	かわらけ	口縁部1/5～底部1/4	(11.8)	(5.8)	3.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎　c:橙色　e:良好
10-11	1面構築土中	かわらけ	口縁部1/5～底部1/4	(12.7)	(7.5)	3.0	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒 粗胎　c:黄橙色 e:良好
10-12	1面構築土中	かわらけ	口縁～底部 1/4	(14.3)	(10.2)	3.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針 粗胎 c:橙色　e:良好
10-13	1面構築土中	かわらけ	口縁部1/3～底部1/2	12.7	8.0	3.3	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 粗胎　c:黄橙色　e:やや良好
10-14	1面構築土中	かわらけ	口縁部1/3～底部4/5	13.8	8.1	3.5	a:轆轤 外底右回転糸切痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 粗胎　c:橙色　e:良好
10-15	1面構築土中	龍泉窯系 青磁　劃花文碗	口縁部小片	—	—	—	a:内面劃花文　b:灰色 精良緻密　d:暗灰緑色半透明　e:良好
10-16	1面構築土中	瀬戸　瓶子	肩部片	—	—	—	a:灰釉ハケ塗り 胴部に周回する３つの条線　b:灰白色 黒色粒 良胎 d:淡灰緑色透明　e:良好
10-17	1面構築土中	常滑　壺	胴部小片	—	—	—	a:輪積み　b:淡灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:外面赤褐色 内面淡茶褐色　e:良好
10-18	1面構築土中	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅2.2			a:輪積み　b:淡灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・石英粒 粗胎 粘質　c:外面赤褐色 降灰多量で明灰色　e:良好　f:中野編年７～８型式
10-19	1面構築土中	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅4.3			a:輪積み　b:灰黒色 砂粒・白色粒・黒色粒 粗胎　c:褐色～淡赤褐色 e:良好　f:中野編年８型式
10-20	1面構築土中	常滑　甕	底部1/5以下	—	—	—	a:輪積み 外底砂目痕　b:淡褐色 砂粒・白色粒多い 粗胎　c:淡赤褐色 降灰部灰白色　e:良好　f:内面降灰 内底弱い磨滅
10-21	1面構築土中	常滑 片口鉢Ⅰ類	胴部小片	—	—	—	a:輪積み 下部横位のヘラ削り　b:黄灰色 砂粒・白色粒 やや粗胎 c:黄灰色　e:やや不良　f:内面強い磨滅
10-22	1面構築土中	常滑甕磨耗陶片	完形	長8.6 幅6.1 厚1.1 ～ 1.3			c:表面淡黄色 裏面灰色　f:裏面中央部を除き全体を使用、非常に強く磨耗
10-23	1面構築土中	砥石（中砥）	上下部欠損	長(7.0) 幅2.7 ～ 3.3 厚3.1			b:凝灰岩　c:赤味白色　f:伊予産 全体を使用、所々に切り傷がみられる
10-24	1面構築土中	砥石（中砥）	上下部欠損	長4.9 幅2.9 厚1.0 ～ 1.7			b:安山岩　c:黄灰色　f:上野産 全体を使用、所々に切り傷がみられる
10-25	1面構築土中	泥岩製　円板	一部欠損	長[7.8] 幅7.8 厚3.3			a:円形に加工　b:凝灰質泥岩　c:淡黄色
10-26	1面構築土中	鉄釘	完形	長4.1 幅0.6 ～ 1.3 厚0.5			a:胴部四角形に鍛造
10-27	1面構築土中	鉄釘	頭～胴部	長(5.9) 幅1.06 ～ 1.3 厚1.0			a:胴部四角形に鍛造
10-28	1面構築土中	鉄釘	頭～胴部	長(4.6) 幅0.6 ～ 1.2 厚0.7			a:胴部四角形に鍛造
14-1	2面　土坑1	青磁　碗	胴部小片	—	—	—	b:明灰色 黒色粒 精良緻密　d:暗灰緑色透明 内外面施釉 釉層やや薄い e:良好　f:内面傷（使用痕）多い
14-2	2面　土坑1	青磁　碗	高台部小片	—	—	—	b:灰白色 精良緻密　d:灰緑色半透明 内外面施釉 高台畳付露胎　e:良好
14-3	2面　土坑1	褐釉　壺	肩部小片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・白色粒・黒色粒 良胎 緻密　d:黒褐色不透明 外面施釉 内面露胎　e:良好　f:同一個体（実測不可遺物）９小片あり
14-4	2面　土坑1	褐釉　壺	肩部小片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎 粘質　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎　e:良好　f:図14-3と同一個体
14-5	2面　土坑1	褐釉　壺	胴部小片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎 粘質　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎　e:良好　f:図14-3と同一個体
14-6	2面　土坑1	褐釉　壺	胴部小片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎 粘質　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎　e:良好　f:図14-3と同一個体
14-7	2面　土坑1	鉄釘	頭部一部欠損	長4.6 幅0.4 ～ 0.9 厚0.6			a:胴部四角形に鍛造
14-8	2面　土坑2	かわらけ	口縁～底部 1/6	(7.4)	(5.2)	2.0	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好

表３　遺物観察表（３）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
14-9	2面　土坑2	かわらけ	口縁～底部 1/5	(7.6)	(5.2)	1.6	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・赤色粒 やや粗胎　c:橙色　e:良好
14-10	2面　土坑2	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/2	(7.6)	4.6	1.95	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母多い・海綿骨針・泥岩粒 粗胎　c:橙色　e:良好
14-11	2面　土坑2	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/2	(8.1)	4.8	1.95	a:轆轤 外底右回転糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
14-12	2面　土坑2	かわらけ	口縁～底部 1/6	(10.9)	(6.5)	3.15	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母 やや粗胎　c:黄橙色 e:良好
14-13	2面　土坑2	かわらけ	口縁部2/5 ～底部1/2	(11.8)	(8.1)	3.15	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
14-14	2面　土坑2	かわらけ	口縁～底部 1/3	(12.2)	(6.7)	2.9	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針 やや粗胎　c:黄灰色　e:やや不良
14-15	2面　土坑2	かわらけ	口縁～底部 1/5	(12.8)	(7.8)	3.3	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
14-16	2面　土坑2	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/4	(13.7)	(8.3)	3.4	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:橙色　e:良好
14-17	2面　土坑2	白磁　皿	底部小片	—	—	—	a:内底に周回する沈線　b:明灰白色 黒色粒 精良緻密　d:暗灰白色半透明 内外面施釉 高台部露胎　e:良好
14-18	2面　土坑2	瀬戸　瓶子	胴部小片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒 良胎　c:灰白色　e:良好
14-19	2面　土坑2	鉄釘	完形	長3.4 幅0.6 ～ 1.0 厚0.6			a:胴部四角形に鍛造
14-20	2面　土坑3	かわらけ	口縁部1/4 ～底部2/3	(13.2)	(7.4)	3.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 砂質　c:黄橙色　e:良好　f:口縁部油煤付着 燈明皿
14-21	2面　土坑3	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	—	a:輪積み　b:暗灰色 砂粒・白色粒・小石粒 やや粗胎　c:淡褐色 降灰部 灰緑色　e:良好　f:内面降灰多量
14-22	2面　土坑4	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/8	(7.8)	(5.2)	3.3	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒やや多い・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 やや砂質　c:黄橙色　e:良好
14-23	2面　土坑4	かわらけ	口縁部1/4 ～底部1/2	(10.0)	6.6	3.3	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・赤色粒・泥岩粒 粗胎 やや砂質　c:黄橙色　e:良好
14-24	2面　土坑4	白磁　口はげ碗	口縁部小片	推定 14.8	—	—	b:灰白色 黒色粒 精良緻密　d:灰白色半透明 内外面施釉 口唇部露胎 e:良好
14-25	2面　土坑4	常滑片口鉢Ⅰ類 転用磨耗陶片	完形	長4.3 幅5.0 厚1.0			b:明灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 粗胎　c:明灰色　e:良好　f:裏・右側面除き弱い磨耗、特に左側面丸くなり磨耗強い
14-26	2面　土坑4	鉄釘	完形	長5.3 幅0.4 ～ 1.1 厚0.9			a:胴部四角形に鍛造
14-27	2面　土坑4	鉄釘	完形	長4.6 幅0.4 ～ 1.0 厚1.1			a:胴部四角形に鍛造
14-28	2面　土坑4	鉄釘	頭～胴部	長(5.1) 幅1.2 厚1.1			a:胴部やや四角形に鍛造
14-29	2面　土坑5	かわらけ	口縁～底部 1/3	(12.1)	(6.2)	3.3	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
14-30	2面　土坑5	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/3	(13.8)	(8.4)	3.0	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
14-31	2面　土坑6	かわらけ	口縁部1/4 ～底部1/3	(8.2)	(5.8)	1.9	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:灰黄色　e:やや不良
14-32	2面　土坑6	かわらけ	口縁～底部 1/4	(10.2)	(6.0)	2.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 c:黄橙色　e:良好
14-33	2面　土坑6	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/2	(10.3)	7.0	3.0	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 c:黄橙色　e:良好
14-34	2面　土坑6	かわらけ	口縁部1/4 ～底部1/8	(12.4)	(6.8)	3.1	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎　c:灰黄色　e:やや不良
14-35	2面　土坑6	かわらけ	口縁部1/4 ～底部1/6	(13.0)	(7.6)	3.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
14-36	2面　土坑6	滑石製　鍋	口縁部片	—	—	—	d:銀灰色　f:内面傷多い
14-37	2面　土坑6	常滑　鳶口壺	胴部1/3	胴部径(13.4)		[6.0]	b:灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:褐色 降灰部灰緑色　e:良好 f:外面胴部にかけ降灰
14-38	2面　土坑8	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～底部 1/3	(30.0)	(11.2)	(13.6)	a:輪積み 外底砂目痕　b:灰褐色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石 粗胎 c:外面赤褐色 降灰部灰緑色　e:良好　f:内面降灰多量 内底弱い磨滅
15-1	2面　P1	瀬戸　壺	高台部小片	—	—	—	a:削り出し高台　b:灰白色 黒色粒 良胎　c:明灰色　e:良好 硬質

表４　遺物観察表（４）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
15-2	2面　P1	鉄釘	完形	長5.7 ～ 6.5 幅0.7 ～ 1.0 厚0.7			a:胴部四角形に鍛造
15-3	2面　P1	鉄釘	頭～胴部	長(4.2) 幅1.0 ～ 1.6 厚1.0			a:胴部四角形に鍛造
15-4	2面　P3	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	—	b:灰褐色 砂粒・黒色粒 やや良胎　c:赤褐色 降灰部灰緑色　e:良好　f:内面降灰多量
15-5	2面　P4	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/4	(6.8)	(5.4)	1.9	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針 やや粗胎　c:橙色 e:良好
15-6	2面　P4	瀬戸　卸皿	底部1/3	—	推定9.0	—	a:内底にヘラ状工具による卸目描き　b:灰白色 白色粒・黒色粒 良胎　c:灰白色　e:良好 f:内面卸目外側に釉溜まる 卸目部に若干の自然釉 外面釉ダレ
15-7	2面　P5	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	—	a:輪積み　b:明灰白色 砂粒・白色粒・石英粒・小石粒 やや粗胎　c:灰色 e:良好　f:図15-8と同一個体か
15-8	2面　P5	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片	—	—	—	a:貼付高台　b:明灰白色 砂粒・白色粒・石英粒・小石粒 やや粗胎　c:灰色　e:良好　f:図15-7と同一個体か
15-9	2面　P5	土器質　火鉢	口縁部小片	—	—	—	a:内面磨き調整（磨耗）b:淡桃色 砂粒・雲母・赤色粒 やや粗胎　c:内面橙褐色 外面黄橙色　e:良好　f:内面火熱により変色
15-10	2面　P6	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅1.7			b:灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:褐色 降灰部灰緑色　e:良好f:内面～外面口縁部にかけ降灰 中野編年６a型式
15-11	2面　P7	白磁　口はげ皿	口縁部1/8	(9.8)	—	[1.2]	b:灰色 黒色粒 精良緻密　d:白濁色不透明 内外面施釉 口唇部露胎 気孔少量 ツヤなし　e:良好　f:口唇部暗灰色に変色
15-12	2面　P7	龍泉窯系　青磁 鎬蓮弁文碗	胴部小片	—	—	—	a:外面鎬蓮弁文　b:灰色 黒色粒 精良緻密　d:暗灰緑色透明 内外面施釉 釉層薄い　e:良好　f:内面傷（使用痕？）多い
15-13	2面　P7	褐釉　壺	胴部小片	—	—	—	b:灰褐色 白色粒・黒色粒 やや粗胎　d:明褐色不透明 外面施釉 内面釉ダレ厚い　e:良好
15-14	2面　P7	鉄釘	先端部欠損	長(3.8) 幅0.3 ～ 0.8 厚0.6			a:胴部四角形に鍛造
15-15	2面　P8	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/8	(13.0)	(8.3)	3.3	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎　c:淡橙色　e:良好
15-16	2面　P8	褐釉　壺	胴部小片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・白色粒・黒色粒 良胎 緻密　d:黒褐色不透明 外面施釉 内面露胎　e:良好　f:図14-3 ～ 6と同一個体か
15-17	2面　P8	褐釉　壺	底部小片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・白色粒・黒色粒 良胎 緻密　d:黒褐色不透明 外面施釉 内面露胎　e:良好　f:図14-3 ～ 6と同一個体か
15-18	2面　P8	鉄釘	完形	長4.7 幅0.3 ～ 0.9 厚0.6			a:胴部四角形に鍛造
15-19	2面　P12	かわらけ	口縁～底部 1/4	(10.4)	(8.8)	1.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:橙色　e:良好　f:口縁部油煤付着 燈明皿か
15-20	2面　P12	白かわらけ	胴～底部 小片	—	—	—	b:白灰色 砂粒 精良土　c:赤味白灰色　e:良好
15-21	2面　P12	鉄釘	完形	長4.8 幅1.1 厚0.6			a:胴部やや四角形に鍛造
15-22	2面　P13	褐釉　壺	胴部小片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒 やや良胎 緻密　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎　e:良好
15-23	2面　P14	褐釉　壺	肩部小片	—	—	—	b:灰黄白色 白色粒・褐色粒 良胎 緻密　d:黒褐色不透明 外面施釉 内面露胎　e:良好
15-24	2面　P14	褐釉　壺	胴部小片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・白色粒・褐色粒 やや良胎 緻密　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎　e:良好
15-25	2面　P15	かわらけ	口縁部1/6 ～底部1/2	(8.4)	6.4	1.6	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 c:黄橙色　e:良好　f:内外面二次焼成により煤付着
15-26	2面　P15	かわらけ	口縁部1/8 ～底部完形	(13.2)	8.2	3.4	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 c:橙色　e:良好
15-27	2面　P15	鉄釘	胴～先端部	長(3.6) 幅0.4 ～ 0.9 厚0.6			a:胴部四角形に鍛造
15-28	2面　P17	龍泉窯系　青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	—	a:外面鎬蓮弁文　b:白色 黒色粒 精良緻密　d:青緑色半透明 内外面施釉 釉層厚い　e:良好
15-29	2面　P18	瀬戸　壺	肩部小片	—	—	—	a:肩部に周回する３つの条線　b:白灰色 砂粒 良胎　d:明灰緑色半透明 e:良好　f:二次焼成により外面器壁荒れる
16-1	2面遺構外	かわらけ	口縁～底部 1/3	(7.0)	(4.6)	1.9	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・赤色粒 やや粗胎　c:橙色　e:良好
16-2	2面遺構外	かわらけ	口縁～底部 1/4	(7.0)	(5.7)	1.9	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色 e:やや良好
16-3	2面遺構外	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/2	(7.3)	4.6	1.9	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎　c:橙色　e:良好

表５　遺物観察表（５）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
16-4	２面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/5	(7.8)	(6.0)	1.6	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・赤色粒・泥岩粒 粗胎 c:黄橙色　e:良好
16-5	２面遺構外	かわらけ	口縁部5/6～底部完形	7.9	5.7	1.6	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
16-6	２面遺構外	かわらけ	口縁部4/5～底部完形	7.7	4.9	2.1	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
16-7	２面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.9)	(5.4)	1.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針 やや良胎　c:黄橙色　e:やや良好
16-8	２面遺構外	かわらけ	口縁部1/8～底部1/4	(8.2)	(5.6)	2.1	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒 粗胎 c:黄橙色　e:良好
16-9	２面遺構外	かわらけ	口縁部一部欠損	7.2	4.5	2.3	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
16-10	２面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/5	(8.0)	(4.6)	2.1	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・海綿骨針・泥岩粒多い 粗胎　c:黄橙色　e:やや良好
16-11	２面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/3	(9.0)	(6.8)	2.25	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
16-12	２面遺構外	かわらけ	口縁部1/8～底部1/3	(11.2)	(6.7)	2.9	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針 やや良胎　c:橙色　e:良好
16-13	２面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/3	(11.0)	(6.6)	2.9	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 c:黄橙色　e:良好
16-14	２面遺構外	かわらけ	口縁部1/3～底部1/4	(12.2)	(7.6)	4.8	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
16-15	２面遺構外	かわらけ	口縁部1/8～底部1/2	(12.3)	7.7	3.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒 やや粗胎　c:黄橙色 e:良好
16-16	２面遺構外	龍泉窯系　青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	—	a:外面鎬蓮弁文　b:灰白色 黒色粒 精良緻密　d:灰緑色半透明 内外面施釉 釉層やや厚い　e:良好
16-17	２面遺構外	龍泉窯系　青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	—	a:外面鎬蓮弁文　b:明灰色 精良緻密　d:灰緑色半透明 内外面施釉 釉層薄い　e:良好
16-18	２面遺構外	龍泉窯系　青磁 鎬蓮弁文碗	胴部小片	—	—	—	a:外面鎬蓮弁文　b:灰白色 黒色粒 精良緻密　d:淡灰色透明 内外面施釉 釉層薄い　e:良好
16-19	２面遺構外	青磁　香炉	口縁～肩部1/5	(8.8)	—	[2.8]	a:外面鎬蓮弁文　b:灰白色 黒色粒 精良緻密　d:灰緑色半透明 内外面施釉 釉層厚い　e:良好
16-20	２面遺構外	青白磁　蓋	天頂部1/6	—	—	—	a:外面天頂部草花状の文様　b:白色 精良緻密　d:水青色半透明 外面施釉 ツヤあり 内面露胎　e:良好
16-21	２面遺構外	褐釉　壺	肩部小片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・白色粒・黒色粒 粗胎 粘質　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎　e:良好　f:同一個体４片あり
16-22	２面遺構外	瀬戸　卸皿	口縁～胴部小片	—	—	—	a:灰釉ハケ塗り 内面下部にヘラ状工具による卸目描き　b:灰白色 砂粒 精良土　d:灰緑色透明 外面施釉　e:良好 f:内面所々釉剥がれている
16-23	２面遺構外	瀬戸　壺	胴部小片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・黒色粒 良胎　c:明灰色　e:良好　f:外面降灰少量　同一個体２片あり
16-24	２面遺構外	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅1.7			a:輪積み　b:暗灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 粗胎　c:赤褐色　e:良好 f:内外面自然釉多量 中野編年７型式
16-25	２面遺構外	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅5.0			a:輪積み　b:暗灰色 白色粒・小石粒 やや粗胎　c:褐色　e:良好　f:中野編年８型式
16-26	２面遺構外	常滑　甕	口縁～肩部片	推定口径40.4 縁帯幅5.7			a:輪積み　b:灰褐色 砂粒・白色粒・黒色粒 粗胎 粘質　c:暗赤褐色 降灰部黄灰緑色　e:良好　f:外面縁帯部を除き降灰 中野編年10型式
16-27	２面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	—	b:灰白色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:灰白色　e:良好　f:口縁～内面にかけ自然釉付着
16-28	２面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部約1/4	—	(9.7)	[6.4]	a:輪積み 貼付高台　b:黄味灰白色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗胎　c:灰白～灰色　e:良好　f:内面降灰多量・磨滅 外面下部若干磨滅
16-29	２面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部1/5以下	—	—	—	a:輪積み 貼付高台 外底糸切痕　b:黄味灰白色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:灰白色 降灰部暗灰色　e:良好　f:内面胴部降灰・弱い磨滅 内底磨滅
16-30	２面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	—	b:暗灰色 砂粒・白色粒 やや粗胎　c:暗褐色　e:良好
16-31	２面遺構外	常滑片口鉢Ⅰ類 転用磨耗陶片	完形	長9.0 幅3.7～4.0 厚0.7～1.1			b:砂粒・白色粒 良胎　c:灰白色　e:良好　f:表面一部を除き磨耗、特に側面が顕著
16-32	２面遺構外	瓦質　火鉢	口縁部小片	—	—	—	b:淡桃色 砂粒・雲母・白色粒・黒色粒 粗胎 やや粘質　c:暗灰色　e:良好　f:二次焼成により器壁全体荒れる
16-33	２面遺構外	瓦質　火鉢	口縁部小片	—	—	—	b:明灰色 砂粒・雲母・白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:灰色　e:良好
16-34	２面遺構外	瓦質　火鉢	底部小片	—	—	—	a:貼付脚 外底砂目痕　b:白灰色 砂粒多い・雲母・黒色粒 粗胎　c:暗灰色　e:やや良好

表６　遺物観察表（６）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
16-35	２面遺構外	土器質　火鉢	口縁部小片	—	—	—	b:暗橙色 砂粒・雲母・白色粒多い 粗胎　c:橙色　e:やや良好　f:内面磨き調整により磨滅 外面口縁下に菊花文スタンプ
16-36	２面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/2	—	—	1.4	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕 口縁部をやや滑らかに削り調整　b:砂粒・雲母・赤色粒 やや粗胎　c:淡黄橙色　e:やや良好　f:楕円の形状を呈す様相
16-37	２面遺構外	鉄釘	完形	長5.5　幅0.6～0.9 厚0.6			a:胴部四角形に鍛造
20-1	３面　土坑１	かわらけ	口縁～底部1/2	7.7	4.5	1.8	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母 やや粗胎　c:淡黄橙色　e:良好　f:外面胴部～内面胴部にかけ油煤付着 燈明皿
20-2	３面　土坑１	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.3)	(5.4)	1.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・海綿骨芯 やや粗胎 c:黄灰色　e:やや不良
20-3	３面　土坑１	かわらけ	口縁～底部1/5	(7.4)	(2.6)	2.0	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・海綿骨針 やや粗胎　c:淡橙色 e:良好　f:外面口縁部～内底にかけ油煤多量に付着 燈明皿
20-4	３面　土坑１	かわらけ	口縁～底部1/4	(8.1)	(6.2)	1.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
20-5	３面　土坑１	かわらけ	口縁部1/8～底部完形	(12.8)	7.2	3.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒多い・泥岩粒 やや粗胎　c:橙色　e:良好
20-6	３面　土坑１	白磁　印花文碗	胴部小片	—	—	—	a:内面印花文　b:白色 精良緻密　d:白濁色半透明 内外面施釉　e:良好
20-7	３面　土坑１	瀬戸　壺	肩部片	—	—	—	a:内面肩部指頭圧痕強い　b:明灰色 砂粒・黒色粒 良胎　c:灰白色 降灰部 灰緑色　e:良好　f:外面肩部降灰
20-8	３面　土坑１	鉄釘	胴部	長(3.8) 幅0.4～1.6 厚0.5			a:胴部四角形に鍛造
20-9	３面　土坑１	鉄釘	胴部	長(3.1) 幅0.8～1.0 厚0.5			a:胴部四角形に鍛造
20-10	３面　土坑２	かわらけ	口縁部1/6～底部4/5	(7.8)	5.8	1.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・泥岩粒 粗胎　c:淡黄橙色 e:良好
20-11	３面　土坑２	瓦質　火鉢	口縁部小片	—	—	—	b:暗灰～黄灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎 やや粘質　c:内面黄橙色 口縁部～外面暗灰色　e:やや良好
20-12	３面　土坑３	鉄釘	頭～胴部	長(4.5) 幅0.5～1.1 厚0.6			a:胴部四角形に鍛造
20-13	３面　土坑４	かわらけ	完形	7.8	4.9	2.0	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 粗胎　c:黄橙色　e:良好　f:口縁部若干油煤付着 燈明皿か
20-14	３面　土坑４	かわらけ	口縁一部欠損	11.95	7.9	3.8	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 粗胎　c:橙色　e:良好
20-15	３面　土坑４	かわらけ	口縁部1/6～底部4/5	(13.8)	(7.2)	3.4	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎 やや砂質　c:橙色　e:良好
20-16	３面　土坑６	東濃型山茶碗	口縁～胴部1/12	—	—	—	b:灰白色 黒色粒・石英粒 良胎 やや粘質　c:灰白色　e:良好　f:二次焼成により所々黒色に変色 藤澤編年７型式か
20-17	３面　土坑６	常滑 片口鉢Ⅱ類	胴～底部小片	—	—	—	a:輪積み 外底砂目痕 外面下部縦位ヘラ削り　b:淡褐～灰褐色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石 粗胎　c:赤褐色　e:良好
20-18	３面　土坑８	かわらけ	口縁部1/6～底部1/4	(7.2)	(4.6)	1.5	a:轆轤 外底右回転糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針 やや粗胎 c:黄橙色　e:良好
20-19	３面　土坑８	かわらけ	口縁～底部約1/2	(7.8)	(5.8)	1.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 粗胎　c:橙色　e:良好　f:口縁部油煤付着 燈明皿
20-20	３面　土坑８	かわらけ	口縁～底部1/6	(8.0)	(5.2)	1.6	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母 やや粗胎 やや砂質　c:淡黄橙色　e:良好
20-21	３面　土坑８	かわらけ	口縁部1/6～底部1/4	(8.8)	(7.4)	1.65	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母 やや粗胎 やや砂質　c:黄橙色　e:良好
20-22	３面　土坑８	かわらけ	口縁部1/6～底部1/3	(11.9)	(7.0)	3.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・泥岩粒 やや粗胎 やや砂質 c:淡黄橙色　e:良好
20-23	３面　土坑８	かわらけ	口縁部1/4～底部1/3	(12.4)	(8.4)	2.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針 やや粗胎 やや砂質　c:黄橙色　e:良好
20-24	３面　土坑８	かわらけ	口縁部1/8～底部1/4	(13.4)	(10.0)	3.4	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好　f:口縁部油煤付着 燈明皿
20-25	３面　土坑８	白かわらけ	胴～底部小片	—	—	—	b:白灰色 砂粒・雲母 良胎 やや砂質　c:赤味白灰色　e:良好
20-26	３面　土坑８	白磁　口はげ皿	口縁部小片	—	—	—	b:白色 精良緻密　d:白灰色半透明 内外面施釉 口唇部露胎　e:良好
20-27	３面　土坑８	景徳鎮窯　白磁 印花文皿	底部小片	—	—	—	a:内面印花文　b:灰白色 黒色粒 良胎 緻密　d:黄味白色半透明 内外面施釉　e:良好
20-28	３面　土坑９	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(6.0)	1.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針 やや粗胎　c:灰黒色　e:良好？　f:二次焼成により全体が変色、器壁荒れる

表７　遺物観察表（７）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
20-29	3面　P4	かわらけ	口縁部1/4～底部1/8	(7.2)	(5.4)	1.8	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒多い・雲母・海綿骨針 やや粗胎　c:黄橙色 e:良好
20-30	3面　P4	かわらけ	口縁～底部1/8	(13.2)	(8.2)	3.1	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
20-31	3面　P5	かわらけ	口縁部1/8～底部1/4	(6.8)	(5.2)	1.1	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
20-32	3面　P5	かわらけ	口縁部1/4～底部1/5	(9.2)	(6.6)	1.7	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好　f:二次焼成により底部以外黒～橙褐色にに変色
20-33	3面　P5	鉄釘	胴～先端部	長(3.2) 幅0.5～1.0 厚0.9			a:胴部四角形に鍛造
20-34	3面　P7	常滑　甕	底部小片	—	—	—	a:輪積み 外底砂目痕 外面胴部縦位ヘラ削り b:灰色 砂粒・白色粒 やや粗胎　c:淡橙色 降灰部灰緑色　e:良好　f:内面け降灰
20-35	3面　P9	鉄釘	胴部	長(3.4) 幅0.6～0.8　厚0.8			a:胴部四角形に鍛造
20-36	3面　P10	かわらけ	口縁部1/8～底部1/3	(8.2)	(5.4)	1.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:淡黄橙色　e:良好
20-37	3面　P11	かわらけ	口縁部1/5～底部1/4	(8.0)	(6.4)	1.3	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・海綿骨針・泥岩粒 粗胎　c:淡黄橙色　e:良好
20-38	3面　P11	かわらけ	口縁部1/4～底部1/3	(11.7)	(7.2)	4.1	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・赤色粒・泥岩粒 粗胎 やや砂質　c:橙色　e:良好
20-39	3面　P11	かわらけ	口縁・底部一部欠損	12.1	7.8	3.4	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
20-40	3面　P11	鉄釘	頭～胴部	長(5.8) 幅0.9～1.1 厚0.8			a:胴部やや四角形に鍛造
20-41	3面　P15	かわらけ	口縁部3/4～底部完形	8.05	5.5	1.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒やや多い・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 砂質　c:淡黄橙色　e:良好
20-42	3面　P15	常滑　甕	胴部片	—	—	—	a:輪積み　b:暗灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 粗胎　c:内面橙褐色 外面褐色　e:良好　f:外面薄く幾何学文様の押印文
20-43	3面　P16	かわらけ	口縁部1/2～底部2/3	(12.0)	8.0	3.25	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎 砂質　c:橙色　e:良好
21-1	3面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/5	(7.0)	(5.4)	1.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
21-2	3面遺構外	かわらけ	口縁部1/2～底部3/4	(7.8)	(9.4)	1.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好　f:口縁部油煤付着 燈明皿
21-3	3面遺構外	かわらけ	口縁部3/4～底部完形	(7.5)	(4.6)	1.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 多い 粗胎　c:淡橙色　e:良好　f:口縁部油煤付着 燈明皿
21-4	3面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.6)	(4.6)	1.8	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒多い・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎 やや砂質　c:淡黄橙色　e:良好
21-5	3面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/8	(8.2)	(5.2)	1.5	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 やや砂質 c:黄橙色　e:良好　f:口縁部油煤付着 燈明皿
21-6	3面遺構外	かわらけ	口縁～底部3/5	(8.2)	(5.8)	1.6	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 粗胎　c:淡黄橙色　e:良好
21-7	3面遺構外	かわらけ	口縁部1/8～底部1/6	(9.0)	(7.4)	1.3	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎　c:淡黄橙色　e:良好
21-8	3面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(8.8)	(6.4)	1.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・海綿骨針・泥岩粒 粗胎　c:淡橙色 e:良好
21-9	3面遺構外	かわらけ	口縁部1/6～底部1/3	(10.4)	(5.4)	3.0	a:轆轤 外底糸切・板状痕　b:砂粒・雲母・赤色粒多い・泥岩粒 粗胎 c:橙色　e:良好　f:全体に二次焼成を受け黒く変色
21-10	3面遺構外	かわらけ	口縁部1/3～底部2/3	(10.2)	(5.6)	3.1	a:轆轤 外底糸切・板状痕　b:砂粒・雲母・赤色粒やや多い・泥岩粒 やや良胎 やや砂質　c:淡橙色　e:やや良好
21-11	3面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/6	(10.8)	(6.0)	2.8	a:轆轤 外底糸切痕　b:雲母・赤色粒 良胎 砂質　c:橙色　e:良好
21-12	3面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/5	(12.2)	(6.2)	3.4	a:轆轤 外底糸切・板状痕　b:砂粒・雲母多い・赤色粒・泥岩(2cm大を含む)粒 粗胎 やや砂質　c:黄橙色　e:やや良好
21-13	3面遺構外	かわらけ	口縁部2/5～底部1/3	(12.8)	(8.2)	3.2	a:轆轤 外底糸切・板状痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒やや多い 粗胎　c:黄橙色　e:良好
21-14	3面遺構外	白かわらけ	底部小片	—	—	[1.1]	a:外底糸切痕 貼付高台　b:暗灰色 砂粒 良土　c:淡白黄色　e:良好
21-15	3面遺構外	龍泉窯系　青磁鎬蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	—	a:外面鎬蓮弁文　b:灰白色 黒色粒 精良緻密　d:暗灰緑色半透明 内外面施釉 釉層薄い 内面粗い貫入あり　e:良好
21-16	3面遺構外	青磁　折縁鉢	口縁部小片	—	—	—	b:灰白色 精良緻密　d:青緑色半透明 内外面施釉 釉層厚い　e:良好

表８　遺物観察表（８）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
21-17	３面遺構外	青磁　碗	底部小片	—	—	—	b:灰白色 黒色粒 精良緻密　d:淡灰緑色半透明 内外面施釉 釉層やや厚い e:良好
21-18	３面遺構外	青磁　魚文鉢	底部1/7	—	—	[2.3]	a:外面鎬蓮弁文 内底魚文貼付　b:白灰色 黒色粒 精良緻密　d:青緑色半透明 内外面施釉 高台畳付露胎 釉層厚い ツヤあり　e:良好
21-19	３面遺構外	白磁　碗	底部2/3	—	(4.6)	[2.3]	a:ツケガケ 削出高台 内底周回する沈線　b:白色 黒色粒やや多い 緻密 d:青味白色半透明 内外面施釉 外面下部～高台内露胎　e:良好
21-20	３面遺構外	白磁　碗	底部1/4	—	(4.4)	[3.1]	a:ツケガケ 削出高台 内底周回する沈線　b:白色 黒色粒 精良緻密　d:青味灰白色半透明 内外面施釉 高台内所々露胎　e:良好
21-21	３面遺構外	白磁　四耳壺	肩部小片	—	—	—	a:肩部耳貼付　b:灰白色 黒色粒 精良緻密　d:青味灰白色半透明 内外面施釉 釉層薄い　e:良好
21-22	３面遺構外	白磁　壺	口縁部小片	—	—	—	b:淡灰黄色 黒色粒多い 良胎　d:淡黄灰色透明 内外面施釉 内面粗い貫入、外面細かい貫入あり　e:良好
21-23	３面遺構外	青白磁　口はげ皿	口縁部小片	—	—	—	a:口縁部釉拭き取り　b:白色 精良緻密　d:明青緑色透明 内外面施釉 口縁部露胎　e:良好
21-24	３面遺構外	青白磁　梅瓶	肩部小片	—	—	—	a:外面草花状の文様を陽刻　b:白色 精良緻密　d:淡水青色透明 外面施釉 内面露胎　e:良好
21-25	３面遺構外	青白磁　合子蓋	口縁～天頂部1/4	(6.0)	(4.2)	1.8	a:外面天頂部菊花状の文様 胴部蓮弁文　b:白色　黒色粒 精良緻密　d:淡水青色透明 外面施釉 内面口縁～胴部露胎 内面釉層薄い　e:良好
21-26	３面遺構外	褐釉　壺	肩部小片	—	—	—	b:黄味灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒 粗胎 やや緻密　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎、灰色　e:良好　f:図と21-27～34と同一個体
21-27	３面遺構外	褐釉　壺	胴部片	—	—	—	b:黄味灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒 粗胎 やや緻密　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎、灰色　e:良好　f:図21-26・28～34と同一個体
21-28	３面遺構外	褐釉　壺	胴部小片	—	—	—	b:黄味灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒 粗胎 やや緻密　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎、灰色　e:良好　f:図21-26・27・29～34と同一個体
21-29	３面遺構外	褐釉　壺	胴部片	—	—	—	b:黄味灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒 粗胎 やや緻密　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎、灰色　e:良好　f:図21-26～28・30～34と同一個体
21-30	３面遺構外	褐釉　壺	胴部片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒 粗胎 やや粘質 緻密　d:茶褐色不透明 外面施釉 内面露胎、灰色　e:良好　f:図21-26～29・31～34と同一個体
21-31	３面遺構外	褐釉　壺	胴部片	—	—	—	b:灰黄色 砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒 粗胎 やや粘質 緻密　d:茶褐色不透明 外面施釉 内面露胎、灰色　e:良好　f:図21-26～30・32～34と同一個体
21-32	３面遺構外	褐釉　壺	胴部片	—	—	—	b:黄味灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒 粗胎 やや緻密　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎、灰色　e:良好　f:図21-26～31・33・34と同一個体
21-33	３面遺構外	褐釉　壺	胴部小片	—	—	—	b:黄味灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒 粗胎 やや緻密　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎、灰色　e:良好　f:図21-26～32・34と同一個体
21-34	３面遺構外	褐釉　壺	胴部小片	—	—	—	b:黄味灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒 粗胎 やや緻密　d:褐色不透明 外面施釉 内面露胎、灰色　e:良好　f:図21-26～33と同一個体
22-1	３面遺構外	東遠型山皿	口縁部小片	—	—	—	b:暗灰色 黒色粒 良胎 緻密　c:暗灰色　e:良好 硬質　f:内面自然釉付着
22-2	３面遺構外	常滑　壺	口縁部小片	縁帯幅1.8			a:輪積み　b:灰白色 白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:暗灰色 降灰部緑灰色 e:良好 硬質　f:外面降灰 中野編年６a型式
22-3	３面遺構外	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅2.0			a:輪積み　b:明灰白色 砂粒・白色粒・黒色粒 粗胎 粘質　c:褐色　e:良好　f:縁帯下部釉溜まり 中野編年５型式
22-4	３面遺構外	常滑　甕	底部小片	—	—	—	a:輪積み 外面縦位ヘラ削り 外底砂目痕　b:灰色 砂粒・白色粒・小石粒 やや粗胎　c:暗褐色 降灰部灰緑色　e:良好 硬質　f:内面降灰多量
22-5	３面遺構外	常滑　甕	底部片	—	—	—	a:輪積み 外面縦位ヘラ削り 外底砂目痕　b:灰褐色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 粗胎　c:内面赤褐色 外面暗赤褐色　e:良好 硬質　f:内面降灰
22-6	３面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	—	a:輪積み　b:灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎 やや粘質　c:灰色 e:良好　f:内面自然釉かかる
22-7	３面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片	—	—	—	a:輪積み　b:白灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 図と同一個体か
22-8	３面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	—	b:灰白色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎 粘質　c:灰白色　e:良好
22-9	３面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	—	a:輪積み　b:白灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 粗胎　c:白灰色 e:良好　f:内面自然釉多量
22-10	３面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	—	a:輪積み　b:淡灰黄色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:淡灰黄色 e:良好　f:内面自然釉多量
22-11	３面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	—	a:輪積み　b:灰色 白色粒・黒色粒 やや粗胎 緻密　c:灰色　e:良好 やや硬質　f:内面自然釉かかる
22-12	３面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	—	a:輪積み　b:暗灰色 砂粒・白色粒多い・黒色粒多い 粗胎 粘質　c:外面赤褐色 内面暗褐色　e:良好　f:内面口縁下～胴部磨滅
22-13	３面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片	—	—	—	a:輪積み 外面縦位ヘラ削り 外底砂目痕　b:明灰色 砂粒・白色粒 やや粗胎 粘質　c:暗褐色 降灰部緑灰色　e:良好 硬質　f:内面降灰

表９　遺物観察表（９）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
22-14	３面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片	—	—	—	a:輪積み 外面縦位ヘラ削り 外底砂目痕　b:明灰色 砂粒・白色粒 やや粗胎 粘質　c:暗褐色 降灰部緑灰色　e:良好 硬質　f:内面降灰
22-15	３面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片	—	—	—	a:輪積み 外面縦位ヘラ削り 外底砂目痕　b:明黄橙色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 やや粗胎 緻密　c:褐色　e:良好 硬質　f:内面強い磨滅
22-16	３面遺構外	渥美　甕	口縁部小片	—	—	—	b:明灰色 砂粒・白色粒 やや粗胎 粘質　c:暗灰色　e:良好　f:外面自然釉付着
22-17	３面遺構外	伊勢　火鉢	口縁部小片	—	—	—	a:外面口縁部につまみ状の飾り？を貼付　内面丸棒状の工具による穿孔痕あり b:淡桃色 砂粒・雲母・黒色粒 やや粗胎　c:内面桃褐色 外面黄灰色　e:やや良好
22-18	３面遺構外	瓦質　火鉢	口縁部小片	—	—	—	b:灰色 砂粒・雲母・黒色粒 やや粗胎　c:暗灰色　e:良好
22-19	３面遺構外	瓦質　火鉢	口縁部小片	—	—	—	a:内面口縁下、縦位の磨き　b:淡黄灰色 砂粒多い・雲母・黒色粒 やや粗胎　c:淡黄灰色　e:良好 硬質 f:内面使用による煤付着
22-20	３面遺構外	土器質　火鉢	口縁部小片	—	—	—	a:内面縦位の磨き　b:黄橙色 砂粒・雲母・赤色粒 粗胎　c:淡橙色　e:やや良好
22-21	３面遺構外	平瓦	狭端部小片	長(7.5) 幅(6.0) 厚2.3			a:凹面離れ砂 凸面格子叩き目・離れ砂 端部ヘラ削り　b:灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 良胎　c:灰色　e:良好 硬質 f:永福寺期
22-22	３面遺構外	鉄釘	頭～胴部	長(11.3) 幅0.4 ～ 1.1 厚0.5			a:胴部四角形に鍛造
22-23	３面遺構外	鉄釘	頭～胴部	長(3.7) 幅0.8 ～ 1.3 厚0.8			a:胴部四角形に鍛造
22-24	３面遺構外	鉄釘	頭～胴部	長(5.4) 幅0.8 ～ 1.3 厚0.7			a:胴部扁平な形に鍛造
22-25	３面遺構外	鉄釘	頭～胴部	長(3.7) 幅0.8 厚0.7			a:胴部四角形に鍛造
22-26	３面遺構外	鉄釘	頭～胴部	長(3.1) 幅0.6 ～ 0.9 厚0.5			a:胴部四角形に鍛造
22-27	３面遺構外	鉄釘	頭～胴部	長(3.5) 幅0.9 ～ 1.1 厚0.7			a:胴部多角形に鍛造
22-28	３面遺構外	鉄釘	胴～先端部	長(4.4) 幅0.4 ～ 0.7 厚0.6			a:胴部四角形に鍛造
22-29	３面遺構外	鉄釘	胴～先端部	長(3.7) 幅0.2 ～ 0.5 厚0.5			a:胴部四角形に鍛造
22-30	３面遺構外	鉄釘	胴部	長(3.2) 幅0.4 ～ 0.7 厚0.4			a:胴部四角形に鍛造
22-31	３面遺構外	鉄釘	胴部	長(4.8) 幅0.5 ～ 1.0 厚0.4			a:胴部扁平な四角形に鍛造
22-32	３面遺構外	石不明加工品	小片	長2.8 ～ 3.7 幅1.7 厚0.5 ～ 0.7			a:表面張娜痕 側面丁寧な削り　c:淡緑色　f:緑泥片岩 板碑を加工か
22-33	３面遺構外	銅銭	完形	径2.5 厚1.15 孔径0.7			f:元祐通寶 北宋 1086年 篆書
22-34	３面遺構外	須恵器　甕	胴部小片	—	—	—	a:内面青海波文 外面格子叩き文様　b:明灰色 砂粒 良胎　c:明灰色 e:良好 硬質　f:全体が摩耗
25-1	４面　土坑１	かわらけ	口縁～底部 1/6	(9.2)	(7.2)	1.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒 やや粗胎　c:黄灰色 e:やや不良
25-2	４面　土坑１	かわらけ	口縁部1/4 ～底部1/3	(10.4)	(8.8)	1.8	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 粗胎　c:黄灰色　e:やや不良
25-3	４面　土坑１	鉄釘	頭～胴部	長(4.3) 幅0.5 ～ 1.1 厚1.0			a:胴部多角形、下部四角形に鍛造
25-4	４面　土坑１	鉄釘	胴部	長(3.0) 幅0.4 ～ 1.0 厚0.9			a:胴部四角形に鍛造
25-5	４面　土坑３	龍泉窯系 青磁　折縁碗	口縁部小片	—	—	—	b:灰白色 黒色粒 精良緻密　d:青緑色半透明 内外面施釉 釉層厚い ツヤあり　e:良好
25-6	４面　土坑５	白かわらけ	口縁部1/8 ～底部1/4	(10.0)	(5.4)	2.9	a:轆轤 外底糸切痕　b:雲母・黒色粒 良胎　c:赤味白色　e:良好
25-7	４面　土坑５	常滑 片口鉢Ⅰ類	胴～底部片	—	—	—	a:外底砂目痕　b:淡灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:黄灰色 e:良好
25-8	４面　土坑５	常滑 片口鉢Ⅰ類	胴～底部片	—	—	—	a:外底砂目痕　b:明灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:灰色　e:良好
25-9	４面　土坑８	常滑　甕	口縁部片	縁帯幅2.2			a:輪積み　b:明灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:暗褐色 降灰部白緑色　e:良好　f:内面胴部上～口縁部に降灰 中野編年５型式
25-10	４面　土坑８	常滑　甕	肩部片	—	—	—	a:輪積み　b:灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 粗胎　c:褐色　e:良好　f:外面縦位に３本の線刻あり　図25-16と同一個体か

表１０　遺物観察表（１０）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
25-11	4面　P2	かわらけ	口縁部4/5～底部完形	8.1	5.4	1.6	a:轆轤 外底右回転糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒多い・泥岩粒 粗胎　c:淡黄橙色　e:良好
25-12	4面　P2	かわらけ	口縁部1/12～底部1/2	(11.6)	7.0	3.0	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒やや多い・雲母・赤色粒・海綿骨針 やや粗胎　c:淡黄橙色　e:良好
25-13	4面　P2	鉄釘	胴部	長(6.2) 幅0.4～0.7 厚0.5			a:胴部四角形に鍛造
25-14	4面　P7	かわらけ	口縁～底部1/6	(7.5)	(6.0)	1.6	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 砂質　c:淡橙色　e:良好
25-15	4面　P7	かわらけ	口縁部1/4～底部2/5	(12.1)	(8.8)	2.9	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　砂質　c:淡橙色　e:良好
25-16	4面　P7	常滑　甕	肩部小片	—	—	—	a:輪積み　b:明灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒 粗胎　c:暗褐色 e:良好　f:外面縦位に３本の線刻あり　図25-10と同一個体か
25-17	4面　P10	かわらけ	口縁部1/5～底部1/3	(8.2)	(6.0)	1.8	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 c:黄橙色　e:良好
25-18	4面　P10	かわらけ	口縁部1/8～底部1/5	(9.8)	(6.8)	1.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・雲母・赤色粒 やや粗胎 やや砂質　c:淡黄橙色　e:良好
25-19	4面　P12	かわらけ	口縁～底部1/3	(8.8)	(5.6)	1.6	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒多い・雲母・赤色粒・泥岩粒 粗胎 やや砂質 c:淡黄橙色　e:良好
25-20	4面　P12	かわらけ	口縁～底部1/5	(11.0)	(7.8～9.2)	2.8	a:手捏ね 外底指頭痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎 やや砂質　c:淡黄橙色　e:良好
25-21	4面　P12	青磁　袋物	胴部小片	—	—	—	b:灰白色 黒色粒 精良緻密　d:淡灰色透明 内外面施釉 外面釉層やや厚い 内面粗い貫入あり　e:良好
26-1	4面遺構外	かわらけ	口縁部1/5～底部1/3	(7.4)	(5.0～6.2)	1.8	a:手捏ね 外底指頭痕　b:砂粒多い・雲母・赤色粒・泥岩粒 粗胎　c:黄橙色　e:良好
26-2	4面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/6	(7.3)	(5.0)	2.1	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎 やや砂質　c:橙色　e:良好
26-3	4面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(6.2)	1.8	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・泥岩粒 やや粗胎 やや砂質　c:黄橙色　e:良好
26-4	4面遺構外	かわらけ	口縁部1/2～底部1/3	7.4	5.2	2.1	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・泥岩粒 やや粗胎　c:淡橙色 e:良好
26-5	4面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/5	(7.7)	(6.2)	1.7	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒 やや粗胎 やや砂質 c:黄橙色　e:良好　f:口縁部油煤付着 燈明皿
26-6	4面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.4)	(5.8)	1.9	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒多い・赤色粒・海綿骨針 粗胎　c:黄橙色　e:良好
26-7	4面遺構外	かわらけ	口縁部1/5～底部1/4	(8.0)	(5.0)	1.5	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒・海綿骨針・泥岩粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
26-8	4面遺構外	かわらけ	口縁部2/5～底部1/2	(11.2)	7.0	3.3	a:轆轤 外底糸切・板状圧痕　b:砂粒・雲母・赤色粒多い・泥岩粒 やや粗胎 やや砂質　c:明橙色　e:良好　f:口縁部油煤付着 燈明皿
26-9	4面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(12.2)	(7.6)	3.8	a:轆轤 外底糸切痕　b:砂粒・雲母・海綿骨針 やや粗胎 砂質　c:黄橙色 e:良好
26-10	4面遺構外	青白磁　合子蓋	頂～胴部1/3	(5.0)	—	[1.3]	a:外面天頂部手描きによる放射状の文様　b:明灰白色 黒色粒 精良緻密 d:淡水青色透明 外面施釉 内面露胎　e:良好
26-11	4面遺構外	青白磁　袋物	肩部小片	—	—	—	a:外面貼付不明文様　b:白灰色 精良緻密　d:青緑色不透明 外面施釉 内面露胎　e:良好　f:二次焼成により器壁荒れる
26-12	4面遺構外	常滑　甕	肩部片	—	—	—	a:輪積み　b:灰色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎 粘質　c:灰色　e:良好　f:外面縦位に幾何学文様の押印文
26-13	4面遺構外	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅推定1.5			a:輪積み　b:灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 粗胎　c:暗褐色～赤褐色　e:良好 硬質　f:内面胴部上～外面口縁下に降灰 中野編年５型式
26-14	4面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	—	a:輪積み　b:淡橙色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗胎　c:黄橙色　e:良好
26-15	4面遺構外	鉄釘	胴部	長(3.3) 幅0.7～1.0 厚1.0			a:胴部四角形に鍛造

表11　層位別出土遺物一覧表

種別 ＼ 出土層位		1面遺構	1面遺構外	1面構築土中	2面遺構	2面遺構外	3面遺構	3面遺構外	4面遺構	4面遺構外	合計
かわらけ	糸切りかわらけ	大35　小27	大37　小50	大87 中1 小90	大188 中6 小202	大153 中6 小79	大290 中1 小103	大249 中17 小59	大128 中3 小101	大124　小48	2084
	手捏ねかわらけ						大6　小1		大7 中1 小11	大3　小1	30
	燈明皿			小4	大1　中3　小3	小1	大1 中1 小6	大3　小4	大3　小1	小2	33
	白かわらけ						1		2		3
舶載陶磁器	青磁			碗2	碗3	碗4　香炉1		碗5　折縁鉢1	壺1　折縁碗1		18
	白磁			皿1	皿4	皿1	皿3	碗2　壺2		皿1	14
	青白磁		壺1			合子蓋1	皿2　香炉1	皿1 梅瓶1 合子蓋1	皿1	合子蓋2 香炉1	12
	褐釉				壺4	壺1(5)		壺2(22)			7
国産陶磁器	瀬戸	皿1	折縁皿1	壺1	壺5 瓶子1 碗3 皿1	壺1　卸皿1	壺1				16
	常滑	甕2　壺2	甕26　壺1	甕26 磨耗陶片1	甕12 壺8 磨耗陶片1	甕12 壺14 磨耗陶片1	甕18　壺6	甕33　壺6	甕9　壺4	甕7　壺9	199
	常滑　片口鉢			Ⅰ類2　Ⅱ類1	Ⅰ類5　Ⅱ類4	Ⅱ類5	Ⅰ類2	Ⅰ類3　Ⅱ類5	Ⅰ類3	Ⅰ類1	31
	魚住		鉢1								1
	山茶碗				東濃碗2			東遠皿1			3
土製品	瓦							平1			1
	瓦器					皿1					1
	火鉢	瓦質1	瓦質1	土器質2	瓦質3 土器質2	瓦質6	瓦質1	瓦質4	瓦質1	瓦質1 土器質1	23
	その他		不明土器2								2
石製品	硯	1									1
	砥石			中砥2							2
	滑石製品		鍋1					鍋1	鍋1		3
	火打石	1					1				2
	その他	1		泥岩製円板1				緑泥片岩1			3
金属製品	釘	8	6	3	14	3	7	12	3	2	58
	銭					1		1			2
	鉄滓			1	2		3				6
	不明鉄製品	1				2					3
自然遺物	骨		1		2	1		1			5
古代遺物								須恵器1			1
合計		80	128	226	479	295	455	417	281	203	2564

▲1．1面全景（南から）

▲2．1面全景（北から）

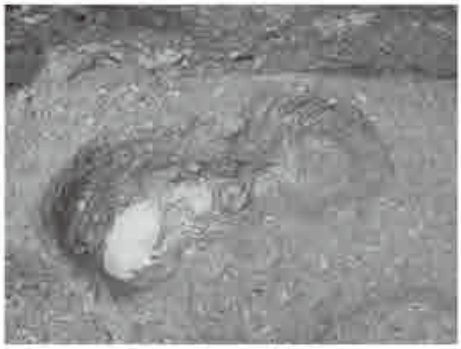
▲3．1面土坑1（南から）

▲4．1面上東播系捏鉢出土状況（南から）

図版２

▲１．２面土坑１（南から）

▲２．２面全景（北から）



▲４．２面P5・10・４（南から）

▲５．２面P8・７・９（南から）

▲６．２面P2・12（南から）

▼３．２面柱穴列（南から）

▲１．３面全景（南から）

▲２．３面全景（北から）

▲３．３面土坑４内出土かわらけ（東から）

▼４．３面土坑６内出土常滑甕（南から）

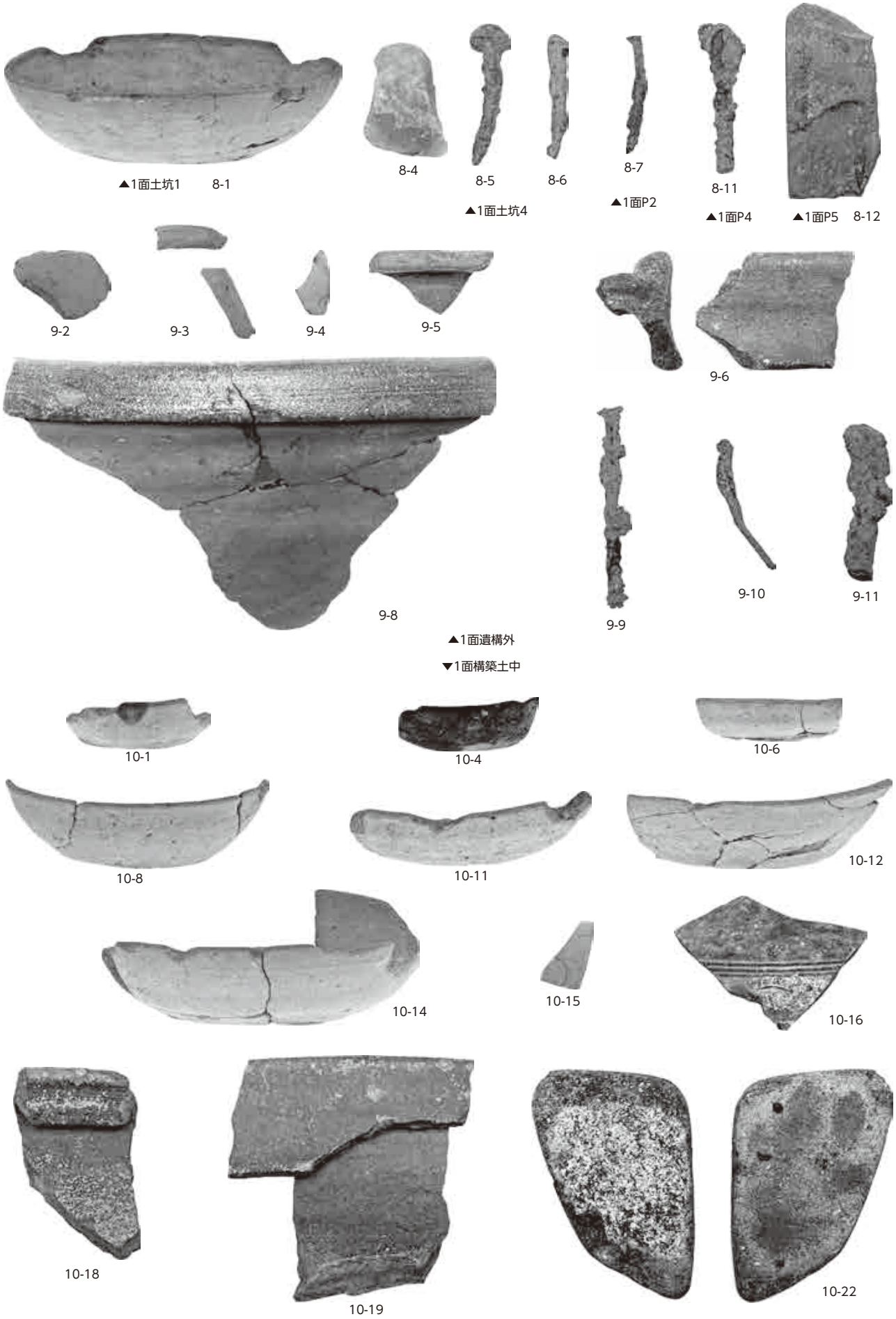
図版４

▲１．４面全景（南から）

▲２．４面P1・８（南から）

◀３．調査区東壁土層堆積状況（北西から）

▶４．調査区北壁土層堆積状況（南から）


▲1面土坑1 8-1
8-4
8-5
8-6
▲1面土坑4
8-7
▲1面P2
8-11
▲1面P4
▲1面P5 8-12
9-2
9-3
9-4
9-5
9-6
9-8
▲1面遺構外
▼1面構築土中
9-9
9-10
9-11
10-1
10-4
10-6
10-8
10-11
10-12
10-14
10-15
10-16
10-18
10-19
10-22

出土遺物（1）

図版6

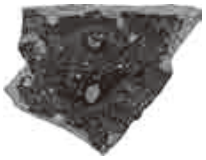
10-23

10-24

10-26

14-4

14-5


14-6

14-7

▲2面土坑1

10-25

▲2面構築土中

14-8

14-11

14-13

14-17

▲2面土坑2

14-20

14-21

▲2面土坑3

▼2面土坑6

14-22

14-24

14-25

14-26

▲2面土坑4

14-32

14-33

14-34

▲2面土坑5　14-29

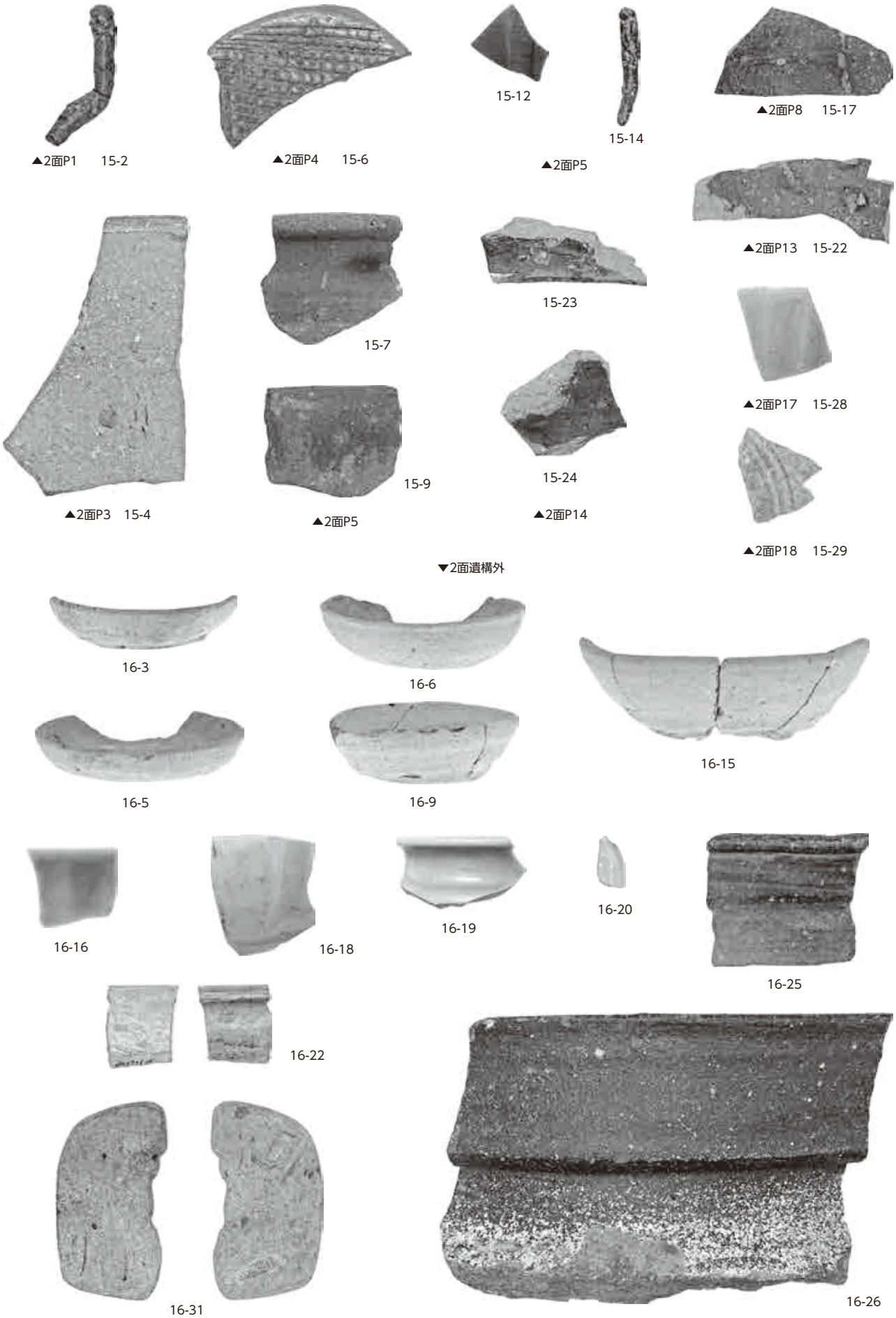
14-36

▼2面土坑8

14-37
▲2面土坑6

14-38

出土遺物（2）


▲2面P1　15-2
▲2面P4　15-6
15-12
15-14
▲2面P5
▲2面P8　15-17
▲2面P13　15-22
15-23
15-7
▲2面P17　15-28
15-24
15-9
▲2面P3　15-4
▲2面P5
▲2面P14
▲2面P18　15-29
▼2面遺構外
16-3
16-6
16-15
16-5
16-9
16-16
16-18
16-19
16-20
16-25
16-22
16-31
16-26

出土遺物（3）

図版8

16-32

16-34

20-1

20-3

20-6

16-33

16-36

▲2面遺構外

20-7

20-8

▲2面土坑1

20-13

20-14

▲3面土坑4

20-16

20-17

▲3面土坑6

20-19

20-27

▲3面土坑8

▲3面P11　20-39

▲3面P15　20-41

▲3面P20　20-43

▼3面遺構外

21-2

21-3

21-6

21-10

21-13

21-14

出土遺物（4）

21-15

21-19

21-21

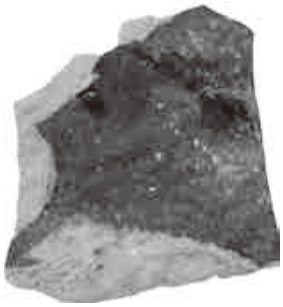
21-22

21-18

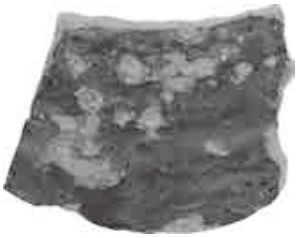
21-20

21-24

21-25


21-26

21-27


21-28

21-30

21-29

21-31

21-32

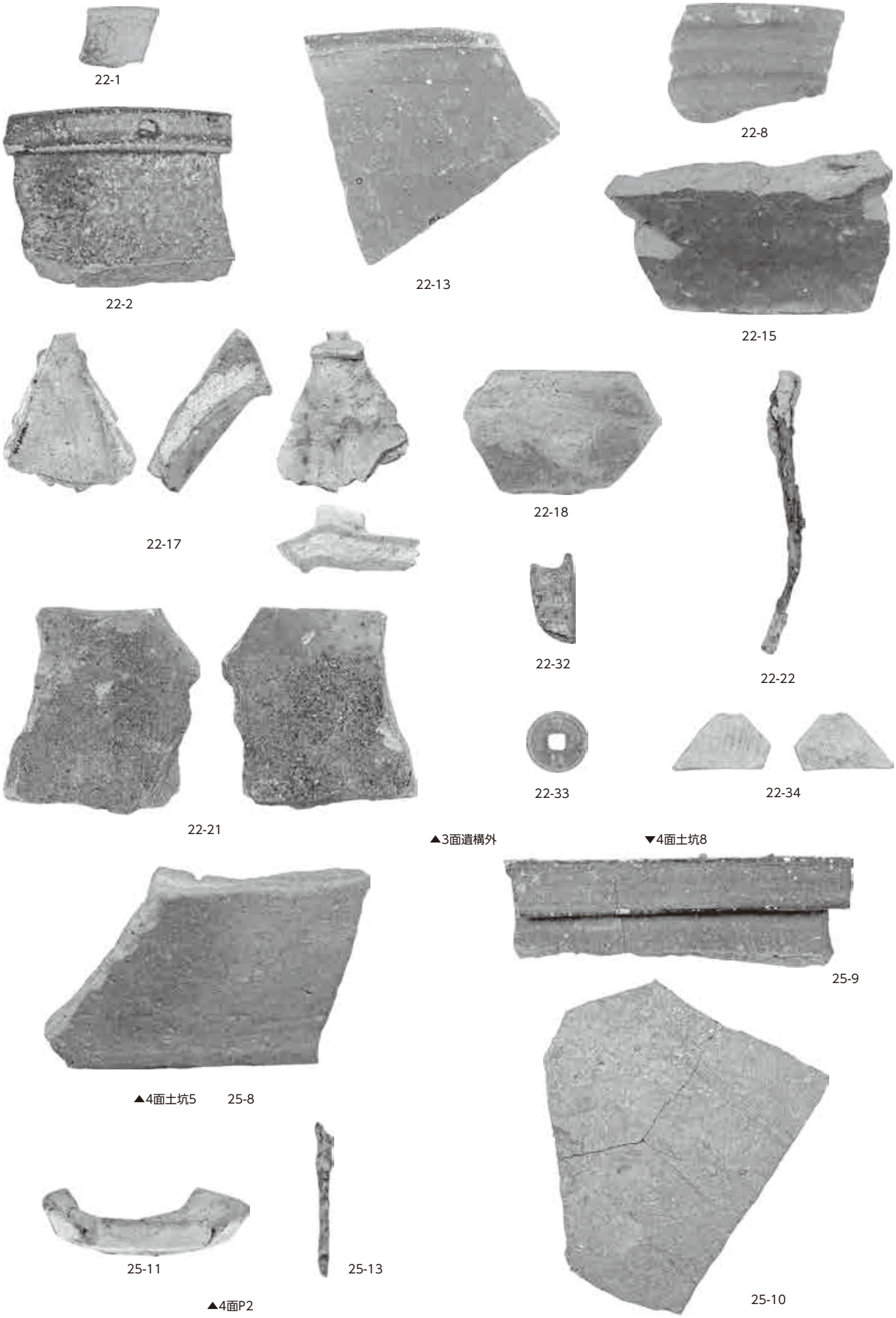
21-33

21-34

▲3面遺構外

出土遺物（5）

図版10


22-1
22-2
22-13
22-8
22-15
22-17
22-18
22-32
22-22
22-33
22-34
22-21
▲3面遺構外
▼4面土坑8
25-9
▲4面土坑5
25-8
25-11
25-13
▲4面P2
25-10

出土遺物（6）

25-15

25-16

▲4面P7

25-20

25-21

▲4面P12

26-2

26-4

26-9

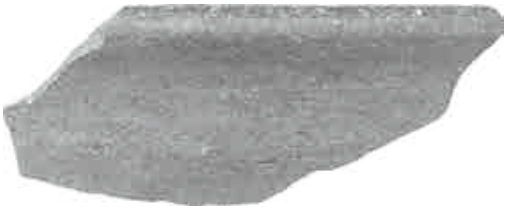
26-8

26-10

26-11

26-12

26-13



26-14

26-15

▲4面遺構外

出土遺物（7）

田楽辻子周辺遺跡（No.33）

浄明寺一丁目 556 番 6 外

例　　言

1．本報告は、鎌倉市浄明寺一丁目556番6外地点における個人専用住宅の建設に伴い実施した、田楽辻子周辺遺跡（神奈川県遺跡台帳－鎌倉市No.33）の緊急調査報告である。

2．発掘調査は、平成21年4月22日から同年5月19日にかけて、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は、39㎡である。

3．発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査担当者　　押木弘己
調　査　員　　伊藤博邦（現地）、岡田慶子、須佐仁和（資料整理）
作　業　員　　天野隆男、秋田公佑、伴　一明、丹野正弘
（社団法人　鎌倉市シルバー人材センター）

4．本報告の執筆・編集は、押木が行った。

5．本報告で使用した写真は、現地写真を押木が、出土遺物を須佐が撮影した。

6．現地調査および資料整理に当たっては多くの方々からご教示を賜った。記して感謝する（順不同、敬称略）。

田尾誠敏（東海大学）、中三川昇（横須賀市教育委員会）、河合英夫（玉川文化財研究所）、馬淵和雄、原廣志、山口正紀（鎌倉市教育委員会）、齋木秀雄、熊谷満（鎌倉遺跡調査会）、相模の古代を考える会

7．本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「ＤＺ０９０４」とし、出土品への注記その他に使用した。

目　次

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 328
1．遺跡の位置
2．周辺の歴史的環境
第二章　調査の方法と経過 …… 339
第三章　基本土層 …… 340
第四章　発見された遺構と遺物 …… 341
1．中世
2．古墳時代後期～平安時代
3．弥生時代後期～古墳時代前期
第五章　調査成果のまとめ …… 349
1．中世
2．中世以前

挿　図　目　次

図1　調査地の位置 …… 329
図2　調査区配置図 …… 339
図3　堆積土層模式図 …… 340
図4　検出遺構全体図 …… 342
図5　堆積土層図 …… 343
図6　出土遺物 …… 346

表　目　次

表1　出土遺物カウント表 …… 347
表2　出土遺物観察表 …… 348

図　版　目　次

図版1 …… 351
1．2面（52・54層）　検出状況（南から）
2．2面下遺物出土状況（北から）
3．2面下土層断面（南東から）
4．2面下土層断面（北から）
5．54層遺物出土状況（北から）
6．54層遺物出土状況（北東から）
7．54層遺物出土状況（北から）
図版2 …… 352
1．54層中貝殻片？混入状況（北東から）
2．2面下遺物出土状況（図6－22）
3．3面流路プラン検出状況（北西から）
4．3面トレンチ流木検出状況（南東から）
5．3面トレンチ流路北側　土層断面(西から)
6．3面流木検出状況（北西から）
7．3面流木検出状況（南東から）
8．3面流木検出状況（北西から）
図版3　出土遺物（1） …… 353
図版4　出土遺物（2） …… 354

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

鎌倉の市街地を貫いて相模湾に注ぐ滑川の本流は、朝比奈峠の麓に発して蛇行しつつ西流し、岐れ道交差点の近くで南西へと流れを変える。田楽辻子周辺遺跡（鎌倉市No.33）は、岐れ道の東、滑川左岸の丘陵裾部に東西750ｍ、南北250ｍの指定範囲をもち、本地点はこの西端近くに所在する。JR鎌倉駅からは、北東約1.2kmに位置している。

鎌倉の平野地形は、相模湾からの砂州・砂丘堆積と、滑川を本流とする小河川群の沖積作用によって形成されたもので、この周囲を取り巻く丘陵部には大小の谷戸が樹枝状に展開している。遺跡地南側の丘陵部にも、西から大御堂ヶ谷・釈迦堂ヶ谷・犬懸ヶ谷・宅間ヶ谷といった谷戸が並び、後節で述べるように鎌倉～室町時代における歴史舞台のひとつとして史料上に幾度か登場する。本地点は大御堂ヶ谷の開口部東側にあたり、谷筋を流下してきた大御堂川は、北西50ｍの地点で滑川に合流する。現況では、南側の丘陵を除く三方が河川に囲まれた立地環境にある。現地表面の標高は、約10.6ｍを測る。

２．周辺の歴史的環境

遺跡名の「田楽辻子」は、『吾妻鏡』に二ヶ所の記載がある。嘉禄三年（1227）正月二日条と正嘉元年（1257）十一月廿二日条で、ともに火災記事である。前者には「田楽辻子の東西一町余焼亡」とあり、田楽辻子が東西方向に延びる小道であったとも読み取れる。後者は若宮大路沿いに類焼してきた大火が田楽辻子に至って鎮火したことを記し、田楽辻子が若宮大路に接する小道であったことを示している。

下って『相良家文書』正応三年（1290）五月八日の相良頼俊譲状には、「鎌倉の釈迦堂の前地の事」として、その四至を注して「東限てんかくか地、北限やのとの々地、西限ミそ、南限太郎殿地」と記されており、民間芸能である田楽を生業とする者が釈迦堂前の東側に居住し、そのことが「田楽辻子」の名称の由来となったと考証されている（高柳1959）。現在、滑川の左岸を大御堂橋から宅間ヶ谷まで結ぶ東西道路が「田楽辻子（のみち）」と称されている。前掲の史料をもとに、鎌倉時代には筋替橋辺りまで延びることが指摘されているが、大よその範囲としては現行の「田楽辻子」と一致するものと理解されている。

周辺の調査成果（図１）

本遺跡地での発掘調査は、本地点も含めて８地点で実施されている（平成23年４月現在）。図１には各地点の位置を示し、調査の実施順に番号を付した。**地点１・３**は現在の「田楽辻子」の南側に接し、ともに現行道路と並行・重複する15世紀代の道路遺構が発見されている。**地点１**の道路遺構は６回の改修が施され、開始期時は13世紀中頃まで遡ることが指摘されている。道筋・規模の変動は経つつも、「田楽辻子」の前身といえる東西道路が鎌倉時代に存在していたことが明らかとなった。文治元年（1185）、源頼朝が父義朝の廟所として建立した勝長寿院（大御堂）や、北条義時の追善供養を目的に建てられた釈迦堂など、鎌倉時代前半の寺院を擁した谷戸が当地区に並ぶことを傍証とすれば、これらを結節する交通路が早くから整備されたことは十分に考えられる。

丘陵裾に接した**地点５**では鎌倉前期から南北朝期にかかる９枚の遺構面が検出され、13世紀代後半に比定される第４面では、外周に雨落ち溝状の方形区画を伴い、さらにその周囲に白色砂を敷いた礎石建物跡が確認されている。東西２間以上×南北１間以上で、柱間距離は210㎝と規格的である。堅固で丁寧な整地状況と併せ、武家屋敷に関連する可能性も考えられている。**地点６**では鎌倉前期から室町期15世紀前半に及ぶ遺構面６枚が検出され、13世紀代の遺構面では一定量の瓦が出土している。西隣の大御堂ヶ谷に所在した勝長寿院との関連も想定でき、興味深い。同地点では、中世層下の黒褐色粘土層から少量の土器片が出土し、弥生時代末～古墳時代前期の所産と考えられている（註1）。**本地点（地点７）**の南隣接

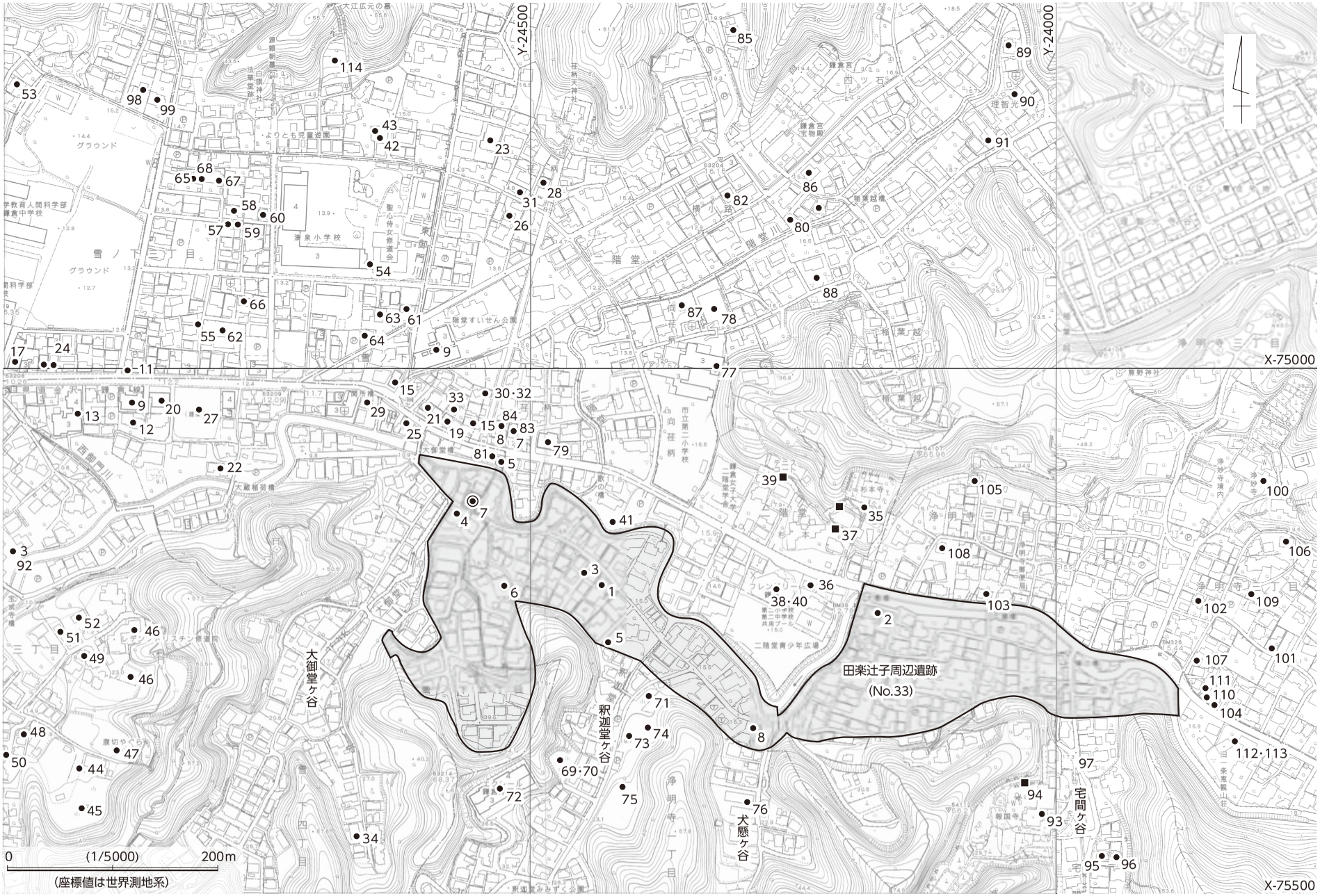

Y-24500
Y-24000
X-75000
X-75500
田楽辻子周辺遺跡
(No.33)
大御堂ヶ谷
釈迦堂ヶ谷
犬懸ヶ谷
宅間ヶ谷
二階堂
雪ノ下
0
(1/5000)
200m
(座標値は世界測地系)

図１　調査地の位置

地（**地点4**）では、中世の遺構面は削平のため失われていたものの、中世層下で黒褐色粘質土が検出され、同層上で奈良～平安時代の土師器・須恵器片が出土している。後述するように、僅か十数m離れただけの本地点においては中世地山と称される粘質土層は確認されていないことから、「田楽辻子」を挟んだ南北で、旧地形の在り方は大きく異なっていたことになる。

滑川右岸の県道金沢・鎌倉線周辺では調査の事例・対象面積ともに左岸域より多く、12世紀後葉の幕府開創期まで遡る遺構を発見する例も珍しくない。大倉幕府周辺遺跡群の**地点16·20**における大型掘立柱建物跡や、**地点16・20・27**での木組み護岸を伴わない断面V字形または逆台形の堀跡などは、この時期における代表的な遺構の検出例といえる。また、杉本寺周辺遺跡の**地点40**でも12世紀後葉の居館跡と考えられる多くの柱穴群（掘立柱建物跡）や堀跡が発見され、遺跡周辺の歴史的事象から平安末期に県道（中世の六浦道）の前身ともいえる東西道を介して勢力を伸長させた三浦氏一族の杉本氏、またはそれに続く和田氏の拠点的施設として評価されている（馬淵1994・2000ほか）。

治承四年（1180）、頼朝の「大倉御所」造営および小林郷北山への鶴岡八幡宮遷座を契機に、当地区の周辺には有力武士が宿館を構えたとされ、嘉禄元年（1225）の宇津ノ宮辻子への将軍御所移転まで、東西道路の周辺地区が武家政権の中枢機能を担っていた。その前段として、平安末期に相模の有力在庁となった三浦氏による開発が進んでいた、という理解となろうか。のち、仁治二年（1241）には朝夷奈切り通しと併せて六浦道の整備がなされ、鎌倉と外港・六浦とを結ぶ経済上の要路として東西道は機能し続けた。鎌倉での商業活動を7ヶ所に限定・許可した幕府の法令では、建長三年（1251）に「大倉辻」（現在の関所橋付近）を、文永二年（1265）には「大倉辻」と「須地賀江橋」（筋替橋）を挙げており、六浦道周辺の賑わいを窺わせてくれる。**地点20・27**で鎌倉～室町期の六浦道側溝と見られる東西溝が、**地点13**北側の立ち会い調査では路盤と思しき泥岩整地面が確認されている。

宇津ノ宮辻子、そして嘉禎二年（1236）年の若宮大路東側への相次ぐ将軍御所の移転によって、幕府政治の中枢機能は若宮大路の北東側一画に移ることとなった。これとともに都市鎌倉も若宮大路を中心に展開することとなった。大路の主軸線に沿う一貫した町割が敷衍したものではないが、この時期以降、都市としての鎌倉の形成は広がり・密度ともに急速に進んでいくことになる。しかし、こうした動きも元弘三年（1333）の幕府滅亡を区切りとして、ひとたび終息を迎えることになる。

幕府滅亡後の鎌倉は、規模や密度を減じながらも、なお都市としての体裁を保ち続けた。正平四年（1349）には室町政権下で関東の政務を担当した鎌倉府が設置され、その首長である鎌倉公方の御所は浄妙寺の東側に置かれた。再び、鎌倉の中枢機能が東西道路（六浦道）沿いに復したことになる。滑川の対岸には関東管領・上杉氏四家のうち犬懸と宅間の二家が各々の名をもつ谷戸に居を構えたとされ、鎌倉府の中核を担う有力氏族の居館や、その信仰を支えた寺院が一帯に点在したものと考えられる。

犬懸ヶ谷では上杉氏憲邸跡の**地点76**で発掘調査が実施され、15世紀初頭に時期比定できる炭化層が検出されている。報告書では応永二十三年（1416）に起きた「上杉禅秀（氏憲）の乱」との関連を想定しており、史料上に見える歴史的事象と対比可能な調査事例として注目される。犬懸ヶ谷では開口部に当たる田楽辻子周辺遺跡の**地点8**でも発掘調査が実施され、やはり15世紀代の遺物が一定量出土している（註2）。前掲の**地点1・3**などの成果と併せ、15世紀代の当地域では史料を追認するかのような、なお活発な人的営為を読み取ることができる。

その後、永享十一年（1439）の「永享の乱」や享徳三年（1454）の「享徳の乱」といった室町将軍家、または鎌倉府内部での度重なる権力抗争を経て、康正元年（1455）に鎌倉公方・足利成氏が下総国古河に逃れ（古河公方）、代わって室町将軍義政の弟である政知が新たな公方として関東に発遣されるも、鎌倉入りを果たせず伊豆国韮山の堀越に留まった（堀越公方）。ここに鎌倉府は事実上の終焉を迎える。これを境に、鎌倉も都市としての様相を急速に失うことになり、発掘調査によっても15世紀中頃以降、戦国～

安土桃山時代に帰属する遺構・遺物の検出例は極めて限定的となる。この間、関東一円に勢力を伸張する後北条氏は鎌倉を直轄領とし、現地に代官を置いて治めた。天文二～九年（1533 ～ 1540）には二代氏綱によって大永六年（1526）の戦乱で焼失した鶴岡八幡宮の再建が行われ、同十七年（1548）には三代氏康が荏柄社の再興のため、この参道口に関所を置いて六浦道を通行する商人などから関銭を徴収した。現在の関所橋付近に当たり、この西に隣接する**地点15**では近世初頭の遺物を伴う礎石建物が発見されている。報告書では、建物の構造や規模から公的性格を持つ建物と考え、伴出遺物には廃絶後の混入品という理解を前提とした上で、記録との符号点を重視して同跡を関取場建物の一部であろうと結論付けている。**地点19**では16世紀代以降の瓦燈などが出土し、関取場との関連が示唆されている。

なお、鶴鶴岡八幡宮は武家の守護神として後北条氏以外の戦国武将からも崇敬を集めた。永禄四年（1561）、のちに上杉謙信を名乗る長尾景虎が同宮にて関東管領職の拝賀式を行ったことは有名である。天正十八年（1590）に後北条氏を降し関東を制圧した豊臣秀吉も、この翌年、徳川家康に鶴岡八幡宮の修理を命じている。境内の発掘調査では、この際の修営計画図と合致する廻廊遺構が検出されている。

中世以前の調査成果

前項でも若干触れたが、本地点周辺における中世以前の発掘調査成果について整理しておきたい。

鎌倉旧市街域の北部では、中世地山と呼ばれる黒褐色粘質土層から弥生時代～奈良・平安時代の遺構・遺物が発見されることが間々ある。本地点周辺の大倉地区でもこうした時代の確認例は多く、大倉幕府周辺遺跡群（No.49）の**地点20・27**などでは弥生時代中期後葉～後期の竪穴住居跡が重複して発見され、滑川河岸段丘上の一帯に同時期の集落居住域が一定の広がりをもって形成されていたことが明らかとなっている。**地点27**では古墳時代前期の方形周溝墓も発見され、当地区が場の性格を変えながらも人々の活動空間として継承されていたことを示している。

地点15では中世以前の流路跡が発見されている。南北方向に延び、幅6ｍ以上と大規模な遺構であり、覆土中からは古墳時代後期の土師器・須恵器に加え、木製品も僅かながら出土している。これと交差・重複する規模の小さい溝状遺構も検出されており、覆土中より縄文時代～古墳時代後期の土器片が出土している。

奈良・平安時代では横小路周辺遺跡群の**地点78**で7軒の竪穴住居跡が重複して発見され、大倉幕府周辺遺跡群の**地点9**でも詳細は未報告ながら古墳後期～当時代に属する遺構の展開が確認されている（註3）。**地点25**では、中世以前の河川跡が二時期に亘って検出され、報告書では後発の遺構を古代～平安時代末の可能性があるものとしている。**地点83**では、ロクロ成形の土師器坏や「三浦型甕」とも称される土師器の短頸甕が出土し、平安時代の9世紀後半～ 10世紀代にかかる資料として注目される。面的に住居跡の展開を捉えられた調査事例が僅かであるため、当地域における古代の集落規模や展開・変遷については不明と述べざるを得ない。ただ、狭小な面積の調査でも遺物の出土が見られることから、二階堂川や東御門川沿いの微高地上に奈良・平安時代（或いはそれ以前から）の集落が一定の広がりをもっていたことは推測できる。

この一帯は、天平七年（735）の『相模國封戸租交易帳』に載る「鎌倉郡荏草郷」に比定され、荏柄天神社にその名残が認められる。同社は長治元年（1104）に開かれたことが社伝に見えるが、それ以前における周辺での集落形成が社会的基盤にあったと考えるのが妥当であろう。今後、荏草郷の具体的な姿を紡ぎ出してくれる発掘成果の蓄積は無論のこと、「古代鎌倉郡」から「中世都市鎌倉」への変遷がいかにして進んだのか、より深みのある歴史叙述がなされることを期待している。

註

註１　2008年度調査。現地にて筆者実見、調査者の齋木秀雄氏・熊谷満氏からご教示を頂いた。

註２　2010年度、鎌倉市教育委員会が調査。調査担当者の山口正紀氏のご教示による。

註３　調査担当者の馬淵和雄氏のご教示による。第五章でも述べているように、住居跡の主たる時期は古墳時代後期に置かれるようである。国庫補助分の調査報告書には、原始・古代遺構全図が付されている。

参考文献（第五章分も含む）

菊川英政　1995 「天神山採集の古墳時代後期土器」『鎌倉考古　No.33』 鎌倉考古学研究所

田尾誠敏　2009 「令制国の成立と土器の流通―相模国と隣接地域の諸相（予察）―」『古代地方行政単位の成立と在地社会』独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所

鶴間正昭　2009 「南武蔵・相模の土器様相と地域間交流」『古代社会と地域間交流―土師器からみた関東と東北の諸相―』国士舘大学考古学会編　六一書房

中三川昇　2009「奈良・平安時代の搬入品―三浦半島出土土器の生産地と搬入経路」『シンポジウム　搬入品と三浦半島発表要旨』 横須賀考古学会

馬淵和雄　1994 「武士の都　鎌倉―その成立と構想をめぐって―」『中世の風景を読む　2　都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社

馬淵和雄ほか　2002 『杉本寺周辺遺跡　二階堂字杉本912番１ほか地点発掘調査報告書』 杉本寺周辺遺跡発掘調査団編　鎌倉市教育委員会

調査地点・引用文献（図１掲載分）

田楽辻子周辺遺跡（No.33）

1. 浄明寺字釈迦堂658番 『釈迦堂田楽辻子遺跡　浄明寺釈迦堂658番地点』 1990年　釈迦堂田楽辻子遺跡発掘調査団
2. 浄明寺字宅間562番33 「5.田楽辻子周辺遺跡（No.33）　浄明寺字宅間562番33」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８　平成３年度発掘調査報告』 1992年　鎌倉市教育委員会
3. 浄明寺一丁目661番１ 「田楽辻子周辺遺跡（No.33）　鎌倉市浄明寺一丁目661番外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16　平成11年度発掘調査報告（第１分冊）』 2000年　鎌倉市教育委員会
4. 雪ノ下五丁目555番１ 「田楽辻子周辺遺跡（No.33）　雪ノ下五丁目555番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22　平成17年度発掘調査報告（第１分冊）』 2006年　鎌倉市教育委員会
5. 浄妙寺一丁目652番８　2008年度調査、未報告　発表会
6. 浄明寺一丁目676番１　2008年度調査、未報告
7. **浄明寺一丁目556番６外　本報告**
8. 浄明寺一丁目691番４　2010年度調査、未報告

大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

9. 雪ノ下四丁目620番１ 『新発見の鎌倉遺跡と遺物展・図録　掘り出された鎌倉』 1981年　江ノ電沿線新聞社・鎌倉考古学　研究所
10. 雪ノ下四丁目600番　手塚直樹「筋替橋南の試掘調査」『鎌倉考古４』 1980年　鎌倉考古学研究所
11. 雪ノ下四丁目581番２　未報告
12. 雪ノ下四丁目620番２ 『武士の都 鎌倉　よみがえる中世【3】』 1989年　平凡社
13. 雪ノ下四丁目610番２　未報告

14. 雪ノ下四丁目569番1 『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下字大倉耕地569番1地点発掘調査報告書』 1990年　大倉幕府周辺　　遺跡群発掘調査団
15. 雪ノ下四丁目565番4 「4．大倉幕府周辺遺跡（No.49）　雪ノ下大倉耕地565番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報　　告書7　平成2年度発掘調査報告』 1991年　鎌倉市教育委員会
16. 二階堂字荏柄38番1 「2．大倉幕府周辺遺跡群　二階堂字荏柄38番1（No.49）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9　平成4年度発掘調査報告（第2分冊）』 1993年　鎌倉市教育委員会
17. 雪ノ下三丁目606番1 「7．大倉幕府周辺遺跡群（No.49）　雪ノ下三丁目606番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9　平成4年度発掘調査報告（第3分冊）』 1993年　鎌倉市教育委員会
18. 雪ノ下三丁目607番 「3．大倉幕府周辺遺跡群（No.49）　雪ノ下三丁目607番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10　平成5年度発掘調査報告（第1分冊）』 1994年　鎌倉市教育委員会
19. 雪ノ下字天神前562番29 「大倉幕府周辺遺跡群（No.49）　雪ノ下字天神前562番29地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12　平成7年度発掘調査報告（第1分冊）』 1996年　鎌倉市教育委員会
20. 雪ノ下四丁目620番5 「大倉幕府周辺遺跡群（No.49）　雪ノ下四丁目620番5地点」 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14　平成9年度発掘調査報告（第2分冊）』 1998年　鎌倉市教育委員会
21. 雪ノ下字大倉耕地562番16 「大倉幕府周辺遺跡群（No.49）　雪ノ下字大倉耕地562番16」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第2分冊）』 2001年　鎌倉市教育委員会
22. 雪ノ下四丁目580番10 「大倉幕府周辺遺跡群（No.49）　雪ノ下四丁目580番10外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第2分冊）』 2001年　鎌倉市教育委員会
23. 二階堂字荏柄58番4外 「大倉幕府周辺遺跡群（No.49）　二階堂荏柄58番4外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第1分冊）』 2002年　鎌倉市教育委員会
24. 雪ノ下三丁目607番1 「大倉幕府周辺遺跡群（No.49）　雪ノ下三丁目607番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20　平成15年度発掘調査報告（第2分冊）』 2004年　鎌倉市教育委員会
25. 雪ノ下四丁目567番7 「大倉幕府周辺遺跡群（No.49）　雪ノ下四丁目567番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20　平成15年度発掘調査報告（第2分冊）』 2004年　鎌倉市教育委員会
26. 二階堂字荏柄27番3の一部 「大倉幕府周辺遺跡群（No.49）　二階堂字荏柄27番3の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22　平成17年度発掘調査報告（第1分冊）』 2006年　鎌倉市教育委員会
27. 雪ノ下四丁目581番5 『大倉幕府周辺遺跡発掘調査報告書―雪ノ下四丁目581番5地点―』 2007年　有限会社 鎌倉遺跡調査会
28. 二階堂字荏柄76番7外 「鎌倉市№94」『神奈川県埋蔵文化財調査報告51』 2007年　神奈川県教育委員会
29. 雪ノ下四丁目570番　未報告
30. 二階堂字荏柄3番6外　未報告
31. 二階堂字荏柄76番4 「鎌倉市№91」『神奈川県埋蔵文化財調査報告51』 2007年　神奈川県教育委員会
32. 二階堂字荏柄3番6外　未報告
33. 雪ノ下字天神前562番30　未報告

勝長寿院跡（No.133）

34. 雪ノ下四丁目520番6外　未報告

杉本寺周辺遺跡（No.158）

35. 二階堂字杉本903番 「18.杉本寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』 1983年　鎌倉市教育委員会
36. 二階堂字杉本912番 （一部報告）
37. 二階堂字杉本903番 『杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書』・『報国寺境内やぐら 杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書 昭和62年度鎌倉市浄明寺地区内急傾斜地崩壊対策地業に伴う調査』 1988年　杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘

調査団
38. 二階堂字杉本912番1 『杉本寺周辺遺跡　二階堂字杉本912番1ほか地点発掘調査報告』 2002年　鎌倉市教育委員会
39. 二階堂字杉本 『平成6年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』・「杉本寺周辺遺跡内やぐら」『東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集　中世石窟遺構の調査 ―鎌倉所在の『やぐら』群―』 1996年　杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団・東国歴史考古学研究所
40. 二階堂字杉本912番1 『杉本寺周辺遺跡　二階堂字杉本912番1ほか地点発掘調査報告』 2002年　鎌倉市教育委員会
41. 二階堂字杉本932番1外 『杉本寺周辺遺跡発掘調査報告書（鎌倉市二階堂932番1他8筆地点）』 2007年　株式会社博通

大倉幕府北遺跡（No.193）
42. 西御門二丁目756番10 「大倉幕府北遺跡（No.193）　西御門二丁目756番10地点　西御門二丁目756番6地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25　平成20年度発掘調査報告（第1分冊）』 鎌倉市教育委員会
43. 西御門二丁目756番6 「大倉幕府北遺跡（No.193）　西御門二丁目756番10地点　西御門二丁目756番6地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25　平成20年度発掘調査報告（第1分冊）』 鎌倉市教育委員会

東勝寺跡（No.246）
44. 小町三丁目497番 「19.東勝寺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』 1983年　鎌倉市教育委員会
45. 小町三丁目497番 『東勝寺跡発掘調査報告書』 1977年　鎌倉市教育委員会
46. 小町三丁目506番 『東勝寺跡―第3・4次遺構確認調査報告書―』 1998年　鎌倉市教育委員会
47. 小町三丁目523番 『東勝寺跡―第3・4次遺構確認調査報告書―』 1998年　鎌倉市教育委員会
48. 小町三丁目468番2外 『東勝寺跡発掘調査報告書　鎌倉市小町3丁目468番2外』 2000年　東勝寺跡発掘調査団・宮田事務所
49. 小町三丁目523番14 「東勝寺跡（No.246）　小町三丁目523番14地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第2分冊）』 2001年　鎌倉市教育委員会
50. 小町三丁目468番10 「東勝寺跡（No.246）　小町三丁目468番10」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第1分冊）』 2002年　鎌倉市教育委員会
51. 小町三丁目538番8 「東勝寺跡（No.246）　小町三丁目538番8地点（Ⅰ地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27　平成22年度発掘調査報告（第1分冊）』 2011年　鎌倉市教育委員会
52. 小町三丁目538番3 「東勝寺跡（No.246）　小町三丁目538番3地点（Ⅱ地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27　平成22年度発掘調査報告（第1分冊）』 2011年　鎌倉市教育委員会

保寿院跡（No.250）
53. 西御門一丁目922番4 「保寿院跡（№250）西御門一丁目922番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23　平成18年度発掘調査報告（第2分冊）』 鎌倉市教育委員会

大倉幕府跡（No.253）
54. 雪ノ下三丁目707番1 「鎌倉市No.96　大倉幕府跡（No.253）」『神奈川県埋蔵文化財調査報告34』 1992年　神奈川県教育委員会
55. 雪ノ下三丁目651番8 「大倉幕府跡（No.253）（雪ノ下三丁目651番8外地点）」『　　鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15　平成10年度発掘調査報告（第2分冊）』 1999年　鎌倉市教育委員会
56. 雪ノ下三丁目618番4 「大倉幕府跡（No.253）　雪ノ下三丁目618番4地点」 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18

平成13年度発掘調査報告（第1分冊）』 2000年　鎌倉市教育委員会

57. 雪ノ下三丁目701番14 「大倉幕府跡（No.253） 雪ノ下三丁目701番14地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21平成16年度発掘調査報告（第1分冊）』 2005年　鎌倉市教育委員会

58. 雪ノ下三丁目701番3 「大倉幕府跡（No.253） 雪ノ下三丁目701番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21平成16年度発掘調査報告（第1分冊）』 2005年　鎌倉市教育委員会

59. 雪ノ下三丁目701番1 「大倉幕府跡（No.253） 雪ノ下三丁目701番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21平成16年度発掘調査報告（第1分冊）』 2005年　鎌倉市教育委員会

60. 雪ノ下三丁目704番3外 「大倉幕府跡（No.253） 雪ノ下三丁目704番3外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27　平成22年度発掘調査報告（第2分冊）』 2011年　鎌倉市教育委員会

61. 雪ノ下三丁目637番4 「大倉幕府跡（No.253） 雪ノ下三丁目637番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27平成22年度発掘調査報告（第2分冊）』 2011年　鎌倉市教育委員会

62. 雪ノ下三丁目629番1　未報告

63. 雪ノ下三丁目637番6外　未報告

64. 雪ノ下三丁目635番2外　未報告

65. 雪ノ下三丁目693番8　未報告

66. 雪ノ下三丁目648番3　未報告

67. 雪ノ下三丁目694番18　未報告

68. 雪ノ下三丁目693番1　未報告

釈迦堂遺跡（No.257）

69. 浄明寺字釈迦堂642番 「6.釈迦堂跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』 1983年　鎌倉市教育委員会

70. 浄明寺字釈迦堂642番「10.釈迦堂跡」『 鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』 1983年　鎌倉市教育委員会

71. 浄明寺字釈迦堂597番1 「鎌倉市No.108　釈迦堂遺跡（No.257）」『神奈川県埋蔵文化財調査報告31』 1989　神奈川県教育委員会

72. 浄明寺621 『浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡』 1989年　浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団

73. 浄明寺一丁目598番21　未報告

74. 浄明寺一丁目598番35　未報告

75.浄明寺一丁目　2010年度調査

上杉氏憲邸跡（No.258）

76 . 浄明寺一丁目699番 「9. 上杉氏憲邸跡（No.258） 浄明寺一丁目699番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成6年度発掘調査報告（第2分冊）』 1995年　鎌倉市教育委員会

横小路周辺遺跡（No.259）

77. 二階堂字向荏柄880番 『向荏柄遺跡発掘調査報告書』 1985年　鎌倉市教育委員会

78. 二階堂字向荏柄874番 『向荏柄遺跡発掘調査報告書』 1985年　鎌倉市教育委員会

79. 二階堂字荏柄9番 「11.横小路周辺遺跡（No.259） 二階堂字荏柄9番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6　平成元年度発掘調査報告』 1990年　鎌倉市教育委員会

80. 二階堂字横小路110番3 『横小路周辺遺跡　二階堂字横小路110番3地点　―永福寺関連遺跡の調査―』 1996年　横小路周辺遺跡発掘調査団

81. 雪ノ下五丁目557番1 「横小路周辺遺跡（No.259） 雪ノ下五丁目557番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14　平成9年度発掘調査報告（第2分冊）』 1998年 鎌倉市教育委員会

82. 二階堂字横小路93番11 「横小路周辺遺跡　二階堂字横小路93番11地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15

平成10年度発掘調査報告（第2分冊）』 1999年　鎌倉市教育委員会
83. 二階堂字荏柄10番6 「横小路周辺遺跡（No.259） 鎌倉市二階堂字荏柄10番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16　平成11年度発掘調査報告（第2分冊）』 2000年　鎌倉市教育委員会
84. 二階堂字荏柄10番1 「横小路周辺遺跡（No.259） 二階堂字荏柄10番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19　平成14年度発掘調査報告』 2003年　鎌倉市教育委員会
85. 二階堂字会下323外 「横小路周辺遺跡（No.259） 二階堂字会下323番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20　平成15年度発掘調査報告（第2分冊）』 2004年　鎌倉市教育委員会
86. 二階堂字四ツ石115番3の一部 「横小路周辺遺跡（№259）二階堂字四ツ石115番3の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23　平成18年度発掘調査報告（第2分冊）』 2007年　鎌倉市教育委員会
87. 二階堂字向荏柄875番4　未報告
88. 二階堂字稲葉越856番5　未報告

理智光寺跡（No.265）

89. 二階堂字理智光寺谷749番1 「14.理智光寺橋遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』 1983年　鎌倉市教育委員会
90. 二階堂字稲葉越802番7,8 「理智光寺跡（No.265） 二階堂字稲葉越802番7地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7　平成2年度発掘調査報告』 1991年　鎌倉市教育委員会
91. 二階堂字理智光寺谷750番1 「理智光寺跡（No.265）二階堂字理智光寺750番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第1分冊）』 2001年　鎌倉市教育委員会

北条高時邸跡（No.281）

92. 小町三丁目451番1 『北条高時邸跡― 小町三丁目451番1地点 ―』 2004年　株式会社　斉藤建設（文化財事業部）

報国寺遺跡（No.306）

93. 浄明寺字宅間533番 「26.報国寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』 1983年　鎌倉市教育委員会
94. 浄明寺字宅間533番 『報国寺境内やぐら 杉本寺周辺遺跡内やぐら 発掘調査報告書　昭和62年度鎌倉市浄明寺地区内急傾斜地崩壊対策地業に伴う調査』 1988年　報国寺境内やぐら発掘調査団
95. 浄明寺二丁目474番11外 「報国寺遺跡（№306） 浄明寺二丁目474番11外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23　平成18年度発掘調査報告（第1分冊）』 2007年　鎌倉市教育委員会
96. 浄明寺二丁目474番12 「報国寺遺跡（№306） 浄明寺二丁目474番12地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23　平成18年度発掘調査報告（第1分冊）』 2007年　鎌倉市教育委員会
97. 浄明寺二丁目宅間533番 「鎌倉市No.47」『神奈川県埋蔵文化財調査報告49』 2006年　神奈川県教育委員会

西御門遺跡（No.325）

98. 西御門一丁目11番4　2006年度調査　未報告
99. 西御門一丁目681番1　2006年度調査　未報告

浄妙寺旧境内遺跡（No.408）

100. 浄明寺字向小路78番 「31.浄妙寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』 1983年　鎌倉市教育委員会
101. 浄明寺字稲荷小路129番2 「1. 浄妙寺旧境内遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1　昭和59年度発掘調査報告』 1985年　鎌倉市教育委員会
102. 浄明寺字向小路90番1 「3. 浄妙寺旧境内遺跡（No.408） 鎌倉市浄明寺向小路90番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7　平成2年度発掘調査報告』 1991年　鎌倉市教育委員会

103.浄明寺三丁目6番3 「浄妙寺旧境内遺跡（No.408） 浄明寺三丁目6番3外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告（第2分冊）』 1996年 鎌倉市教育委員会
104.浄明寺三丁目115番2 「浄妙寺旧境内遺跡（No.408） 浄明寺三丁目115番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告（第2分冊）』 1999年 鎌倉市教育委員会
105.浄明寺三丁目16番1 「浄妙寺旧境内遺跡（No.408） 浄明寺三丁目16番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告（第2分冊）』 2002年 鎌倉市教育委員会
106.浄明寺三丁目126番 「浄妙寺旧境内遺跡（No.408） 浄明寺三丁目123番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 平成16年度発掘調査報告（第2分冊）』 2005年 鎌倉市教育委員会
⑧ 浄明寺三丁目119番 『神奈川県埋蔵文化財調査報告46』 2004年 神奈川県教育委員会
107.浄明寺三丁目101番33 「浄妙寺旧境内遺跡（№408）浄明寺三丁目101番13地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告（第2分冊）』 2006年 鎌倉市教育委員会
108.浄明寺三丁目3番2 「浄妙寺旧境内遺跡（№408）浄明寺三丁目3番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23平成18年度発掘調査報告（第1分冊』 2007年 鎌倉市教育委員会
109.浄明寺三丁目122番1・2 「浄妙寺旧境内遺跡（No.408） 浄妙寺三丁目122番1・2」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27 平成22年度発掘調査報告（第1分冊）』 2011年 鎌倉市教育委員会
110.浄明寺三丁目948番8 「浄妙寺旧境内遺跡（№408）浄明寺三丁目948番8」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書26平成21年度発掘調査報告（第2分冊）』 2010年 鎌倉市教育委員会
111.浄明寺三丁目115番3 未報告

天皇館跡（No.409）

112. 浄明寺稲荷小路105 『新発見の鎌倉遺跡と遺物展・図録 掘り出された鎌倉』 1981年 江の電沿線新聞社・鎌倉考古学研究所
113. 浄明寺稲荷小路104番1 「鎌倉市No.73 天皇館跡(409)」『神奈川県埋蔵文化財調査報告28』 1986年 神奈川県教育委員会

北条義時法華堂跡（No.461）

114. 西御門二丁目686番外 『北条義時法華堂跡 確認調査報告書』 2005年 鎌倉市教育委員会

杉本寺やぐら群（No.90）

115. 二階堂字杉本930番外 『平成9年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』・「杉本寺やぐら群」『東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集 中世石窟遺構の調査III ―鎌倉・大和所在の『やぐら』群―』 1999年 杉本寺やぐら群発掘調査団・東国歴史考古学研究所

宅間ヶ谷西やぐら群（No.91）

39 浄明寺字宅間520 「5.宅間ヶ谷やぐら群 鎌倉市浄明寺520番」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』 1991年 宅間ヶ谷やぐら群発掘調査団

宅間谷東やぐら群（No.159）

127 浄明寺二丁目481番1 「鎌倉市No.60」『神奈川県埋蔵文化財調査報告47』 2005年 神奈川県教育委員会
132 浄明寺二丁目字宅間472,474-1 他 「鎌倉市No.83」『神奈川県埋蔵文化財調査報告49』 2006年 神奈川県教育委員会
138 浄明寺471、471-2、4、6 『鎌倉市№100』『神奈川県埋蔵文化財調査報告51』 2007年 神奈川県教育委員会

杉本寺城跡内やぐら（No.386）

37　二階堂字杉本851番　「4.杉本城跡内やぐら　鎌倉市二階堂851番」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』　1991年　杉本城跡内やぐら発掘調査団

41　二階堂字杉本851番　「鎌倉市No.123　杉本城内やぐら」『神奈川県埋蔵文化財調査報告33』　1991年　神奈川県教育委員会

宅間谷西第２やぐら群（No.450）

105 浄明寺二丁目519番4　『かながわ考古学財団調査報告 114　宅間谷西第２やぐら群　平成12年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事（浄明寺宅間Ｂ地区）に伴う発掘調査』　2001年　財団法人 かながわ考古学財団

112 浄明寺二丁目519番1　『かながわ考古学財団調査報告 137　宅間谷西第2やぐら群　平成13年度鎌倉市内急傾斜地（浄明寺宅間Ｂ地区）崩壊対策工事にともなう発掘調査』　2002年　財団法人 かながわ考古学財団

第二章　調査の方法と経過

本発掘調査は、個人住宅の建設（建て替え）に伴う事前の記録保存を目的として鎌倉市教育委員会が実施した。建設計画の照会を受け、市教委では平成21年1月28日に確認調査（試掘）を行った。建て替え前の既存建物があったことから、調査坑は建築予定範囲南外の庭地部分に設定した（図2）。調査の結果、地表下60㎝前後で中世遺構面の可能性を持つ粘質土層（1面）が検出された。また、地表下160㎝前後の中世基盤層下で古墳時代後期の土器を主体とする遺物包含層（2面）が検出された。以上の調査成果と工事計画とを照合した結果、工事の実施に先立っては本格的な発掘調査を行う必要があるとの判断に至った。

その後の調整を経て、発掘調査は平成21年4月22日に開始した。既存建物の解体後、調査予定範囲の大部分が地表下140㎝前後まで削平されてしまったため、中世遺構面の遺存範囲は、調査区南辺付近の僅かな部分に限られることとなった。現地では、削平を受けた部分をⅠ区、南辺の中世面遺存部分をⅡ区と呼称した。

調査は、人力によるⅠ区調査壁の整形と調査坑底の精査から着手した。精査後、古墳時代以前と考えられる砂層の堆積を確認し、ここを3面として掘削を行った。調査が進むに従って3面砂層は弥生時代後期～古墳時代前期の自然流路に伴う堆積層であることが判明し、記録を取って調査を終了した。

図2　調査区配置図

引き続いてⅡ区の調査に移行し、中世面の遺構調査古墳後期遺物包含層の精査・記録、次いで３面砂層の検出・記録といった手順で調査を進め、平成21年５月19日には現地での全調査工程を終了した。

測量に当たっては、調査地周辺の道路に打設された鎌倉市４級基準点「H136」と「H137」の関係から開放トラバース測量を行い、国土座標系に準じた平面座標軸を調査敷地内に移設し、主に光波測距儀を用いて平面図の作図を行った。標高については鎌倉市３級基準点「53209」を原点とし、ここから調査区内にレベル基準点を移設して使用した。なお、現地調査では日本測地系に準じた任意の座標値を設定して用いたが、本報告を作成するに当たって世界測地系の座標値に表記を改めた。座標値の変換には、国土地理院が公開する座標変換ソフト・「Web版TKY2JGD]を使用した。

第三章　基本土層

本調査地における堆積土層は、大まかに以下のように類別される。

Ⅰ層　暗灰褐色土　表土層。現代の造成土。標高11.3 ～ 11.6ｍ。
Ⅱ層　褐色土　粘質土。上面に土丹粒の多い薄層が載る。標高10.4 ～ 11.3ｍ。上面を１面とする。
Ⅲ層　黒灰色土　粘質土。炭化物粒多い。古墳時代後期～平安時代の遺物包含層。標高10.1 ～ 10.4ｍ。上面を２面とする。
Ⅳ層　暗灰色土/灰黄色砂　粘質土と砂の互層を基調とする。下位に自然木の集積箇所が見られる。標高9.0ｍ以下～ 10.4ｍ（深さ不明）。上面を３面とする。

Ⅲ層・Ⅳ層は概ね北から南へ向けて落ち込むことが確認されている。Ⅳ層については自然流路による堆積層と考えられ、調査区の南外へ向けて急激に落ち込むことが断面観察から看取できた。Ⅳ層の北側上部は概ね水平堆積といえる状況を呈し、流路埋没後は北側ほど乾陸化の進行が速く、Ⅱ区から試掘坑に続く窪地地形が遅れて埋没した状況を看取できた。古墳後期以降に形成されたⅢ層は、この窪地上に堆積したものである。後世の削平もあって、Ⅰ区ではⅢ層の広がりを確認できなかった。

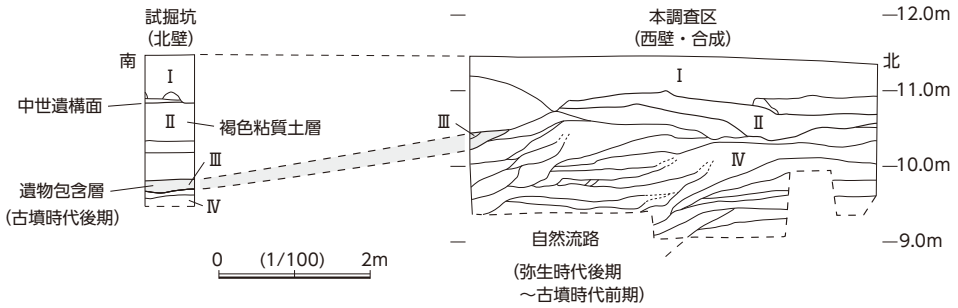


図３　堆積土層模式図

第四章　発見された遺構と遺物

本章では、上層で確認された順に発見された遺構と遺物について記述する。遺物の出土数・観察内容については、表1・2を参照されたい。

1．中世

中世の遺構面は現地表下60㎝の標高11.3ｍ付近で検出された（1面）。先述のように検出はⅡ区に限定されるものであった。図4の上段に全体図を示した。

遺構1

Ⅰ区北西角付近で検出された。掘り込み面（確認面）を削平によって失っており、平面プランの確認はⅣ層中で行った。直径1.5ｍ以上の弧状プランを確認したが、遺構の大部分が調査区東外へ続くため、詳細な規模・形態については不明である。筒状の断面形を呈し、一部オーバーハングする。規模・形状から、井戸址の可能性がある。

図6－1は本址から出土した平瓦の小片。胎土は緻密で、永福寺女瓦A類に近似する。

遺構2

南辺部の1面上で検出された、南北に走る溝状遺構である。上幅80㎝、下幅30㎝、残存長110㎝を測る。南側は調査区外へ延び、北側は削平によって失われていた。確認面からの深さは40～50㎝で、底面の標高は検出された北端部で10.7ｍ、南端部で10.5ｍを測る。

図6－2～4に本址からの出土遺物を示した。2は手づくね成形、3・4はロクロ成形のかわらけ。

図6－5～6は遺構外および確認調査時の出土。5は常滑甕の口縁部片、6・7はロクロ成形かわらけ。

2．古墳時代後期～平安時代

基本土層のⅢ層からは、古墳時代後期～平安時代の土器が出土した。細別層で見ると、前者の土器は52・54層から一定量が、後者の土器は52層から1点のみ出土している。また、さらに上位の28層からは8世紀前葉の所産とみられる須恵器坏（湖西産か）出土している。図5に垂直分布状況を示し、表2に出土層位を記載している。平面図は、図4の下段に3面流路と併せて掲載した。

図6－9が平安時代初め（9世紀前葉）の相模型土師器坏。8～21は古墳後期の所産となる須恵器・土師器である。

3．弥生時代後期～古墳時代前期

図6－22～25の土器が当該期の所産である。22・23は54層より下位での出土だが、その他は古墳後期の54層中から出土したものである。22の坩形土器以外は、甕形土器の小片である。この他、26・27の石製品も、出土層位から当該期または古墳後期の所産と考えられる。

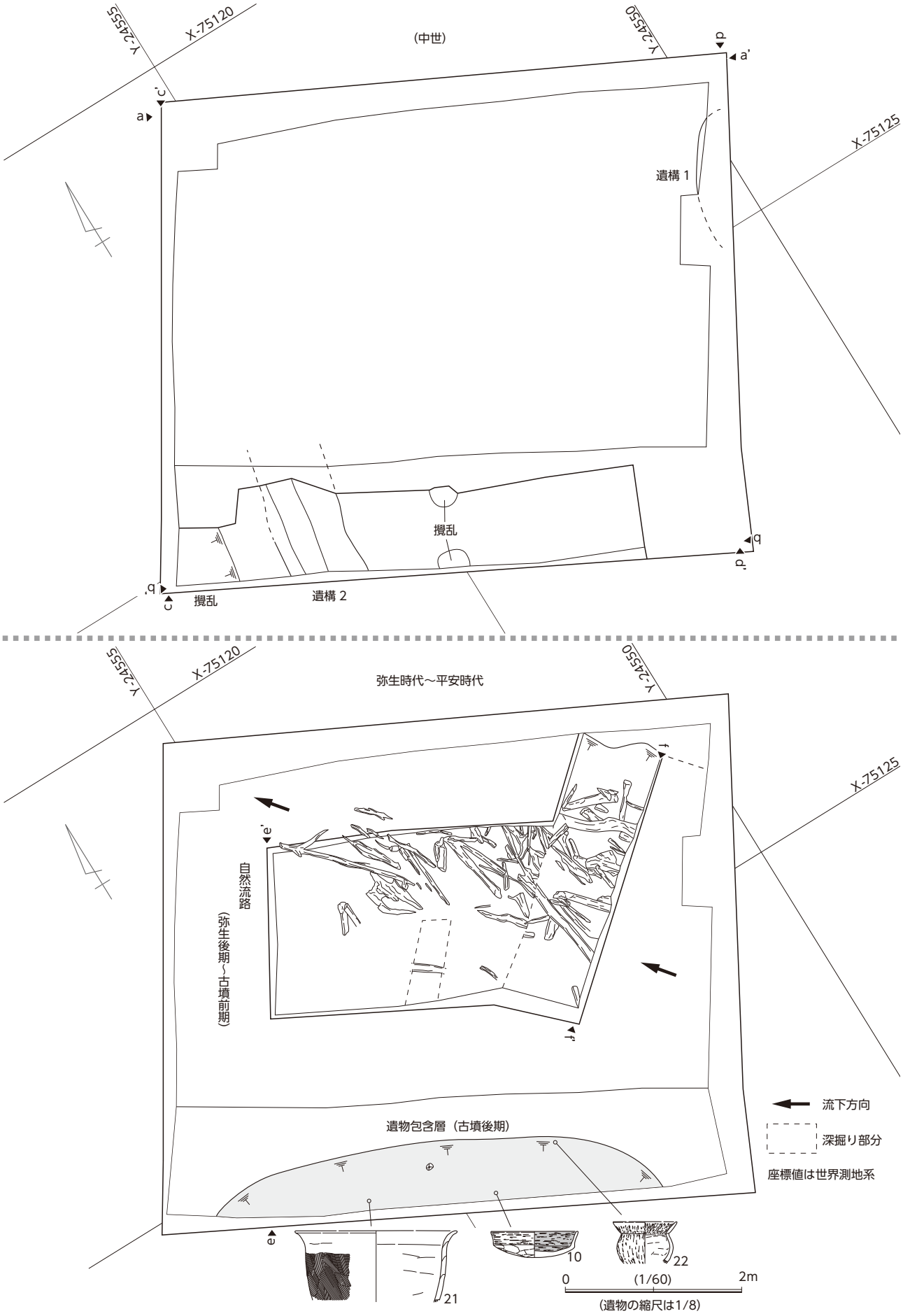

(中世)
X-75120
Y-24555
Y-24550
X-75125
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
遺構 1
遺構 2
攪乱
攪乱
弥生時代～平安時代
自然流路
(弥生後期～古墳前期)
e
e'
f
f'
遺物包含層（古墳後期）
流下方向
深掘り部分
座標値は世界測地系
10
21
22
0
(1/60)
2m
(遺物の縮尺は1/8)

図４　検出遺構全体図

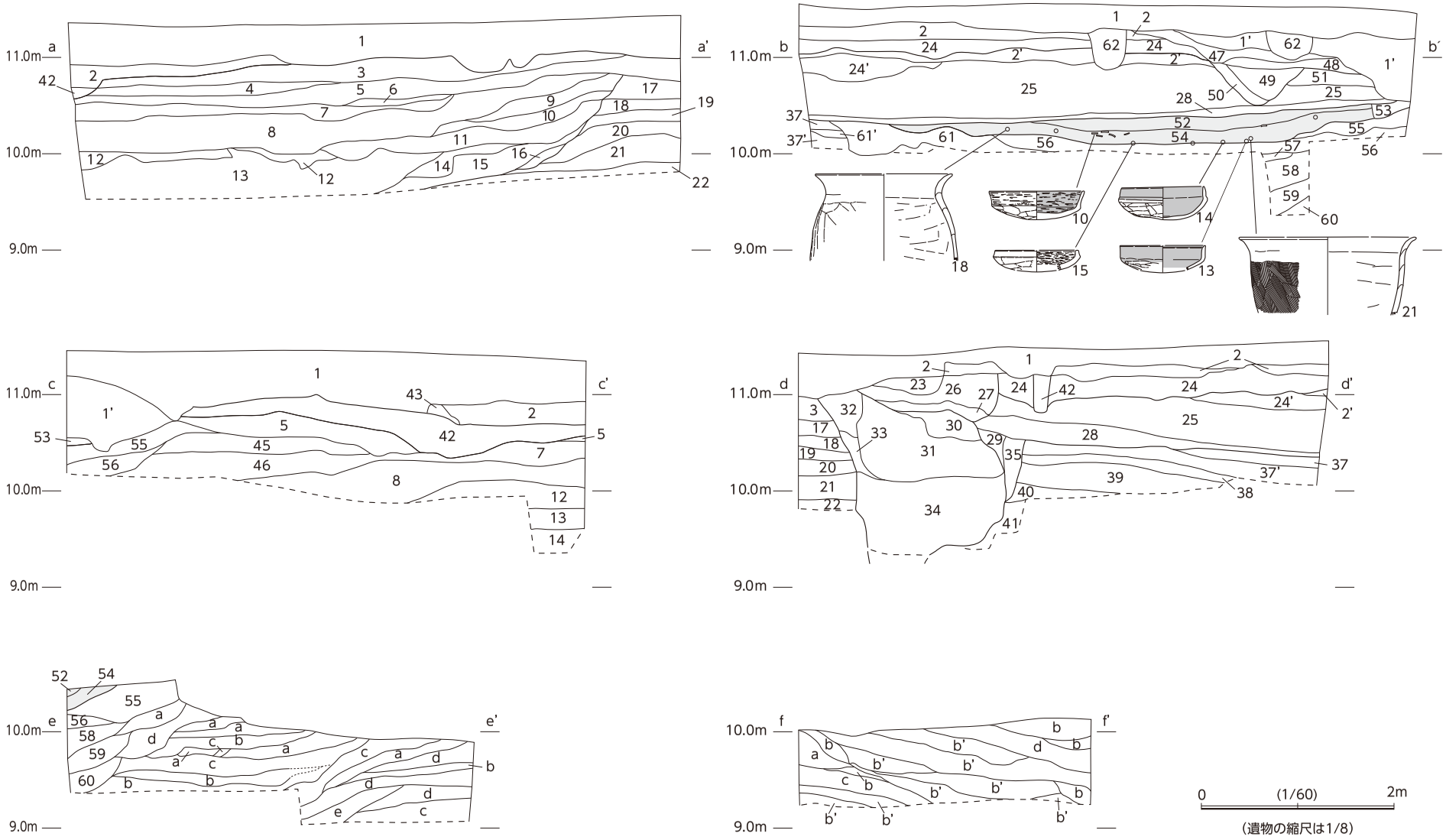


図5　堆積土層図

調査区セクション図土層説明（図5）

1	暗褐色土	表土 。しまり弱い。
1´	暗褐色土	土丹多量。
2	暗褐色土	土丹粒少量。しまりあり。
2´	暗褐色土	2層より土丹粒やや多量。
3	黄褐色砂	しまりよわい。腐植土少量。
4	黄褐色砂	3層よりしまりやや強い。
5	黄褐色砂	しまりやや強い。粘質土やや多量。
6	暗褐色土	地山ブロック主体。しまり、粘性あり。
7	黄褐色砂	しまりよわい。褐鉄粒少量。
8	黄褐色砂	褐鉄ブロック多量。粘質土帯状に入る。
9	黒褐色土	地山粘質土の二次堆積土。しまり、粘性あり。白色微砂目立つ。
10	黒褐色土	しまり、粘性あり。砂質土ブロックやや多量。
11	黄灰色砂	しまり弱い。灰色粘質土均質に含む。
12	黄褐色砂	褐鉄層。硬化顕著。
13	灰褐色砂	微細砂。しまり弱い。粘質土均質に含む。
14	黄褐色砂	しまりあり。粘質土やや多量。
15	黄褐色砂	微細砂。上面褐鉄化。しまりあり。
16	黄褐色砂	微細砂。15層よりしまり強い。
17	黄灰色砂	微細砂。褐鉄粒少量。
18	黄灰色砂	17層より微細な砂。しまり弱い。
19	黄灰色砂	18層よりやや粗粒の砂。褐鉄化のためしまり強い。
20	黄灰色砂	18層と同程度の微細砂。褐鉄化のためしまり強い。
21	黄灰色砂	やや粗粒砂で黒灰色砂と縞状互層を呈す。褐鉄化のためしまり強い。河床砂？
22	暗灰色砂	微細砂。還元化。
23	暗褐色土	砂粒多量。
24	灰色土	粘質土。しまり、粘性強い。酸化顕著で、縦方向の褐鉄帯が数条入る。
24´	灰色土	粘質土。部分的に砂質土の間層が入る。
25	灰色土	粘質土。24層より酸化の程度が弱い。炭粒微量。
26	暗黄褐色砂	しまりあり。粘質土やや多量。土丹粒少量、炭粒微量。
27	暗黄褐色砂	しまりあり。26層より土丹粒・炭粒減る。
28	暗黄褐色砂	しまり強い。褐鉄帯が数条入る。
29	淡灰黄色砂	微細砂。粘質土を均質に含む。炭粒微量。
30	淡灰黄色砂	しまりあり。土丹塊多量。
31	淡灰黄色砂	土丹塊・粒非常に多い。炭粒少量。
32	灰黄色土	砂質土。地山の黒色粘質土を均質に含む。しまりあり。炭粒微量。
33	淡灰黄色砂	微細砂。炭粒微量。
34	暗灰色土	粘質土を均質に含む。土丹粒多量。
35	暗灰黄色土	粘質土。しまり弱い。
36	暗灰黄色土	粘質土。微細砂多量。褐鉄化のため強く硬化。
37	灰色土	砂質土。砂の間層が部分的に入る。
37´	灰色土	砂質土。砂の間層が目立つ。
38	黒灰色土	粘質土。37層よりしまり強い。砂の縞状互層が入る。
39	黒灰色土	粘質土。しまりあり。微細砂多量、炭粒ごく微量。
40	黒灰色土	粘質土。上面は褐鉄化した砂層で、部分的に砂の間層が入る。炭粒微量。
41	黒灰色土	粘質土。灰色微細砂含む。腐食木質やや多量。
42	暗褐色土	しまりあり。土丹塊多量。
43	暗褐色土	土丹粒少量、褐鉄ブロック多量。
44	暗灰褐色土	微細砂多量、土丹粒少量。
45	黄褐色砂	酸化のためしまり強い。粘質土均質に含む。
46	淡灰黄色砂	酸化のためしまり強い。粘質土が帯状に入る。
47	暗灰色土	砂質土。土丹粒少量。
48	暗灰色土	土丹粒少量。
49	暗褐色土	土丹粒やや多量。
50	暗褐色土	砂質土。
51	暗灰褐色土	砂質土。しまり強く、土丹粒微量。
52	暗灰色土	粘性・しまりともに強い。炭粒少量。古墳後期～平安前期の遺物包含層。
53	暗灰褐色土	しまり強い。灰黄色砂多量。
54	黒灰色土	粘性ややあり、締り弱い。炭粒非常に多い。古墳後期の遺物包含層(多量)。
55	暗灰色土	砂質土。しまりややあり。
56	暗灰色土	粘質土。しまりあり。砂粒やや多量。
57	暗灰色土	砂質土。北に向けて灰黄色・粘性を帯びた土に漸移する。
58	暗灰色土	砂・粘質土の互層。北に向けて粘性を強く帯びる。

59　暗灰色土　　砂と粘質土の混交土。土丹粒少量。
60　暗灰色砂　　ベースは砂で、粘質土多量含む。
61　暗灰色土　　砂質土。水磨した土丹粒多量。
弥生後期～古墳前期の遺物包含層（少量）。
61´暗灰色土　　砂質土。水磨した土丹粒少量。
62　灰黄色土　　土丹塊充填。攪乱。

２面下河川堆積層　土層分類

a　黄色砂・灰黄色砂　やや粗い砂。
b　暗褐色土　腐食質土。弱粘質土。
b´　暗褐色土　腐食質土。弱粘質土。木片多量。
c　灰色砂　微細砂。しまり弱い。
d　灰色砂・黒灰色砂　中粗砂と微細砂の縞状堆積。しまり弱い。
e　灰褐色砂　粗砂。砂礫・水磨した土丹粒少量含む。

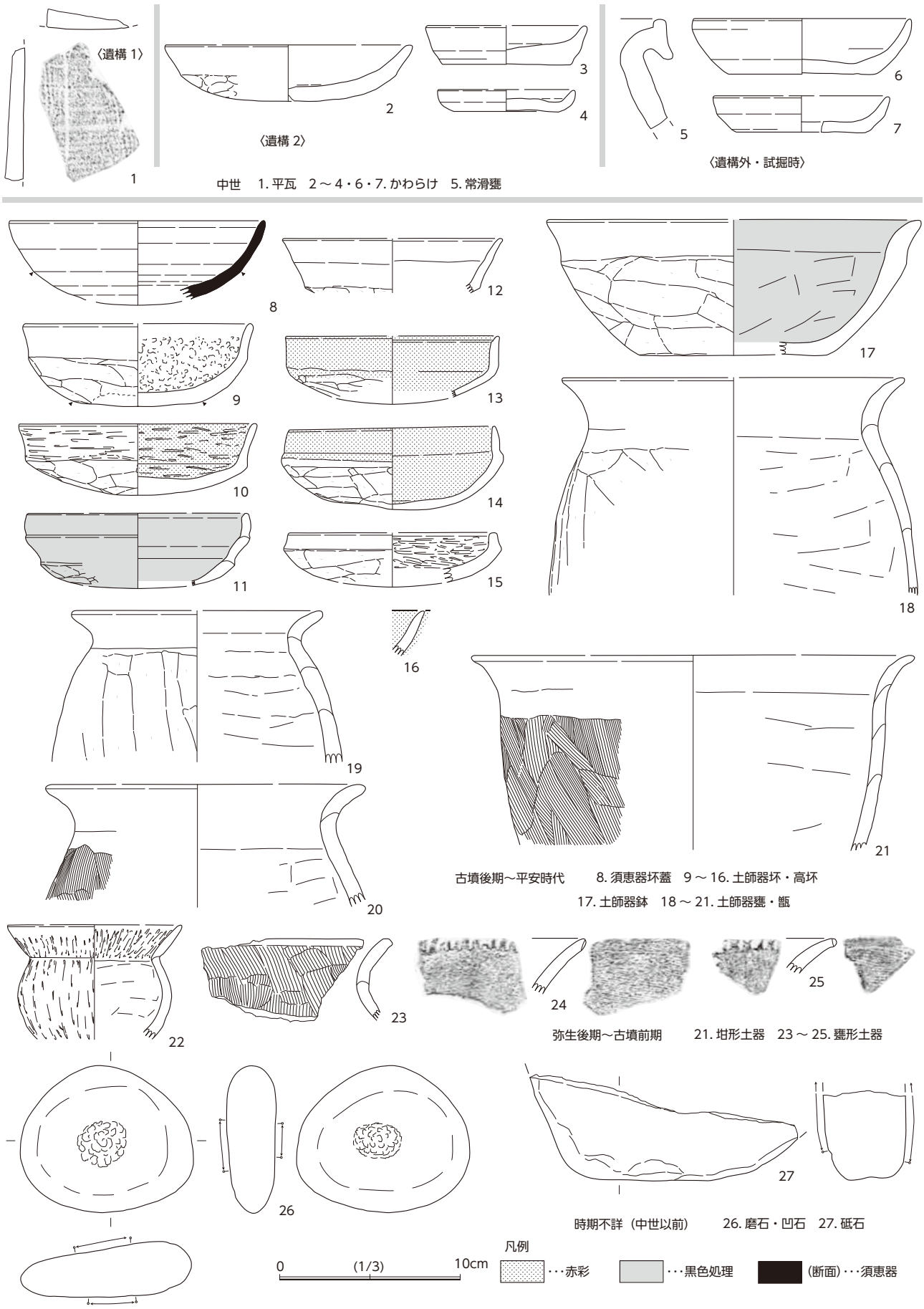

〈遺構 1〉
〈遺構 2〉
〈遺構外・試掘時〉
中世　1. 平瓦　2～4・6・7. かわらけ　5. 常滑甕
古墳後期～平安時代　8. 須恵器坏蓋　9～16. 土師器坏・高坏
17. 土師器鉢　18～21. 土師器甕・甑
弥生後期～古墳前期　21. 坩形土器　23～25. 甕形土器
時期不詳（中世以前）　26. 磨石・凹石　27. 砥石
凡例
0　(1/3)　10cm
・・・赤彩
・・・黒色処理
(断面)・・・須恵器

図6　出土遺物

表1　出土遺物カウント表

地区	面	出土位置	層位	青磁	白磁	瀬戸	常滑		かわらけ						瓦			
				碗	碗	片口鉢	甕	片口鉢	ロクロ			手づくね			平瓦		丸瓦	
						Ⅰ類		Ⅰ類	大	小	不明	大	小	不明	A類	不明	A類	D類
試掘		試掘坑					5	1	3	4	11				1			
試掘		試掘坑	古代層															
1区		残土					2		2		4	1					1	
2区		表土	表土				2	1		12	13	6	1					
1区	1面	遺構1													1			
2区	1面	遺構2		1	1	1	8	1	20	19	27	13	3		1	4		1
2区	1面下		25層															
2区	1面下		28層															
2区	2面		52層															
2区	2面下		54層															
2区	2面下	南壁	56層															
2区	2面下		59層															
2区	2面下		包含層															
1区	3面	流路	下層															
不明																		

地区	面	出土位置	層位	古墳後期～平安時代					弥生後期～古墳前期								近世			
				土師器				須恵器	土器					石製品		その他	陶器			磁器
				甕	坏	高坏	鉢	坏蓋	壺	坩	甕	鉢	不明	磨石	砥石		皿	擂鉢	他	碗
試掘		試掘坑									2		36							1
試掘		試掘坑	古代層	2			2		1		1									
1区		残土																	1	
2区		表土	表土										4						1	
1区	1面	遺構1									1									
2区	1面	遺構2															1	1		1
2区	1面下		25層		1				1											
2区	1面下		28層	91	22		1	1	2		3			1	1					
2区	2面		52層	4	2	1	1		1											
2区	2面下		54層	20	13											獣骨2				
2区	2面下	南壁	56層	2	2															
2区	2面下		59層	4	1				1		4	2				木杭2				
2区	2面下		包含層							1										
1区	3面	流路	下層								1		3			桃核1				
不明											1									

表２　出土遺物観察表

番号は図６に対応

番号	種別	器種	法量（cm）			産地	時期	その他の特徴
			口径	底径	器高			
1	瓦	平瓦	[7.9]	[4.4]	[1.2]	北武蔵か	中世	凸面小片　凸面糸切り+縄目ﾀﾀｷ痕　胎土：石英微粒微量、精緻１面遺構１
2	土器	かわらけ	(13.5)	—	3.1	在地	13世紀中葉	1/6　手づくね・大皿　胎土：白色針状物質微量　１面遺構２出土
3	土器	かわらけ	(8.7)	(7.1)	2.2	在地	13世紀代	1/3　ロクロ・小　胎土：白色針状物質微量　１面遺構２出土
4	土器	かわらけ	(7.5)	(5.8)	1.2	在地	13世紀代	1/4　ロクロ・小　胎土：白色針状物質・角閃石微量　１面遺構２出土
5	陶器	常滑　甕	—	—	—	知多	13世紀第４四半期	口縁部小片　AN6b型式（赤羽・中野1994）　試掘時出土
6	土器	かわらけ	12.0	8.2	3.1	在地	13世紀後半～14世紀代	3/5　ロクロ・小　胎土：白色針状物質・角閃石微量　試掘時出土
7	土器	かわらけ	(9.6)	(7.2)	2.0	在地	13世紀後半～14世紀代	1/4　ロクロ・小　胎土：白色針状物質　Ⅱ区表土出土
8	須恵器	坏蓋	(14.0)	—	4.7	湖西か	８世紀前葉	1/3 口縁部外面～内面全面ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　天井部外面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　Ⅱ区28層下端出土　湖西Ⅳ-1 ～２期（後藤1989）
9	土師器	坏	(12.5)	(7.2)	4.7	在地　相模型	９世紀前葉	1/3　口縁部外面ﾅﾃﾞ　内面全面剥落痕顕著　外面体部ﾖｺﾍﾗｹｽﾞﾘ、底部ﾍﾗｹｽﾞﾘ　Ⅱ区52層出土
10	土師器	坏	13.2	—	4.0	在地	古墳後期	3/4　坏蓋模倣　内面全面赤彩　口縁部外面～内面全面ﾖｺﾐｶﾞｷ　体部～底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ　Ⅱ区54層出土
11	土師器	坏	(12.2)	—	[4.0]	北武蔵有段口縁	７世紀前半	1/6　坏蓋模倣　全面黒色処理　口縁部外面～内面全面ﾖｺﾅﾃﾞ　体部～底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ　Ⅱ区54層下端出土　第Ⅳ段階（田中1991）
12	土師器	坏	(12.0)	—	[3.0]	在地	古墳後期	口縁部1/4　坏蓋模倣　口縁部内外面ﾖｺﾅﾃﾞ　体部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ　Ⅱ区52層出土
13	土師器	坏	(11.8)	—	[3.4]	北武蔵比企型	７世紀前半～中葉	1/4　口縁部外面～体部全面ﾅﾃﾞ・赤彩　体部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ　Ⅱ区54層出土　Ⅲ～Ⅳ段階（水口1989）
14	土師器	坏	11.4	—	[3.9]	在地	古墳後期	略完形　坏身模倣　口縁部外面～前面ﾅﾃﾞ・赤彩　体・底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ（一部黒斑）　Ⅱ区56層出土
15	土師器	坏	(11.5)	—	[2.8]	在地	古墳後期	口縁部1/4　坏身模倣　口縁部外面ﾖｺﾅﾃﾞ　内面全面ﾖｺﾐｶﾞｷ　Ⅱ区54層出土
16	土師器	坏	—	—	[2.5]	在地	古墳時代？	口縁部小片　口縁内外面赤彩　胎土：角閃石微量、精緻　Ⅱ区59層出土
17	土師器	鉢	(20.5)	(10.2)	[7.6]	在地	古墳後期	口縁～底部1/4　口縁部内外面ﾖｺﾅﾃﾞ　体部外面ﾖｺﾍﾗｹｽﾞﾘ、内面黒色処理・ﾍﾗﾅﾃﾞ　底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ　試掘古代層出土
18	土師器	甕	(18.8)	—	[12.0]	在地	古墳後期	口縁～胴上部1/4　口縁部内外面ﾖｺﾅﾃﾞ　胴部外面ﾀﾃﾍﾗｹｽﾞﾘ、内面ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・黒変　胎土：白色針状物質多量　Ⅱ区54層出土
19	土師器	甕	(13.6)	—	[8.4]	在地	古墳後期	口縁～胴上部1/4　口縁部内外面ﾖｺﾅﾃﾞ　胴部外面ﾀﾃﾍﾗｹｽﾞﾘ、内面ﾖｺﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ　胎土：白色針状物質微量　Ⅱ区28層下端出土
20	土師器	甕	(18.0)	—	[6.8]	在地	古墳後期	口縁～胴上部1/8　口縁部内外面ﾖｺﾅﾃﾞ　胴部外面ﾀﾃﾊｹ、内面ﾅﾃﾞ　胎土：白色針状物質多量　Ⅱ区54層出土
21	土師器	甕（甑？）	(24.4)	—	[10.9]	在地	古墳後期	口縁～胴上部1/6　口縁部内外面ﾖｺﾅﾃﾞ　胴部外面ﾀﾃﾊｹ、内面ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ　胎土：白色針状物質多量　Ⅱ区54層出土
22	土師器	坩	(9.6)	—	[6.3]	在地	弥生後期～古墳前期	口縁～胴部1/4　口縁部内外面～胴部外面ﾀﾃﾐｶﾞｷ　胴部内面ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ　２面下包含層出土
23	土器	甕	—	—	[4.6]	在地	弥生後期～古墳前期	口縁部小片　口縁部外面ﾀﾃﾊｹ、内面ﾅﾃﾞ　胎土：白色針状物質微量　Ⅱ区59層出土
24	土器	甕	—	—	[3.1]	在地	弥生後期～古墳前期	口縁部小片　口唇部ｷｻﾞﾐ　口縁部外面ﾀﾃﾊｹ、内面ﾖｺﾊｹ　胎土：角閃石微量　Ⅱ区54層下端出土
25	土器	甕	—	—	[2.0]	在地	弥生後期～古墳前期	口縁部小片　口唇部ｷｻﾞﾐ　口縁部外面ﾅﾃﾞ、内面ﾖｺﾊｹ　胎土：白色針状物質・角閃石微量　Ⅱ区54層下端出土
26	石製品	磨石	9.6	8.1	2.7			完存　350g　Ⅱ区54層下端出土
27	石製品	砥石	[14.8]	[5.2]	[4.6]			1/2以下　[507g]　Ⅱ区54層下端出土

参考文献

赤羽一郎・中野晴久　1995「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』　小学館

後藤建一　1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡　本文編』

田中広明　1991「古墳時代後期の土器生産と集落への供給―有段口縁坏の展開と在地社会の動態」『埼玉考古学論集』　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

水口由紀子　1989「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古　7』　東京考古談話会

第五章　調査成果のまとめ

１．中世

本地点では中世遺構面の大部分が削平されていたため、当該期における遺跡の性格が読み取れるだけの成果を得るには至らなかった。遺構としては小規模な南北溝と井戸跡の可能性を持つ土坑が検出しており、数少ない出土遺物は概ね13世紀前半～中頃の特徴を備えている。遺構外出土遺物には14世紀代にまで下る様相を看取でき、少なくとも13世紀～ 14世紀の前半にかけて、本地点周辺での人的営為を見て取ることが可能である。中世遺構面は１枚のみで、この前段階においては湿地的様相を示す粘質土の堆積があることから、本地点における中世の開始期は概ね13世紀代の範囲で把握できる。本地点は勝長寿院が占地する大御堂ヶ谷の開口部東に位置し、同寺の建立がなされた12世紀の末頃には周辺の開発も一定程度は進んだものと推測される。こうした歴史的事象をも加味して遺物様相を再瞥すれば、本地点の中世開始期を13世紀前半まで引き上げて考えても大過はないといえるだろう。14世紀以降については、近隣の調査地点（図１－１・３・14など）で15世紀代に下る時期の遺構・遺物が発見され、地点１・３では「田楽辻子」の前身と考えられる15世紀代の東西道路跡が発見されている。関東管領に就いた上杉氏四家のうち、犬懸上杉と宅間上杉の二家が東西道路に面した谷戸内に拠点を構えたという事象からも、南北朝・室町時代に入った後も関東における政権機能の一端が当地域に保持されたことは疑いない。本地点では、これを追認する成果はなかったが、今後も周辺の調査により中世後期における都市鎌倉の実態を明らかにする上で意義ある情報が提供されることだろう。

田楽辻子周辺遺跡における調査は鎌倉旧市街域の中でも発掘調査の頻度が少なく、本地点と同様、個々の調査面積も狭小なものが大半を占める。よって、これらの諸成果を相互に関連付けながら地域的特性を語るには、現時点では材料不足と述べざるを得ない。調査・報告の蓄積が待たれるところである。

２．中世以前

本地点の調査では、Ⅱ区および試掘調査において古墳時代後期～平安時代の遺物包含層が確認され、とりわけ古墳後期の土器類について一定量の資料を得ることができた。

古墳時代後期の遺物は細別層の54層を中心に出土した。同層中には炭化物粒子が多く含まれており、遺物の出土量・遺存具合から見て、ごく近い場所での人的営為を示す資料群といえる。出土遺物の内訳としては土師器の坏・甕が多く主体的な組成要素であることを示し、土師器の甑や須恵器の坏蓋などが客体的な在り方を見せている。土師器の坏には幾つかの型式が見られる。基本形は須恵器の坏蓋を模倣した有稜形（図６－10 ～ 13）と、須恵器坏身の模倣形（同14・15）に大別される。その中でも在地産と搬入土器とに分かれ、多様な在り方を見ることができる。図6－11は黒色塗彩を施した有段口縁坏で、埼玉県の中・北部から群馬県南部にかけて中心分布圏を持つ。13の比企型坏は埼玉県の中部を中心に関東一円に展開する。14・15の坏身模倣形坏は房総半島地域に特徴的な器形で、彼地からの搬入品であるのか、在地において模倣したものであるのかは定かでない。数量的に限られた資料群ということもあるが、土師器坏の中で主体的な型式を抽出することは難しい。土師器の甕には、胴部外面に縦方向のヘラケズリ調整を施すもの（図６－18・19）と、ハケ目調整のもの（20）がある。どちらが主体的存在となるのかは、やはり資料数が限定されるため断じ得ないが、地域的な傾向としてケズリ調整の甕が優勢となることが田尾誠敏氏の分析によって示されている（田尾2009）。遺物包含層からの出土ということで多少の年代幅が想定でき、これら土師器の製作・使用年代は概ね７世紀前半～中葉と考えられる。須恵器の坏（図６－８）については、８世紀代まで下る、やや新しい年代観が与えられる。

以上のうち、土師器供膳具（坏類）の組成内容は三浦半島から鎌倉平野に一定程度の共通性が見られ、

のちの律令期にあって同じく相模国に編入される相模川流域とは異なる様相を示している。比企型坏については相模川流域でも古墳や横穴墓を中心に出土例は少なくないが、有段口縁坏や坏身模倣の土師器坏についてはより分布域が限定されることが先行研究によって指摘されている。田尾氏は、比企型坏も含めた搬入系の土器は、それぞれの製作地および中心分布圏となる埼玉県の中・北部域を供給源として、元荒川－東京湾を介して三浦半島ないしは鎌倉平野までもたらされたとする、流通経路の復元を行っている。坏身模倣坏についても、東京湾を介した房総半島との地域間交流を背景に捉えている。こうした水上交通を前提とした他地域との人的交流・流通は、各地域の首長間ネットワークを背景に形成されたもので、それは後代の律令期になっても地域的伝統として継承されることが、中三川昇氏によって指摘されている（田尾2009・中三川2009）。市内山崎の天神山裾部では一括性の高い当該期資料が採集され、三浦半島の東京湾岸地域における土器様相・組成との近似性が指摘されている（菊川1995）。

細別52層からは古墳時代後期の土器に加えて、相模型の土師器坏も1点出土している。器表の摩滅・剥離が目立ち調整が判然としない部分もあるが、器形・法量から8世紀末～9世紀前葉の所産と考えられる。土器の出土量からは、7世紀中葉以降8世紀末頃にかけて人的活動が低調であった状況が窺える。

基本土層のⅢ層以下は南に向けて落ち込んでおり、北側を滑川が流れる現況と比べて、当時の地形が大きく異なっていたことは明らかである。Ⅱ層の褐色粘質土層も周辺で見る一般的な中世地山と異なり湿地的様相が強く窺えた。一方で、南に隣接する図1－地点4では標高12.0ｍで中世地山が検出され、本地点の敷地内または南側の現行道路下に堆積の転換点があったことを示している。ちなみに、本地点の中世層下端レベルは標高10.8ｍなので、中世の前段階において、北と南の双方から落ち込んでくる窪地状の地形であったと考えるのが妥当であろう。堆積状況から見て、当該期の遺物は北接する微高地から流入した蓋然性が高く、そこには集落の存在も十分に推測される。

Ⅳ層以下は細砂と粘質土（有機質腐蝕土）の互層堆積をなし、Ⅲ層以上の傾斜度で南へ落ち込む状況が看取できた。調査区内では側壁（岸）の存在は確認できなかったが、堆積ほかの状況から、自然流路の痕跡と判断した。調査Ⅰ区の南側では泥炭化した自然木の集積が確認され、流量の変化に伴う流木と考えられた。堆積土中からは弥生後期～古墳前期の土器片が僅かに出土ており、それ以前に丘陵裾部を流れた河川跡といえよう。現況の地形からも窺えるように、本地点は大御堂ヶ谷および東側の小支谷の開口部に位置し、北に滑川本流という、大小の流れが合流する条件下に置かれている。当然のように、流路変動も重ねられたことだろう。今回の調査結果からは、古墳前期以降に河川の埋没（南への移動）が進んで乾陸化したことが窺え、古墳時代後期～平安時代初頭には、おそらく帯状の低地として残されていたことが捉えられた。そして、現在は滑川が流れる北側の微高地上に、集落の存在を想定しえた。

第二章でも述べたように、本地点周辺では、点的であるが中世以前の遺構・遺物が発見されている。**図1－地点9**では、少なくとも5軒の竪穴住居跡が発見され、古墳時代後期を主体に、中期に遡及する遺構・遺物も確認されたという（註1）。後期の資料は、今次成果と時代的に合致する可能性が期待され、集落構造を具体的に知るためにも重要な事例である。さらに、これに先行する中期資料の存在は、弥生後期末～古墳前期以降、途絶したかにも見える地域社会の動態を見直すきっかけともなるだろう。

註1　調査担当者である馬淵和雄氏のご教示による。
引用・参考文献は、本章分も含めて第一章末尾に掲載した。

1. 2面(52・54層)　検出状況(南から)

2. 2面下遺物出土状況（北から）

3. 2面下土層断面（南東から）

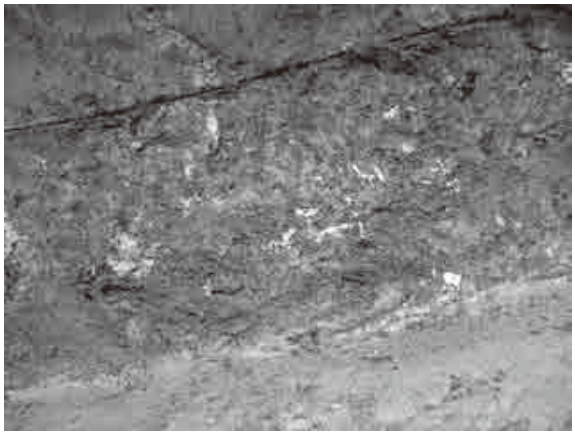
4. 2面下土層断面（北から）

5. 54層遺物出土状況（北から）

6. 54層遺物出土状況（北東から・図6－14）

7. 54層遺物出土状況（北から・図6－21）

図版２

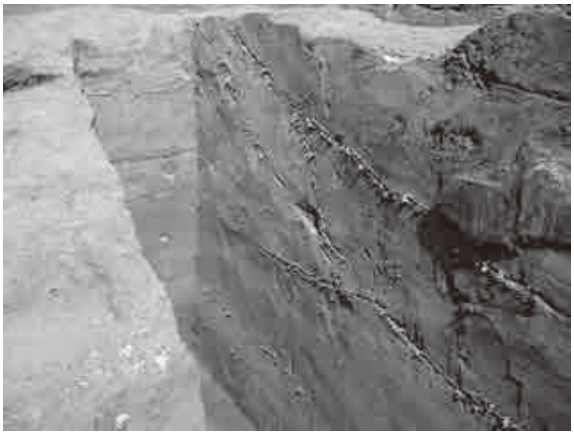


1．54層中貝殻片？混入状況（北東から）

2．２面下遺物出土状況（図６－22）

3．３面流路プラン検出状況（北西から）

4．３面トレンチ流木検出状況（南東から）

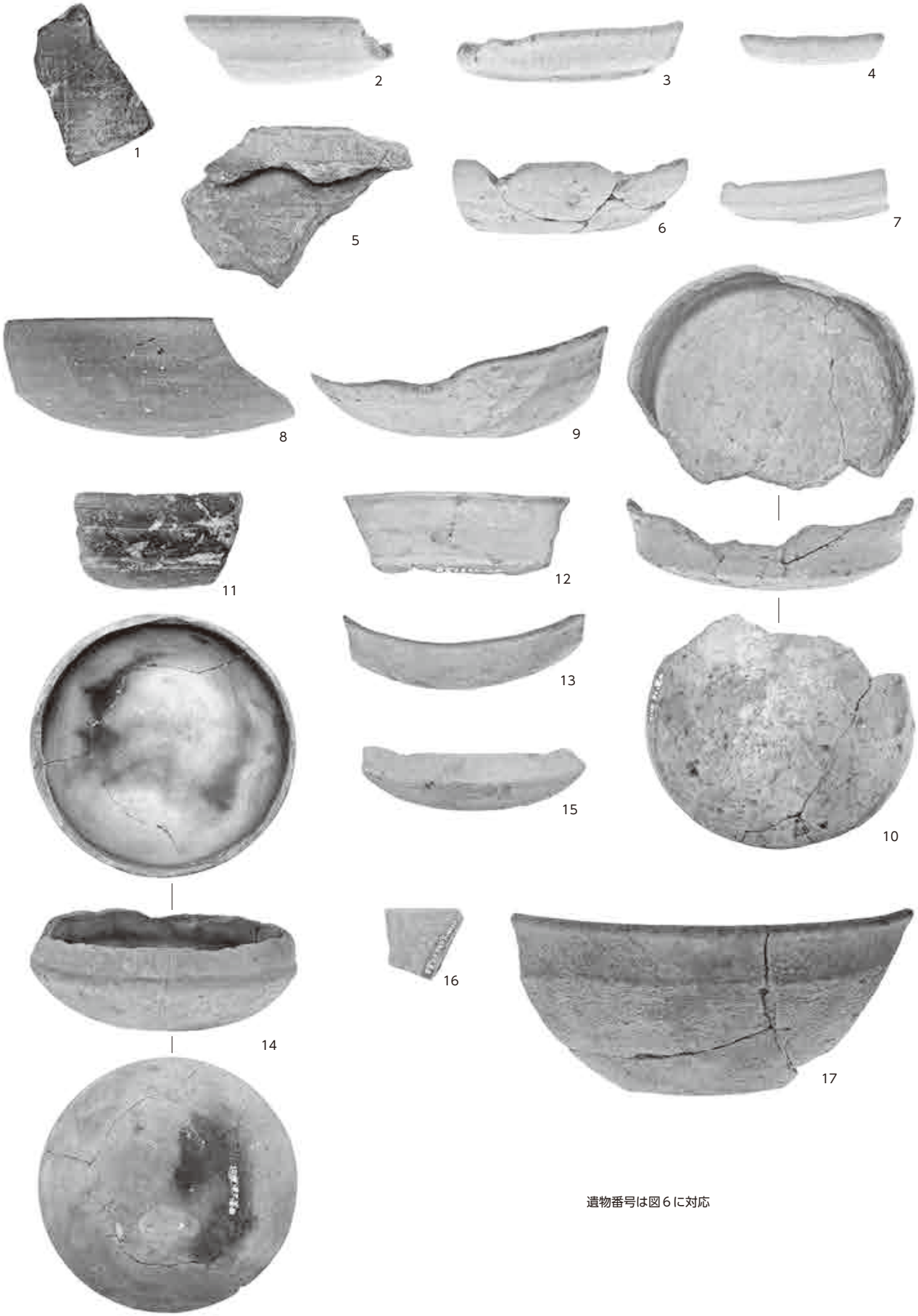


5．３面トレンチ流路北側　土層断面（西から）

6．３面流木検出状況（北西から）

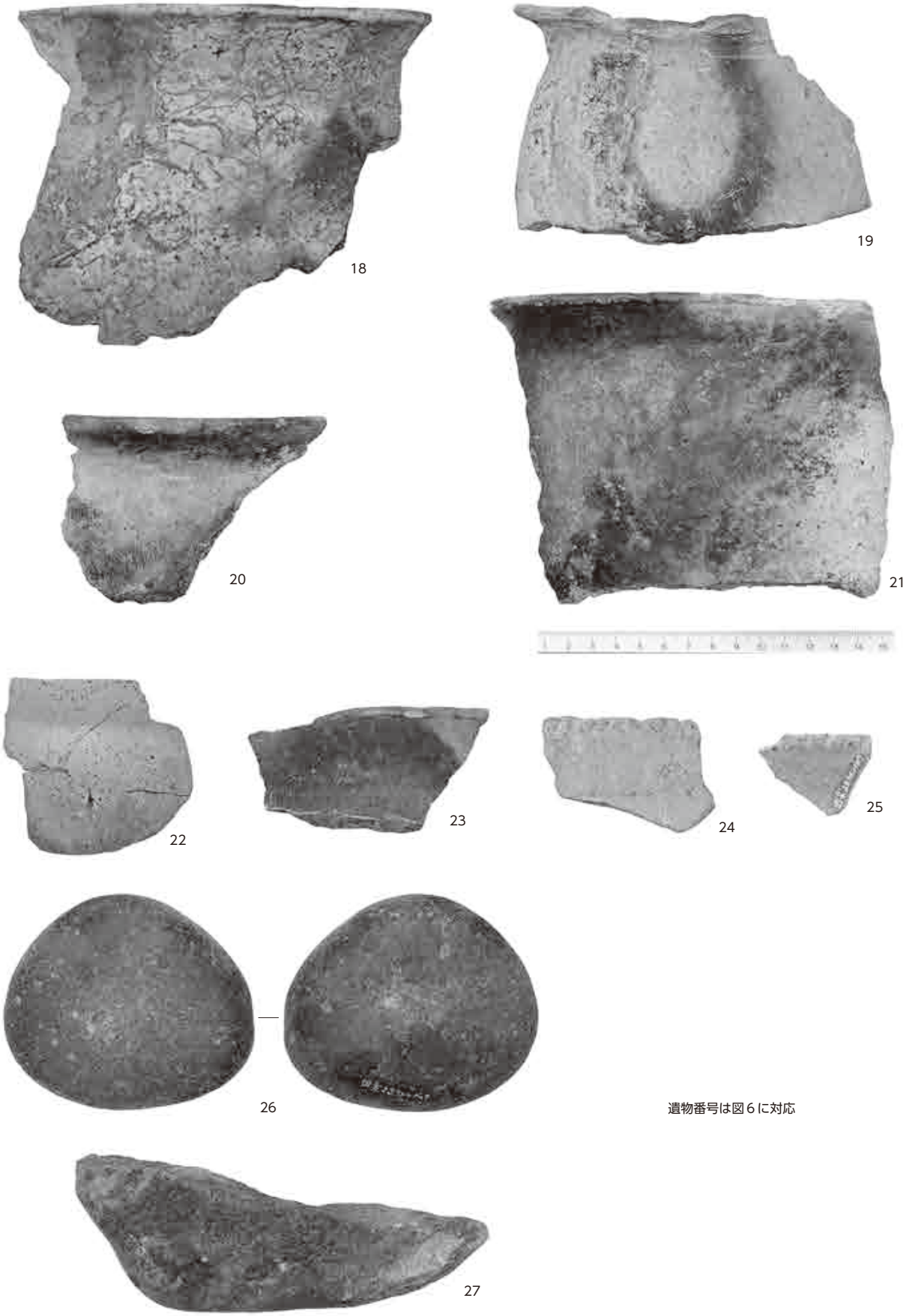
7．３面流木検出状況（南東から）

8．３面流木検出状況（北西から）



遺物番号は図６に対応

出土遺物（1）



遺物番号は図６に対応

出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成２３年度調査報告
巻次	２８（第２分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	伊丹まどか／馬淵和雄・沖元道・根元志保／森　孝子／降矢順子・齋木秀雄／山口正紀／押木弘己
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒２４８－８６８６　鎌倉市御成町１８番１０号
発行年月日	西暦２０１２年3月３０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
せいりょうじあと 清涼寺跡	神奈川県鎌倉市 扇ガ谷四丁目 ５５６番４外	14204	183	３５° ３２′ ９４２″	１３９° ５４′ ６３９″	20050721 ～ 20050930	60.00	個人専用 住宅 （地盤の柱状改良）
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 １５７番７外	14204	201	３５° ３１′ ６８９″	１３９° ５４′ ４６７″	20051031 ～ 20060118	63.75	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
にしみかどいせき 西御門遺跡	神奈川県鎌倉市 西御門一丁目 ５５番５	14204	325	３５° ３２′ ９８７″	１３９° ５６′ １０４″	20060404 ～ 20060529	30.00	個人専用 住宅 （地盤の柱状改良）
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 ２１３番１２	14204	201	３５° ３１′ ４３９″	１３９° ５４′ ４９４″	20070312 ～ 20070330	10.50	個人専用 住宅 （地下室・地盤の柱状改良）
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町四丁目 １８８８番の一部	14204	231	３５° ３１′ ２９６″	１３９° ５５′ ８４３″	20070702 ～ 20070726	24.00	個人専用 住宅 （地盤の柱状改良）
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 浄明寺一丁目 ５６６番６外	14204	33	３５° ３２′ ２５３″	１３９° ５６′ ３２７″	20090422 ～ 20090519	39.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
せいりょうじあと 清涼寺跡	社寺	中世	溝、道路、土坑	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器、木製品、石製品　等	
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	都市	中世	溝、土坑、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器　等	
にしみかどいせき 西御門遺跡	都市	中世	溝、土坑、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器、木製品、石製品　等	
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	都市	中世	溝、土坑、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器、木製品、石製品　等	
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	都市	中世	土坑、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、国産陶器、木製品、石製品　等	
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	都市	古墳・中世	古墳時代自然流路、溝、井戸、柱穴	土器、かわらけ、国産陶器　等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　２８
平成２３年度発掘調査報告
（第２分冊）

発行日　平成２４年3月３０日

編集・発行　鎌倉市教育委員会
印　　刷　芝浦エンジニアリング株式会社